

連続講座

武蔵野市の市民自治の未来を考える
～新しいパートナーシップのかたち～
(第1回～第3回)

報告書

武蔵野市

目 次

1 連続講座概要

(1) 目 的.....	1
(2) 概 要.....	1
(3) 出演者紹介.....	2

2 連続講座

(1) ① 第1回連続講座.....	7
② 第1回連続講座 参加者アンケート集計結果.....	31
(2) ① 第2回連続講座.....	37
② 第2回連続講座 参加者アンケート集計結果.....	67
(3) ① 第3回連続講座.....	75
② 第3回連続講座 参加者アンケート集計結果.....	103

資 料

① 第1回連続講座チラシ.....	110
② 第2回連続講座チラシ.....	112
③ 第3回連続講座チラシ.....	114

1 連続講座概要

(1) 目的

本市では、平成20年度に「分権時代の自治体運営を考えるシンポジウム」(平成20年12月21日開催)、翌平成21年度には、シンポジウム「武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～」(平成22年1月31日開催)と題して、武蔵野市らしさを大切にしたい新しい自治体運営や市民自治について議論を深めてきた。

平成21年度に開催したシンポジウムのパネルディスカッションでは、市内において、商業振興、まちづくり、健康・福祉の分野で活動している方々に、それぞれの活動内容や地域とのかかわり、課題などをお話いただき、これからの市民、事業者、他の団体、行政等のパートナーシップや、これからの武蔵野市の市民自治の可能性について議論した。

このパネルディスカッションでの議論を深めるため、パネリストを一人ずつゲストスピーカーとして招き、その活動や体験、考えを詳しく語っていただき、その専門分野でのパートナーシップについて考え、異なる分野の話を連続して聴くことで、各分野間を通じた全体的な視点での市民自治の可能性について考える連続講座を開催した。

(2) 概要

◆第1回

- ・ 日時：平成22年3月13日(土) 午後4時～午後5時30分
- ・ 場所：武蔵野市役所 813会議室
- ・ ゲストスピーカー：庄司 幸江(武蔵野赤十字在宅介護支援センター長)
- ・ 参加者数：22名

◆第2回

- ・ 日時：平成22年5月23日(日) 午後2時～午後3時30分
- ・ 場所：かたらいの道 市民スペース
- ・ ゲストスピーカー：下田 和弘(武蔵境活性化委員会委員)
- ・ 参加者数：19名

◆第3回

- ・ 日時：平成22年7月16日(金) 午後7時～午後8時30分
- ・ 場所：武蔵野商工会館 第1・第2会議室
- ・ ゲストスピーカー：森 浩(NPO法人 市民まちづくり会議・むさしの理事)
- ・ 参加者数：24名

◆第1回～第3回コーディネーター

酒井 陽子(市民協働サロンコーディネーター)

(3) 出演者紹介



第1回ゲストスピーカー しょうじ さちえ 庄司 幸江

【主な略歴】

平成6年3月 上智大学文学部社会福祉学科卒業
同年4月 武蔵野赤十字在宅介護支援センターに勤務
平成18年 東京大学医療政策人材養成講座2期生修了
平成20年3月 東京医科歯科大学院医歯学総合研究科修士課程
医療政策管理学コース修了
平成21年4月 武蔵野赤十字在宅介護支援センター長に就任
社会福祉士・主任介護支援専門員・福祉住環境コーディネーター

【主な著書】「あなたの医学書 名医の言葉で病気を治す 脳梗塞」
第8章 患者から生活者へ（富田博樹編著／誠文堂新光社／2009年）

【活動内容】武蔵野赤十字在宅介護支援センターは市内の在宅介護支援センターでは2番目に設置された高齢者の総合相談窓口です。高齢者や障害者を取りまく医療・福祉の環境がめまぐるしく変わる中、市民の皆様が安心して地域での生活が続けられるよう、地域に根ざし、常に身近な存在であることを心がけて参りました。特に担当地区の境南町の皆様とは日頃から境南地域社協の活動、境南地域防災懇談会の活動、民生委員の方々との情報交換会など、地域福祉ネットワーク作りにつとめてまいりました。

また、急性期病院に併設されている在宅介護支援センターの相談員として感じることは、医療機関と地域や市民の皆様との間の信頼関係が薄らいでいることです。急性発症して何とか救命した後、必要な治療を受け、この地域でリハビリや福祉サービスを利用しながら、ご自宅で生活できるような「地域完結型ヘルスケアシステム」にできないかと考えてきました。医療機関や行政、市民の皆様とこの地域での新しい信頼関係を構築すること・新しい在宅療養の仕組みを作ることに取り組み始めています。



第2回ゲストスピーカー しもだ かずひろ 下田 和弘

【主な略歴】

昭和59年3月 拓殖大学経済学部経営学科卒業
昭和59年4月 有限会社 下田園入社
平成10年6月 武蔵野市都市マスタープラン策定委員
平成12年6月 武蔵野市路線商業活性化策定委員会委員
平成12年4月 武蔵境商店会連合会ファミリースタンプ設立委員長
平成16年3月 武蔵野市中心市街地活性化連絡会 委員
平成17年12月 武蔵野市まちづくり活動推進委員会委員
他に、武蔵野市消防団第8分団団員、NPO 法人 日本茶インストラクター協会会員、NPO 法人 バーブレスフック普及協会会員

【活動内容】古くからの地元商店として、商店街活動を通して街の活性化活動に関わってきました。今年10周年を迎える、武蔵境商店会連合会ファミリースタンプ事業は大型店などのやっているポイントサービスだけでなく、地域商店会とお客様や商店同士のコミュニティツールの役割を考えイベント等を行っています。

一昨年より発足した武蔵境活性化委員会の委員として「わくわく元気な街・武蔵境」をスローガンに地域の方々に参加していただき武蔵境の活性化に取り組んでいます。今年4月からのプロジェクト開始に向けて、「ほっとタウン武蔵境」をキーワードに色々な仕掛けを予定しています。

自分たちの住む街はこんな処と自慢したくなる街を目指して活動をしています。NPO 法人バーブレスフック普及協会の会員として、水辺を中心とする自然環境の保全を図る活動や小学校などにビオトープの設置や管理など子どもの健全育成を図る活動もしています。



第3回ゲストスピーカー もり 森 ひろし 浩

【主な略歴】

昭和 61 年 東京大学大学院工学系研究科修了 工学博士
昭和 61 年 (株) 三菱総合研究所入社
平成 2 年
～ 4 年 アジア工科大学院准教授
平成 14 年 市民まちづくり会議・むさしの副代表
現在 三菱総合研究所主席研究員、中央大学大学院公共政策研究科兼任講師、武蔵野市都市マスタープラン改定委員会副委員長
過去に、武蔵野市 21 世紀委員会、都市マスタープラン策定委員会、まちづくり条例検討委員会などに参加

【活動内容】「市民まちづくり会議・むさしの」は、平成 12 年の都市マスタープラン策定に参加した市民が中心となって同 14 年に発足した市民団体で、同 17 年に NPO となりました。武蔵野をさらに住みよいまちにするために、自らが活動することに加え、市民が積極的にまちづくりに参加できる環境をつくろうとしています。今まで、タウンウォッチングやまちづくりフォーラム・研修会、イースト吉祥寺まちづくり提案、地域の方々へのまちづくり出前講座、まちづくり条例に関する調査・啓蒙活動などを行ってきました。現在は、コミセン協議会や地域の方々の御協力を得て、市役所と協働で都市マスタープランの改定作業を進めています。



コーディネーター さかい 酒井 ようこ 陽子

【主な略歴】

平成19年 3 月 日本社会事業大学大学院博士前期課程福祉経営計画研究科修了
5 月 武蔵野市第四期長期計画調整計画策定委員会副委員長
平成21年 4 月 武蔵野市市民協働サロン コーディネーターとして勤務

ボランティアセンター武蔵野運営委員、NPO法人武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク理事、社会福祉士、介護福祉士

第 1 回 連続講座

(1) 第1回連続講座

ゲストスピーカー：庄司 幸江（武蔵野赤十字在宅介護支援センター長）

会場：武蔵野市役所 813 会議室

○酒井 それでは、早速、始めたいと思います。本日のゲストスピーカー、武蔵野赤十字在宅介護支援センター長の庄司さんをお願いしたいと思います。

今日の進め方ですが、まず最初に、庄司さんから武蔵野市の地域リハビリテーションのシステムの取り組みに向けてのお話をさせていただきます。もし、「これは何?」「このことがわからない」という疑問が出たときや、「そうだ」というような合いの手は、途中で入れていただ



てかまいません。言葉がわからなかったら内容を理解することはできませんので、どうぞ質問をしてください。後半は皆さんとのやりとりということにさせていただきます。

まずは庄司さんのお話に集中していただきたいと思いますので、今日はあえてあらかじめ資料をお配りすることはいたしません。これもちょっと新しい試みなのですが、どうぞご協力いただいて、後ほどアンケートの方で、ご意見をいただければと思っています。

では、庄司さんお願いします。

○庄司 よろしく申し上げます。ちょっと緊張しておりますので、ぜひ皆さん、私が話しているときに「そうだ、そうだ」「うんうん」という顔をして、温かい応援をくださると助かります。どうぞよろしく願いいたします。それから、今日は行政の偉い方もちらほらお見受けするのですが、一参加者と思って私はお話をさせていただきますので、ご容赦ください。

スクリーンには自己紹介を「武蔵野赤十字病院」というふうに書きましたけれども、私の所属は、武蔵野赤十字在宅介護支援センターの職員ということです。1月31日にシンポジウムに関わらせていただいたときに、「武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～」というお題をいただきました。「なぜ福祉分野の私が？」と思いました。今日、私が、医療や福祉の分野で——これでも実は16年この仕事に携わっているわけなのですが——その中で考えてきたこと、気がついてきたこと、そして、実際に実践したことについて、皆様と一緒に考えたいと思います。

医療と福祉という分野というのは、皆さんから言いますと、非常に高圧的で不可侵条約的な、そして、自分からは意見を言うてはいけないのではないかと思うような領域かもしれません。だけれども、病気を負っても、障害を負っても、安心して長く住み続けられる地域といったときには、この分野は欠かせないことだと思います。

さて、今日、皆さんにお伝えしたいことは、「市民が協働するとか、参画するというのはどういうことだろう」ということです。皆さん「行政と話をしても、どうせ変わらない」と思っていっぱいじゃないでしょうか。実は、私もそう思っていました。

これから、私がお伝えするのは、地域の医療従事者、行政、在宅支援者など全く違う箱の中で、市民や患者さんという同じ人を対象にしてきた、そういった場面での協働です。協働というのは、協力をして一緒に働くということです。

今日はいろいろな病気のお話の中でも、脳卒中の地域連携のお話です。この中での登場人物というのは、武蔵野赤十字病院や杏林大学病院のような、救急車が来る、いわゆる第三次救急の医療機関と、在宅療養のコーディネーターや介護保険制度を活用して皆さんから相談を受ける私たち在宅介護支援センター職員、そして、こういった医療政策や地域制度をつくる東京都や保健所、そして武蔵野市です。この大きな三者がどのように話し合いを行って、脳卒中の地域連携をつくっていったかということです。

(パワーポイントの説明) さて、これからお話するのは「脳卒中の地域連携は、どんなふうに話が進んでいたか」という大まかなアウトラインです。

皆様、まず、この地域はどんな地域だと思いますか？例えば、テレビでは、医療崩壊の話になると、よく僻地や山村の映像が出てきたりしませんか。では、ここは僻地や山村かという、そうじゃないですね。ということは、この地域は一体どんな地域なのだろうというふうに背景を理解する必要があるのです。

次に、医療分野、保健分野、福祉分野、そして、市民の立場から見たこの地域の課題は何だろうといったときに、「医者はこちら言う、行政はこちら言う、市民はこちら言う」実は同じ課題について話をしているのだけれども、どうも使っている言葉が違う。使っている言葉が違うために、相手に伝わらない。伝わらないと、相手が「なんだ、結局一緒に協議をするほどの相手ではなかったのではないか」というふうになってしまうことがあります。そのために、相手の文化、言語を理解する必要がありました。文化や背景が違うということは、まるで異国の世界ですよ。このような中で武蔵野市が「医療・保健・福祉」の課題にどう取り組んだのかというのが今日の話の中心です。このプロセスが、これから先いろいろな場面で、私たちが多くの分野の方々と協働するときの「共通の課題解決の方法」につながっていくことだと思っています。

さて、話を戻しますが、この地域はどんな地域なのでしょう？

「背景を理解する」そして、「課題を知る」それから「そこに携わる人々の考え方を知る」いえ、先に、私たちが「市民の感じていることを代弁する」それから、感じていることを伝える。患者と生活者は、医療機関に物申す。このくらいの手順を踏まないと本当のことを私たちは語れないのではないのでしょうか。

まず、皆さんが今感じていることについてちょっとお伺いしたいと思います。

「この地域はどんな地域でしょうか？」

最近、医療についての報道が多くなっていますね。何か気になる報道などはありませんか？特に、医療分野に関する事で最近のテレビ報道などで気になることはありませんか？あまりいい話がトップニュースになることはないですね。「事故」だったりなどが多いですね。

○来場者 「たらい回し」

○庄司 「たらい回し」という報道は多いですね。

○来場者 昨日なのですけれども、看護師さんが入院患者の肋骨を折った。どういう担当

の看護師さんの、——人間関係が複雑化しているのかもしれないのですけれども、——なぜそこまで来て看護師さんが働かなければいけなかったのか。もっと人事面で管理できなかったのでしょうかね。

○庄司 そう思いますね。やはり報道というのは、私たちの知りたいこと全部ではなくて、ある一つのところだけを切り取っているような感じを受けます。

さて、次の質問です。皆さんは最近病院へ通院しましたか？ここ1カ月以内の間に行かれた方は？（会場に挙手を求める。何人か手を挙げる）…大丈夫ですか？では他の質問です。皆さんのなかで、ご家族どなたかの体調のことを心配していらっしゃる方はいませんか？例えば、遠くのお母さんのこと。「ちょっと頭が痛い」と電話越しの近況が続いていると、ただの頭痛じゃなくて、何か大きな病気が隠れているのではないかな？というふうに心配することがありますよね。

では、ほかに知り合いの方が入院した話、最近、知り合いの方がどなたかご入院された方はいらっしゃいますか。（会場に挙手を求める。何人か手を挙げる。参加者に対して）

どのようなご様子ですか？その方は大丈夫でしたか？

○来場者 救急車で運んだのです。かかっている病院が杏林病院だった。救急隊に「杏林病院がかかりつけの医療機関なのです」と言いましたら、救急隊は「杏林病院にはすぐ行けない。幾つか回って探します。」何か勘違いしちゃったようです。とのコメント。

お上はこの地域には幹事病院がある。ここだったら日赤さんが元になっているらしいのですが、回されて昭和病院に回って、それから、杏林にいきました。

○庄司 その方は脳血管障害だったのですか？

○来場者 そうそう。病院をぐるっと回って。最終的には杏林病院に行ったのです。

○庄司 最終的には杏林病院に行けたのですか？

○来場者 行けた。

○庄司 よかったですね。…今の救急車の話も、今ご発言いただいた方の周りに特別に起こっていることではなくて、明日もしくは今夜、皆さんに起こることかもしれません。

さて（パワーポイントを示し）東京都の平成18年度都民の生活意識調査で、地域保健医療に関して、どのようなことが必要ですかと尋ねたところ、「地域医療体制の充実、福祉施策の充実」ということが、トップに上がっています。これについては皆さんも同感ですか？

（会場からはうなずく様子がみえる）

ご賛同いただけるようですね。では、「地域医療体制の充実とか、福祉施策の充実」については一体誰に言えばいいんでしょう。

例えば、先ほどの皆様のお話のように、今、医療機関の課題としてテレビ報道などで言及されていることがありますね。「医療従事者が不足している、医師が不足している、医師が不足しているために診療が低下する、市民病院をやめてしまう」などということが、言われています。

それから、救急車が到達する病院と、傷の手当てが終わって療養する次の病院の話。どうして3カ月はここにいられないの？といった診療報酬の問題。

また、この地域には救急病院はあるけれども、リハビリテーションを行って、地域で入院できる病院が少なかった。そんなことが課題に挙がっています。

次には、福祉分野の課題です。「リハビリは病院でなくてもいいのだから、お家に帰りなさい」と言われたときに、一日を生活リハビリをしながら、治療を継続するような施設が大変不足しておりました。

現在、武蔵野市では約 200 人弱のケアマネジャーがいます。ケアマネジャーは、皆さんももとの専門の資格をお持ちで、その資格で5年以上働いた方がケアマネジャーの勉強をして試験を受けるのですけれども、その元の資格は8割方が福祉分野の資格になっています。ですので、こういった医療との連携が必要だと言われている今、福祉分野のケアマネジャーさんは非常に困っています。皆さんと同じように、医者言うことがわからない。それから、地域の医療資源の活用方法がわからない。こんなふうに思っています。

さて、3番目ですが、皆さんはこの地域の福祉分野の課題として、どんなことを課題だと思っていますか。課題というと、またちょっと違うかもしれませんが、皆さんが困っていることで結構です。お聞かせ下さい。

○酒井 どうですか。自由に発言してください。

○来場者 一般的に言われているのは、高齢者があまり病気にかからないで、医療保険に加入しても使わない。あるところへ行ったら、使えないのじゃないかと思っているのではないか。行政に対しては、日本全国にそのために適度な医療を進めて、どういうふうなことにしていくのか、ということが一番大変なんじゃないかなと思います。

○庄司 ありがとうございます。

日本の医療制度というのは、私たちは日本にしかないのですけれども、皆さんが持っている保険証でどこの病院でもかかれます。北海道に行ってもかかれます。こんな国は実は地球全体でも他にないのですね。ちょっと前にオバマ政権の中でも、アメリカで国民皆保険制度を、みたいな話がありました。私たちにとっては当然のことだったのですけれども、かなり反対がありましたね。イギリスでは、自分が持っている保険で、かかるべき医療機関が決められてしまうのです。でも、私たちは、この地域の中に住んでいる人は、中央線に乗って慶応大学病院に行くこともできます。東京大学で手術を受けることもできます。そういう意味では、先ほど発言いただいた方と同じように、私たち日本においては本当はどうしたらいいのかな、ということも考えなければいけないのかもしれない。

次に、行政の課題です。

私は行政の方々に、「医療分野は不可解だ、何のことかわからんと。医者に物を話すと、必ずお金をつくれとうるさいので、なんとか触りたくない」ということを言われたことがあります。

それと、武蔵野市は福祉行政が進んでいると言われてますよね。皆さんもそう思いますか？最近、大きな分譲のマンションがどんどん建っていますよね。そうすると都心や周辺からの人口の流入があるのですけれども、結構高齢者が多いのです。「なぜ武蔵野市に来たのか？」と聞くと、武蔵野市は福祉が進んでいると聞いたからといって文京区からいらっしやったりするのです。「ご家族はどこにいるのか？」と聞くと、実は武蔵野市ではなく、埼玉県などで、職場と親の間をとっているのですね。どうして武蔵野市なのだろう？と私は考えます。要するに、武蔵野市は周りの地域からもいいところだと見られているのです。

ね。実際、武蔵野市ならではの機能というのもたくさんあると思います。ですので、行政の課題としては、今ある組織がもっと有効に機能して、ともかくお互いが有効に活用できるように再編する必要があるというふうに思っていました。

さて、今、行政の中の課題としてはどんなことが挙げられるでしょうか。ご意見聞いてもよろしいですか。自分たちにはここが問題なのだよなど思っているところはありませんか。

○来場者 全体的には福祉の関係は縦割りになっているのじゃないかなという気がしますね。障害の関係、——武蔵野は結構先進的にやってきたのだけれども国の制度の介護保険になってからということで、——介護保険、老後の関係、それから、もう一つは、個人情報問題で、なかなか機動的に動けないというのがあるのかなと思います。

○庄司 ありがとうございます。

○来場者 武蔵野市に来て働いていたときには、医療との連携というのは非常に壁があると感じていまして、例えば、何か医療と連携してやりたいと思って先生のところに行っても、いや、私は今のところ困っていないからということで、なかなかそれ以上先に何かを進めるというのは難しいなという気がしています。

私は認知症の施策の担当だったのですけれども、そのときに、例えば市役所に「うちのおばあちゃん認知症なのだけれども、どこの病院へいけばいいの？」といったときに、本来ならまずかかりつけ医に相談してくださいと言いたいところなのですが、かかりつけ医の先生もなかなか認知症のことまで手が回らなくてあまり対応できない。ここを行政と医療——例えば武蔵野赤十字病院なり杏林大学病院なり、大きな病院が連携して、どこのかかりつけ医に行っても認知症のことが見てもらえるような、そういうふうな展開をしていきたいと思ったのですが最初にかかりつけ医の先生に行ったときにも、なかなかいい反応がいただけませんでした。今後そこをなんとかしていきたいなと思っています。

○庄司 ありがとうございます。

○来場者 明日からも認知症になるかもわからないので。

○庄司 皆さんにとっては、医療制度や技術がよくなることはいいことかもしれません。今まで救命できなかった方が救命できるようになりました。でも、そのかわりに障害を負って、地域で長く療養生活を送らなければならず、介護が長期化します。それと、例えば分譲のマンションでも2LDKだったりしますと、どなたか一人が寝つかれますと、ご家族のプライベートスペースというものがなくなってきます。核家族化が増えるということは、私が学生のときから社会で言われていることで、家族全体で見る、もしくは長男がその家を守るといった非常にアジア的な考えは日本で通用しなくなってきたと思います。

皆さんにとって、今、大変なことは他に何かございますか。

○来場者 今ではなくて20年前に父親を介護したのですが、そのときに、自分の子どもには絶対にこんな思いをさせたくないと思うほどきつかったわけですね。それで、介護保険に入って、これで介護の社会化ということで喜んだのですが、ある面ではよくなっていますが、根本的にはまた同じことになるのじゃないか。——最後の1年間は病院に入ってもらったのですが、入る病院もない、あるいは、やっぱり家族が、そんな思い二度としたくないというようなことをやらなければいけない状況になるのではないかと。

○庄司 ありがとうございます。

これは、私が16年の間に、病院、患者さま方、市民の皆様からご相談を受けてきたときにあったお話ですが、私は武蔵野赤十字病院に勤めて最初の3年ほどは、病院の中の入院患者さんの相談を受けておりました。そして、現在は在宅介護支援センターの仕事をしておりますので、病院を退院した在宅で療養する患者さんのお気持ちを聞くことになります。つまり、入口と出口を両方見ることができたのですね。それですごく感じたことは、病院の中の医療者は一生懸命やっているのだけれども、病院を退院してしまうと自分の患者さんではなくなるのです。しかし、私たち在宅の受け手側というのは、それから先ずっと、病気の療養と生活課題について相談をしていかなければいけない。どうして同じ人が入院して患者に、退院して生活者に戻ったときには医療者には話がつながらないのだろうと思ったことがとても心に残っています。

皆さんの中で実際にご自分がご入院された方はいらっしゃいますか。(何人か挙手)

○庄司 ありがとうございます。

そのとき専門用語がわからず病状が理解できなかったというご経験はございませんでしょうか。もしくは、ご家族が入院されたときに、先生の話聞くのは、夫である、父親である自分だった、ことがあったのじゃないかと思います。そして、病状について説明をされたときに、本人以上に混乱して話を全然聞けなかった。それから、本人にかわってさまざまな判断をするのはとても負担が大きい。例えば、「急性期の治療はこれでおしまいなのです、次の病院に転出していただきます。転院先は？」と言われたときに、「幾つか並べられても、どこに行ったらいいのかわからない。それが本当に本人のためになるのだろうかということを決めなければいけない？」など。

あとは、いつ行っても点滴で寝たきり。リハビリされているような気がしない。

それから、入ったと思ったら、とたんに転院話。追い出されたような、見捨てられたような気分がする。

急性期病院以外でも、病院に入院されたときにお困りになったことはありませんか。

○来場者 68歳なのですけれども、20年前の48歳のときに大腸がんになって、危ない状態だったので家内がいてくれたのですが、技術的には安全で助かりました。がんの本なんかを見て自分でいろいろ調べていたのですが、質問をすると嫌な顔をするのですね。非常に優秀なだけけど、ちょっと聞きたいことが聞けなくて…。

○庄司 なるほど。私も病院での相談を受けるときに、患者さんはソーシャルワーカーのいる相談室に来てようやく質問が出るのですね。私たちは「それは先生に聞いた方がいい」と思うのだけれども、結局、先生に聞けないから、思い悩んでここで話すのだなということが度々ありました。

そして、入院してから日も進みますと、そろそろ退院だということが言われるようになります。そうしますと、皆さん、「いつ退院するのですか？」と聞くのですが、「それは先生に聞いてください」と言う看護師さんがいたり、「ご家族の準備が整ったらね」というふうに言われたり、誰に聞いてもはっきりしない。

それから、逆に「入院中からソーシャルワーカーが在宅生活の準備の相談に乗ってくれて、何もせずに任せ切りだった」という声も聞かれます。また「自宅の改修が必要

だと思ったのだけれども、いつのタイミングでやったらいいかわからなかったので、自分たちで対応するしかなかった」という話が聞かれたりもしました。

医療機関と話をするときには、必ず私は「患者」という言葉を使わなければいけませんでした。皆さんのことを表現するときにも「患者」と言わないと、医療機関は自分の相手だと思ってくれないのですね。そのために、「市民のために」と言っても話が通じなかったので、これから「患者」と「市民」という言葉は両方とも皆さんのことを指すのですが、こんなふうに使っています。

先ほどもお話しいただきましたが、医療に対して感じた疑問、不安を言えない雰囲気、それから、何がわからないかということすらわからないぐらい難しい言葉を並べられてしまう。それから、どうやって医者に聞いたらいいのかわからない。それは患者がドクターに聞いてもいいことなのかどうかということもわからない。

皆さんには医療の専門知識や経験がない。それから、こういったことを聞いてもいいのかどうかという経験もなく、孤独、不安を感じます。特に脳卒中で後遺症を持たれた方は、それまで全く自分の話ではないだろうと思ってたことが実際に目の前にあって、動かない手足に焦燥感を持ったりします。

…さて、皆様のお気持ちをお伺いしたところで、実際、この地域はどんな地域なのかということを少し学びたいと思います。

私たちが住む、武蔵野市というところは、東京都が北多摩南部医療圏として線引きをしております。その隣に市西部、北部、区南部というのがあって、世田谷区、杉並区があるので、そこには杏林大学病院や武蔵野赤十字病院のような大きな救急病院がないので、この辺りの患者さんたち全員の救急車が流入してくるという、救急車のメッカというのが、私たちの住んでいる北多摩南部の大きな特徴なのです。

98 万人圏をこの4つの大きな救急病院が担っています。(パワーポイントの地図を示し)北にありますのが武蔵野赤十字病院ですね。そして西にあるのが都立府中病院です。ただいま大改築をしております。それから、杏林大学病院です。それから、東京慈恵会医科大学病院ですね。

第5次医療改正法では、先ほどの分けられた医療圏の中で医療機関間の整備をなささいというふうに国や東京都が言っています。「この病院ではどんなことができるのかという情報開示をなささい」「事業ごとの連携体制を組みなささい」「具体的に組むのはいいけれども、どれぐらいの患者さんを収容できて、どんな目標を立てているのかということをも明らかになささい」などなどですね。

その中でも、介護型療養病床の廃止についてはこのたび、政権が変わったので、ちょっと頓挫しておりますけれども、第5次医療法の改正のときには、23 万床あるものを 15 万に減らすというような方針が出されておりました。そして、後期高齢者の医療保険証を持っていらっしゃる方も(会場に)いると思いますが、そのときにこの制度のことが決まりました。そして、在宅医療の充実ということも挙げられています。でも、それを任されているのはこの地域、「地域ごとに考えてください」ということなのですね。

○酒井 今のところで、5次ということは、第1次、第2次、第3次、第4次というのがあったと思うのですが、ちなみに、第1次のときの医療の改正の主なポイントとか

というのはどんなものがあったのですか。

○庄司 1次だ、2次だ、というのは昔のことなので詳細は定かではありませんが、一次の頃は、感染症を蔓延させないためにはどうするかとか、基本的なことでありました。それが、日本の医療というのは本当に発達をしてきたと思うのですけれども、今は「慢性疾患という、急性期で救命された後をどうするかということ」が課題になっています。だんだんこういう医療費の適正化とか、数値目標とか、予算と絡んでくるようになりましたね。

○酒井 最初は本当に戦後の衛生面というところからで、途中で、例えば医療の無料化とかありますよね。高齢者の医療の無料化というのもこの中にありますよね。

○庄司 そうです。この医療計画の中に入ってきています。

とにかく、国庫負担を押している、逼迫している介護保険の予算と、医療保険の予算というものを何とかしなければいけない。ということは、行政の課題の中にもあった既存の施設を再編して、有効活用しようということをやっているわけですね。

また、第5次医療法改正では事業ごとの医療連携体制の構築というのがあります。この事業ごとというのは、4疾病5事業と言われているもので、4つの病気に対して、5つの事業に対しての連携体制を構築すれば、この地域は医療については問題ないといわれているわけなのです。その4疾病というのが、がん、脳卒中、心筋梗塞、糖尿病、そして5事業というのが救急医療、災害医療、僻地医療、小児救急を含むものとあります。

今、テレビで話題になっているのは、この全部だと思いませんか。救急医療、周産期、小児救急といったもの。それから、僻地医療というのは、何も離島の話ばかりではなくて、その地域に少ない診療のことを僻地医療というように考えます。

その中で、私としては、5疾病5事業、もしくは6疾病5事業とするのであれば、そこに認知症が入ってきたり、在宅医療というものが入ってくるのではと思っています。

要介護度5——寝たきりの方というのはほぼ半数が脳卒中と認知症、心筋梗塞ということが原因になっているわけです。

さて、国が脳卒中の医療連携体制というものをこの地域ではこんなふうに組みなさいというふうなたたき台を投げかけているわけです。国がイメージをする脳卒中の医療連携では、発症したら速やかに急性期の病院に送られる。次は回復期で、脳卒中の治療は終わったので、その後に残った障害を病床に療養して行うリハビリをする病院に転院をする。その次は、維持期で、老人保健施設。それから、お家に帰って在宅療養等でケアプランを立てて、それでそれぞれのステージを活用する。…では、この地域は、これらがきちんと整っているのでしょうかという話です。

東京都は、この課題別地域保険医療推進プランというものを16年度から18年度まで予算をかけて、この地域の社会診断をしてきました。つまり、私たちが漠然と思っている、「この地域の社会資源はどうなの？足りているの？」という皆さんの話をきちんとアンケート調査をしたり、分析をしたりした結果を示しているのです。これぐらいの薄い本にまとまっていますけれども、多分誰も見たことがないと思うのです。その中に表現されているアンケート結果というものは、医療機関ですら連携の認識がないものでした。つまり、急性期や回復期ときちんと連絡を取り合っているかということ、ドクター間同士でも「別に、必要以上に連絡なんてとらない」という感じなのです。

それから、先ほど話がありました「行政の縦割りの問題」ですが、行政の取り組みや主管課がバラバラで、既存のシステムがきちんと有効活用されていないと書かれています。皆さんの中からもお話がありました。病院が変わるたびに関係者同士が話し合える機会もない。そのためには、「地域連携パス」を使用した私たち在宅支援者との連携が必要だというのが18年度の課題の提案の投げかけでした。もちろんそれに対して具体的に、こんなふうにやったらいいのではないかと提案のないことが、「いつもの行政の報告書だなあ」と思っていました。

さきほど「地域連携パス」という言葉が出てきました。思い出してください。この地域は、98万人の人口圏の中で4つの救急病院、その他に市中病院がありましたね。この地域は、市中病院の中で、2001年のときには、回復期病院というものがこの地域には皆無でした。そのため、私たち武蔵野にいる人がもし脳卒中になった場合には、武蔵野赤十字病院か杏林大学病院か都立府中病院に搬送されたとしても、この地域の中でリハビリをすることができなくて、青梅や八王子、遠くは川崎といったような遠くのリハビリ病院に転院して戻ってくるしかないという地域だったのですね。

ここで、医療機関、在宅支援者、武蔵野市、こういった登場人物がこの地域連携をどんなふうにしていったかというプロセスについて、これからお話しします。

急性期の医療機関が集まって、北多摩南部脳卒中ネットワーク研究会という研究会をつくりました。この医者⇄医者集団の目的は、「この地域に回復期リハビリ病棟を新設すること」でした。たくさんある一般病院に皆さんどうぞこの地域を変えるために、回復期病院に成り代わってくださいというお願いです。

2001年からこの2次医療圏、先ほどの98万人人口圏の脳卒中診療にかかわる21病院の理事長、院長と6市の医師会長が世話人として就任しました。こういった研究会を医者が立ち上げたのです。この医者集団のやり始めたことは、確かに的を得ているなど思うことが幾つかあります。

1つには、理事長と院長をまず集めたのです。要するに、その首長を集めることによって方針の転換をより早くする。これはボトムアップではなくて、トップダウンという段取りですね。

この脳卒中ネットワーク研究会は、先ほどの保健所や東京都と同じように、この地域の医療機関にアンケート調査をしました。この地域にはどれぐらいリハビリのスタッフがいて、何床の病院がどこに点在しているのだろうかということを調べ始めました。

その後、2002年から病院長たちの意識改革です。どうせ回復期なんかやったら儲からないのじゃないかという人たちに対して、先行事例を調べ、その地域の調査をしたのです。でも、先行事例というのがその当時は北海道や熊本の事例しかない。これでは都市型のこの地域に合わないということで、ここではどんなことをしたらいいかということを考え始めました。

その結果、2006年には、回復期リハビリ病床が2つの病院で始まりました。西窪病院は古くなったから建て直しをしたのではなく、ここで一番初めに手を挙げた回復期リハビリ病院というのが実は武蔵野陽和会病院（西窪病院）ですね。それで、2007年には老人保健施設。2つの施設では、回復期リハビリテーションができるようなスタッフや施設を集め

て、200床できました。結果、回復期リハビリ病床が、この4つの病院で今は450床、この地域にできるようになります。

この話は、聞こえはいいのですけれども、この裏としては、地域連携パスの整備が必要だったので、回復期リハビリ病院をつくらなければいけなかったという医者の方針がありました。これだけ見てみますと、病院と病院の連携しかまだできていません。そして、医者のトップ集団ですから、物事を決められるのですけれども、私たち市民の課題を拾うところではなかったのです。

そこで、ちょうど同じときに武蔵野市の行政の中では、地域リハビリテーションを検討するワーキングの活動が始まっていました。それは、医療分野との地域連携での課題を考えて、生活に反映させるというワーキングでした。

その中でも、行政の職員——障害者福祉課や高齢者福祉課の職員から出ていた話の中では、医療機関は生活レベルでの視点の不足。医療機関は地域の社会資源——つまり私たちを全く知らない。それから、退院時のカンファレンスの問題——関係機関と患者さんの話し合いがなく、在宅の準備が整わない。それから、医師会のお医者さまにも、俺のところにいきなり来なくなったのだけれども、入院していたなんて知らなかった。また、僕は内科医なのだけれど、脳卒中を見ろと言われてたって困るのだよね、といったこと。医師会の医師にも入院中の治療経過が伝わりにくいという課題がありました。

それと、先ほど、国の制度設計は4疾病5事業だとか、いろいろ大きく構えていましたが、それと武蔵野市の福祉保健政策とは連動していないのではないか、こういう課題を持っていたのです。

ところが、今、話に出てきた登場人物が、実は話し合いをしている目的というのは、脳卒中ネットワーク研究会（医者⇄医者集団）では、脳卒中の患者さんに対するシームレス——継ぎ目のない医療やケアのサービスの提供と、武蔵野市ではリハビリテーションが市民のために切れ目なく効果的に提供されるように、今あるものを一生懸命再編しようじゃないかということでした。次に、保健所——東京都ですが、圏域における4疾病5事業の脳卒中に関しては、リハビリテーション推進をしようと考えていました。

この3者は全く同じことを言っていると思いませんか。

実は、この国がイメージする脳卒中の医療連携のあるパーツは、行政——武蔵野市が関係する部分があるのです。例えば、老人保健施設といった介護保険施設の利用、在宅療養生活に関係する介護サービス、発症する前の生活習慣の改善、こういったところは、実は武蔵野市の福祉・保健の領域の仕事だったわけです。ということは、実際には医療機関と「連携」をしないと、私たち市民へのサービスの流れは完成しないということになります。

武蔵野市が協働する理由は、まさにそこにありました。脳卒中は、長期間、療養と介護を余儀なくされますので、急性期、回復期、維持期、そんなことはどうでもいい、そうではなくて、在宅療養生活まできちんとみて、発症しても救急車で適切な医療機関に運ばれて、その後治療やリハビリを経て、在宅療養ができるように、途切れなく医療・保健・福祉サービスが提供される仕組みが必要だと考えたからで、ここで3者の考えがマッチしたわけです。

次に、患者が転院したことによる「医療やケアの質の低下」が取り沙汰されます。次の

病院に転院したら、看護婦さんが少ない。呼んでも来ない。そんなことがよく聞かれます。それから、リハビリテーションのスタッフやナースがやっていることをうちの奥さんにやらせるのは無理ですよ、みたいなことですね。なので、先ほどご発言いただいたように、安心して在宅療養を送れる仕組みがなければ、家族に迷惑をかけてしまうと思われる方も少なくありません。

それと、今は医療に対するニーズが高い。昔だったら、救命もされない方、もしくはずっと入院していたような方も、今はいろいろな医療の装備をして自宅に帰られます。そうすると、地域では受け取り側の先ほどの8割福祉職といったケアマネジャーは、そういった新しい在宅医療の形に対応しなければいけません。そのため、武蔵野市としても、ケアマネジャーの知識、対応力のレベルアップやボトムアップをしなければならないということが迫られていたのですね。

先ほど、2001年にできた脳卒中ネットワーク研究会の2007年までの活動のお話ししました。2004年には武蔵野赤十字病院と医師会と武蔵野市で、「脳卒中を考える一住み慣れた街で暮し続けるためにー」という連携フォーラムが行われています。多分これを開催したときには武蔵野市は「協働」したつもりはなく、「共催」だったと思います。気持ちの中では、場所を貸して、一緒に議事を進行してと、その位のつもりだったと思います。医師会も当院もそうだと思います。

この後から、武蔵野市が「取り組まなければいけない課題」を見つけたので、積極的に参画を始めます。連携パスを作成するワーキングチーム、病院の中で行われる医者集団の会議に、市の職員の方がたくさん来てくださいました。

次に、こういう連携システムをつくらうとしていたとしても、使い手のケアマネジャーが知らなければ全く意味がないということで、連携パス、地域連携、カンファレンスのときにケアマネジャーはどんなことを医療者に聞いたら、市民の皆さんが安心して療養生活を送れるようになるかということ、劇で勉強したり、グループワークをおこないました。市役所の会議室で80余事業所、百何十人の方が見えて、地域連携について勉強する機会を武蔵野市が設けてくれました。

その「連携パス」と言われるものが、皆さんのお手元にある「地域連携診療計画書」です。この在宅・医師会・行政分科会なのですね。本当は、医者の方科会、看護師の方科会、リハビリの方科会、専門職種別だったのですけれども、ここはまさに協働の一つのポイントだと思います。多職種が違う言語で話し合う場だったのですね。

ただ、多職種の皆さんそれぞれに話をさせておくと、自分の言語でしか語らないので、必ずこの会を設けるときには、「多機関多職種が良好な相互関係を築く。医療中心の話じゃない、最終的には在宅に向かうためのプランなのだ。」それと、「医療機関の一方的な話を尊重するのではなくて、私たち在宅側とつなぎ合わせるための共有の情報が必要なのだ。」そういったことをまず念頭に、お題目として最初に唱えるわけなのです。それから会議を始めます。そうでないとみんな忘れてしまうのですね。

○酒井 進行、仕切りは誰がやるのですか。

○庄司 それも多分会議をやるときのポイントだったと思うのですけれども、医師会医師が11名参加してくれました。特にずっと参加し続けてくれたのは、武蔵野と三鷹でした。

でも、このときには武蔵野赤十字病院が会場で、そこで会議をしていたので、全部が武蔵野でまとまってしまうと、ほかの人たちが参加しにくいのではと考え、この分科会の司会是三鷹市医師会長にお願いをしました。皆さんが話しやすいように工夫をしたわけですね。

在宅・医師会・行政分科会では三鷹市医師会長が司会を担当、もちろん各在宅介護支援センター職員も参加しました。それから、回復期の病気の先生方も来ています。障害者福祉課の職員も来ています。毎回45名ほどの参加を見て、半年でつくり上げたものが皆様のお手元にある連携診療計画書です。

地域連携診療計画書の流れですが、地域連携診療計画書(その1)は、この地域での市民を取り巻く医療・福祉サービスの流れを見えるようにした概念図です。急性期病院から回復期病院に転院するときは、まずは回復期病院職員にわかるような情報を提供しましょう。それから、在宅療養を始めるときは、在宅支援チームにわかるような情報提供をしましょう。決して医療者がわかる言葉だけで話を進めるのではない。「患者さんが生活者となって、在宅療養を継続できるように支援する」ことが、それが地域連携診療計画書の本懐だったと考えています。

皆さんのお手元にあります地域連携診療計画書(その1)は、一番初めに皆さんが療養するときに、急性期医療機関に入院してから、「どんなことが起こるのだろう…」ということ俯瞰的に見たシートです。

今までこういった概念を可視化したシートというものはなかったのです。急性期医療機関の医師に言われました。「僕たちが連携パスとして患者さん用のシートをつくるときに考えていたのは、発症してから急性期医療機関を退院するこの短い期間のことだけ。ここだけが、僕たちの中では退院すればゴールだと思っていた。だけれども、脳卒中の人たちは、これから長い間を地域の社会資源に支えられながら療養するのだね。これは初めてだよ」と言われました。確かにこの「退院がゴールではない」という考え方は、東京都にとっても斬新だったようです。これから後発で様々ないろんな地域が脳卒中のパスをつくるときに、これを持ったものが非常に多くなっています。

次に、地域連携診療計画書(その2)です。これは、急性期の病院から、例えば陽和会病院や、杉並リハビリテーション病院のように、リハビリを続ける病院に転院するときに渡される情報提供用紙です。

一番下の欄には、「私は、地域連携に基づく診療計画の説明を受けました。書かれた内容が皆さんの連絡調整に使用されることに同意します。」とあり、本人、家族の署名をすようになっています。これも、今まではお医者様の情報というのは封をされて、皆さんが見られない状況で次の病院に渡していました。でも、それではいけない。患者さんの情報というものは自分のものなので、この紙面は「開いて」「この情報で説明を受け」て、それで患者さんがここに「サイン」をする。だから、患者さんが、書いてある内容をわかるまで医者は患者さんと向き合わなければいけないということです。

じゃ、全部が患者さんにわかる情報かということ、実はちょっと難しい言葉とかデータが書いてあるのです。これは回復期病院の方が患者さんの状態を知るための情報提供用紙と兼ね合わせるという理由で、こういうデータになっています。ただ、難しいかなと思われることをお医者さんがどれだけ患者さんにわかるように説明するかということも大事な

です。

患者になってしまった皆さんは、急性期病院を退院するときには障害を負っていて、とてもショックを受けています。ですから、地域連携診療計画書（その2）には、「患者さんの希望するゴール」、「ご家族が希望するゴール」、「実際の主治医からの家族への面談内容」を書くようにしています。ここが一番医療者の理解と患者さんの理解とが、違うところなのです。「自分は歩けるようになりたい」と患者さんは思っている。家族もそう思っている。性格もついでによく直してもらいたいと思っているかもしれない。だけれども、お医者さんは、そうは思っていないのです。病状を知っているので、「この方は右に麻痺が残る」ということをわかっています。だけれども、「次の病院でリハビリしてね」と言われたら、自分は歩けるようになりたいと思っていた患者さんは、絶対に歩けるようになると思って次の病院へ行くのです。そのときのギャップというのが回復期病院の治療中では一番克服するのに大変なことなのです。「いつまでたっても治らないじゃないか」という不平不満につながったりします。

そのため、「実際の主治医からの家族への面談内容」には、患者さんがどれぐらい病気に対して理解しているのか、それから、確かに今そのすべてを告げるべきではないという判断をしたお医者さんが、どこまでは患者さんに説明したのかということを書くようになっています。

次に、地域連携診療計画書（その3）です。これが私たち在宅の支援者側が北多摩南部脳卒中ネットワーク研究会の分科会の中で6カ月間、2週間おきに7時から9時まで、本当に喧々諤々（けんけんがくがく）の話し合いをして決めた中身なのです。今まで看護師さんの情報提供は、封をして看護師さんに、リハビリの情報は、違う封筒に封をしてリハビリの人というふうに、その人は3つも4つも封筒を持って次の病院に転院しなければいけなかったのが、この1枚だけになります。

医師と看護師とリハビリとソーシャルワーカーが記入するところがあります。そして、ここが重要なのですけれども、退院をするときに、関係者と家族を交えて、皆さんで退院の調整のための話し合いをした記録を書くようになっています。「書かれた内容が病院・施設間の連絡調整等に使用されることに同意します」という署名欄がありますが、必ずご本人とご家族を交えて、この話し合いをしてくださいという気持ちがこもったものなのです。

一番医師に知ってもらいたかったことは、「再発予防だよ」「転ばなければいいんだよ」というふうに言うのではなくて、あなたの障害はどういう障害なのかということをお皆さんにわかるようにやさしい言葉で書いてあります。例えば、「障害」のところを見てください。

「半側空間無視」と書いてあるところがあります。「半側空間無視」ということを口頭で言われても、片仮名がサッと過ぎるだけで、何のことかわからないと思います。視野の半分が見えなくなるので、右半分が見えなくなるから、右側に気をつけて歩いてくださいね、というふうな表現を、お医者さまから聞けるように工夫をしています。

次に地域連携診療計画書（その4）です。これがまた私たちが武蔵野市と協働でつくった大きな特徴なのですけれども、ご自分の領域以外に関心のない医師会の先生に患者さんの生活に関心を持ってもらうために、患者さんがお家に帰られてからのご様子を医師会の先

生方が急性期の先生に宛てて書くお手紙のようなものです。今までは、急性期の病院の先生も、自分が手術した患者は意識がないから知らなかったけれども、6カ月後にはこうやって在宅で療養しているのだなということがわかるようになるものです。

一番下には、ケアマネジャーやご家族からの急性期の先生の相談の欄があります。このままいいの？たまには検査しなくていいの？ということも聞きたいかもしれません。

次に医師会の先生からの相談。「自分は内科医なのだけれども、どういうところに気をつけてこの患者を見たらいいだろうか？」そういったことを急性期の先生とやりとりができるようになっていきます。ということで、私たちが考えたものは、国がイメージしたたたき台に、はからずも「連携」の大事なところを、皆さんがお手元に持っている3枚の紙のシートをつけ加えることができたわけなのです。2008年の5月、この地域連携パスを皆さんに公開をした会議には、武蔵野市内の介護保険事業所の方々が大勢来られました。この当時は、連携に賛同してくれる病院の院長クラスの先生方も一緒に参加をしています。

さて、作っただけではいけません。生んだ子どもは育てなければいけないので、次に武蔵野市がやったことです。

パスを作ることに参加した人たちは、すごく素晴らしいものができたと思っただけでも、参加をしていない人たちもこのパスを使わなければいけないので、皆さんに知らしめなければいけないのです。そのために、医師会や保健所の会議などへ武蔵野市の職員の方々が出て行って、ここに至るまでの経過を話す。そういったことをしてくださいました。

それから、医療業界の学会にも乗り込んで行って、皆さんが在宅との連携が課題だよねというふうに話を終わらせているけれども、私たちはそれよりも先に進みましたよというふうに学会でも発表していきました。

次に、合同記者説明会です。武蔵野市、三鷹市、杏林大学病院と武蔵野赤十字病院、この首長が集まって、新聞記者に向かって会見したのです。11の新聞社を呼んで、医療と行政と一緒に取り組んできたことについての説明会を行いました。この波及効果というのは、これだけ知らしめると医師会の先生も後に引けないということです。やらなければいけないのだなというところに立たされたのです。

次に、市民の方々にも、——今日私がこうやって説明できるのは大変貴重な機会だと思っただけでも、こういったことを皆さんにも伝えないと、皆さんが安心してご自宅に退院できないのです。せっかくこういう連携が始まるのだとしたら、ぜひ安心してご自宅に退院してください、皆さんにこのことを伝えていくということも私たちの仕事ですよということで、市報「むさしの」に医師会や病院の話がドーンと出ました。これほど大きく載ったのは、インフルエンザ以外ではなかなかなかったというふうにも聞いております。

さて、作っただけではいけません、育てなければという話ですが、パスで実際に連携をとられた、もしくは、入院されて、この連携パスを使って次の病院に転院された方に追っかけ調査を実施しました。今までアンケートというのは、まいて回収できればラッキーでしたよ。でも、このときは、患者さんのお宅を訪問してインタビューさせていただきました。これは武蔵野市の職員の方がやったのですよ。

○酒井 どここの課が。

○庄司 あの当時は、高齢者福祉課だったかな。

こんな質問をしてきました。「転院をしたときに、地域連携について説明がちゃんとありましたか?」「皆さんは、大事なご自身の情報であるパスのシートをお手に持っていらっしゃいますか?」

○酒井 これってもしかして、自分も持っているわけですか。

○庄司 そうです。

○酒井 お医者さんも。

○庄司 医者はコピーです。

○酒井 医者がコピー。

○庄司 オリジナルは皆さんの手元について、そのコピーが医療機関に残ります。先生が直筆で書いたものを皆さんがお手元に持っているというわけなのですね。

「転院時に、実際にその転院について説明があったときに不安はありませんでしたか?」それから、「退院後、脳卒中以外についての健康管理についての相談先がありましたか?」そして、「皆さん、このパスは役に立ちましたか?」というインタビューをしてまいりました。

そうしたら、81歳の女性がいらっしゃいまして、この方は他の病気もお持ちになって脳卒中になられたのですね。この方の話を聞いたときに、インタビューに回った私を含めて4人の職員は非常に感動したのです。この方は、武蔵野市の市報を読んでいたのです。それで、「こんなことが始まったのよ。私の住んでいる地域では、病院とかかりつけの先生が脳卒中のことについて取り組みを始めたのだから」と、お友達に電話をしたその晩、脳梗塞になったのですね。冗談みたいな本当の話なのですけれども、この方が入院をして目を開けたらば、目の前に展開されることは、市報に書いてあったとおりであったとおっしゃったのです。つまり、予備知識があると、転院に対しても追い出される感がなくて、市報に書いてあったとおりに対応が早く、とても支えられている感じがしたと言ってくさいました。

それから、病状説明に対しては不安がなかったし、理解がしやすい。それに自分のために書かれた情報だと思うので、特に「3枚目の家に帰るときのシートは、よく読み返すのよ」と言ってくさいました。

しかし、いい話ばかりじゃ当然ありません。63歳の男性でタクシーの運転手さんの話です。運転しておかしいな、熱中症かなと思って、すぐ受診をしないでお家に帰って様子を見ていたのですね。そうしたら、自宅で倒れて救急搬送になりました。これは確かにスムーズにできた。けれども、「病状説明は俺にはわからなかったし、急性期でのリハビリはばかばかしいと思った。早くここを退院して、仕事に復帰をしなければと思っていた。けれども、回復期病院に転院をすると、自分の中に麻痺が残っていて運転ができないというのがだんだんわかってきた。こういった勝手な思い込みを反省して、回復期病院で何度も説明をされたときに、少しずつ納得することができた。」と、私が説明していると、穏やかっぼいですが、1時間の間、ほぼ怒りながら話をされていた。ただ、最後に言われたことは、「自分は、こうやって聞いてもらうことで、本音を語れて振り返れた。こうやって検証する作業はぜひ続けてくれ」というふうにおっしゃっていました。

このインタビューを振り返って、確かにいいことがたくさんありました。例えば、パス

シートを利用しての病状説明というものは、「転院するのは追い出しではなくて、リハビリ専門の病院に行くのだ」ということ、それから、「転院するのは連携している病院なのだ」というふうに理解ができて不安が軽減したということです。それから、回復期の病院の面接に行ったときに、「自分の情報は個人情報として漏れているのではなくて、ちゃんと今までの治療が先方の病院に伝えられて自分を知ってくれているのだ」という安心感になったということです。

ただ、一度は脳が壊れていますから、当然その説明をご自身が覚えていない例もありますし、ご家族は、次の病院に転院するということを「一家の大黒柱に相談したいのに、本人が病気になっちゃって、妻の私が決めるのはすごく困るわ」と困惑されている方もいました。

実際にケアマネジャーに対する研修や市民の周知があったということは有効であるということが幾つかのエピソードから聞かれています。ただ、ご家族には説明するけれども、どうしてもその場に在宅支援者であるケアマネジャーを呼びにくかったという病院が多かったのです。カンファレンス——退院のときに相談する機会を家族には持ったけれども、そこにケアマネジャーを呼ぶという機会は少なかったという病院が多かったのです。実際に話し合いをしたってつなげるべき社会資源がないというのもこの部分の課題だと思います。

インタビューをした 13 人の武蔵野市民の方は、ご自身でお話ができる方だったのです。脳卒中でもお話ができるぐらいの軽症の障害をお持ちの方でした。では、お話ができないぐらいの重症の方は本当はどうしているのだろう。ここの部分も実際はどうしているのかということを追っていかねばいけないと私は思っています。

先ほど、2001 年には、北多摩南部の中ではこんなような医療機関の分布でしたという話をしました。急性期の病院はあるけれども、リハビリの病院は全くないという状況だったのです。こういった脳卒中の疾患別連携の活動を通して、今はこのようになっています。考えてみてください。一般病院が患者さんに必ず説明をする、話し合いの機会を持つ。それから、連携パスも、患者さんにわかりやすい、イラストも入ったような、あまりアカデミカルじゃない——アカデミカルではないと言われるようなパスに書くということは、医療機関にしてみれば、目から何か落ちるぐらい、エキセントリックなことだったのです。でも、それに対しても、患者さん、そして市民、地域つくるためという大きな使命とミッションに賛成してくれる医療機関もありました。ですので、今は救急病院も 2 つ増えて、急性期の脳卒中の治療ができる場所は、この地域では 6 つあります。それと、連携パスを使ってリハビリができるように協力してくれる病院が、平成 22 年 1 月の段階で 26 施設できるようになってきました。

今までの話をまとめますと、一番初めには、急性期では、治療は終わりました。転院をしてリハビリをしてくださいとドクターが言ったときに、私たち側は、見捨てられたと感じ、治療は終わったということは、元通りでもないのに追い出されたと全く対立をしていました。しかし、この話し合いを続けていくうちに、「転院というのは地域連携なのに、追い出しなんて心外だな」という言葉を医者から聞かされたときに、「なるほど、私たちの受け取り側の言語の中に、そういったことがなかったのだな。逆に私たちの不安をどうやっ

て伝えたら先生方にわかってもらえるだろう。」こうやって対立を対話に変えて話し合うということが続けてきました。

脳卒中ネットワーク研究会の分科会で、半年、2週間ごとに話し合ってきた中では、患者さん＝市民に対して地域連携をしていくという意味では、違う文化や背景や言葉の意味というものをなだらかにしていくという時間になったわけですね。ですので、対立から協働、そして相手を尊重するという雰囲気が変わってきたような気がします。同じ到達目的に向けての話し合う場づくりが大切だと考えています。

その成果としては、医療機関と在宅と行政が、「あなたがケアマネジャーなのだね」、と本当に顔の見える連携になり、そして、患者さん、市民の生活という場を通じての共通言語というものができたように思います。

当初は、医者⇄医者集団だったのですけれども、医者⇄医者集団のつながりが、その後武蔵野市と協働した一つの在宅支援のシステムにつながった。ここがまず、重要なきっかけだったと思います。

市民語で話すか、医療語で話すかなんですけれども、まず、私たちも医療語の文化・背景について知らなければ「協働」なんて始まらないと思います。これをきっかけに、地域をつくっていくということが「協働」の始まりなのではないかと考えました。

地域連携パスは、市民、医療者の言語の両方を持つ。ですので、市民、患者が主体的に活躍するために、皆さんにわかるように「地域連携」を作ってきた。そして、医療機関にも「市民や武蔵野市も協働する相手である」ということを理解させた。さらに、武蔵野市にも「医者⇄医者集団の考えというのは、医療分野の特別な話ではなくて、市民のための連携だ」ということも理解してもらったように思います。そして、この地域連携パスを続けて使っていくことによって、相互のコミュニケーションが深まっていけば、将来的には安心した療養生活が、この地域では「転院しても連携しているの。それが当たり前よ」ということになっていけばいいなと考えているわけです。

しかし、作った連携パスシート紙面そのものが成果ではありません。医療機関と行政が意識改革のために話し合いをしたというそのプロセスが成果なのですね。そして、ぜひ市民や患者の方々も、こういった場面を知ること、そして協力して参加すること、そして、——ここに来られている方は意見が言えるからいいのですけれども、皆さんが知っている、意見を言えない方の代弁をしていただきたいと思います。

ただ、ここに組織間を越えた課題に取り組むには、本当に強いミッションが必要だと思います。本当に何をしなければいけないのか。誰が動かなければいけないのか。到達目標は何なのかということがわからないといけないと思います。

できて、まだよちよち歩きぐらいだと思うのですけれども、この医療連携では、医療の分野に対する行政の提案というのが非常に有効でした。目からうろこで、それは東京都のモデルにもなろうとしている地域連携の一つの形になっています。

ただし、こういったことをやりっ放しではなくて、事例にでてきた、タクシーの運転手の方も言いました。「ぜひ検証してください。」この地域ならではの地域と医療福祉の計画に反映させるためには、どれくらいの人がこのパスを使ったのか、ある病院に偏っていないか、そういったことも考えていかなければいけないのだと思います。

次に、訪問看護師さんやケアマネジャーさんだけではなく、今はある程度医療行為も少しずつヘルパーさんができるようになってきています。ですので、私たちの仲間たちのスキルの底上げも継続して、研修が必要だと思います。

これらすべては、水や空気と同じように、資源としての医療、福祉だと思うので、こういった連携に参画をするといったときには、市民の皆さんと一緒にやっていきたい、そんなふうに考えています。脳卒中連携パスは、本当に「きっかけ」でした。それは、武蔵野市ならではの「この地域をどのようにそだてていくか」という話を急性期の医療者に投げかけられたということが非常に大事だったのです。

そして、私が今日お話ししたことというのは、何も医療や福祉の話だけではなくて、これから皆さん市民自治や行政と話し合いの場を考えるとときの立ち位置にも共通しているのではないかと思います。

一番初め、私どもが連携パスの分科会の活動を始めた時、「どうせ変わらない」「またお医者さんたちに連携しようとしてもだめだった」となるだろうなと思っていました。でも、多職種なおかつ違う言語で話す私たちだったのですが、「この地域をつくろう、育てよう」という大きなミッションが同じであることに気が付き、私たちが参加した分科会活動は成功しました。それは、そこに同じく椅子を並べるということではなく、そこに「参画する」という意識があったからだと思います。分科会の話し合いは本当に「討論」だったのですし、つばぜり合いをお医者さんともしたのですけれども、まず「共通言語で語る」そのためには自分たちの主張だけではなくて、「相手を理解する」ということが必要でした。相手を理解し、相手にわかるように共通言語で話す・・・これには大変忍耐が要ります。そのためにも、同じ到達目標という強いミッションが必要なのではないのでしょうか。

私が最後に言いたいのはここなのですけれども、「明日からでも変わることが必ずある」と思います。患者や市民も協働するチームの一員だと、逆に市民自治を考えるとときには、行政の方々に重く尊重してもらいたいと思います。そして、ぜひ皆さんも伝えることをあきらめないで、これからの地域づくりに邁進できたらなと思っています。

ありがとうございました。(拍手)

○酒井 お疲れさまでした。

それで、みなさんもう市報を読んでいると思うのですけれども、今の連携パスのお話で、最初の武蔵野市地域リハビリテーションが必要というお話が出ています。市長の考えている主要な施策の一番初めに地域リハビリテーションというのが出ていますよ。つまり、今日の庄司さんの、医師たちと作り上げたというこのパスが、さらに今後きちんと市民が使えるようなものにしていこうということで、主な事業と予算というところで、安心して暮らせるまちづくりということで、地域リハビリテーション推進事業というのが、金額は非常に少ないのですが、新規の事業として位置づけられています。つまり、確実にきちんと連携パスを使えるものにしていきますよという、継続していきますよというところが市報の中に出ています。

もう一つ言うと、これは、武蔵野市の福祉総合計画の中にも、地域リハビリテーションの理念というのが書かれていて、長期計画ですとか、こちらの方にも安心してこの街で暮らしていけるように、きちんと流れていくシステムにしていきましょうということが書か

れていて、それを受けて、総合計画にも出ていて、それを今回、市長がさらに進めますよということで、主要施策の一番初めに持ってきているということです。

今日のお話、もしかしたら、連携パスの内容を聞けるのかと、具体的な使い勝手のよさを聞けるのかと思っていらした方も中にはいらっしゃるかもしれませんが、実はそうではなくて、皆さんが望んでいる、地域に安心して暮らしていきたい、みんなそれぞれが思っている思い、個々の気持ちを行政と医療と福祉関係者の方とがきちんと形にしてきたという、その見えない部分の経過を話していただきました。なので、ちょっと、えっと思っただ人もいたかもしれないのですが、そういう不思議な話し合いでした。

では、時間も少ないですが、後からいらした方もいらっしゃるのですが、今日は地域リハビリテーション活動をどうやって使うかということではなくて、できれば、先ほどのでき上がった経過について、そこで苦労された話などを少し話していただくと非常にありがたいのですが、どうぞご自由にご意見を言ってください。まだ発言されていない方で意見を言いたいよという方はいらっしゃいませんか。

○来場者 隣の部屋の会議に出ていて、終わって、こっちへとと言われて、何かと思って来たら、連携パス。私、どうしてこんなところに入ったのかしらと思っていました。だけど、やっぱり行政との対話を切り開いていくときのやり方とか、すごくそれは参考になるなと思いつながら聞きました。

○庄司 ありがとうございます。でも、今おっしゃっていただけたことが半分でも、半分の時間でも伝わったのかなと思ってちょっと安心しました。要は、首長みたいに偉い方たちの中でも、私たちの問題というのは、実は小さい問題ではなくて、大きな課題を含んでいるのです。ただ、それを政策立案の時にどうやって提案しようかという手段だと思うのですね。そういうときには、ぜひ私たちも能動的に動ける市民としてお手伝いできればなと思います。

○酒井 ちょっと話がそれますけれども、ケアプランも、介護保険を使って、ケアマネジャーさんにどうしますかと言われるのですけれども、どうしますかと言われたって、どうしていいかわからないよということがあるので、どうしたいのか自分で決めなければいけないのかなと思います。

○来場者 パスって何ですか。

○庄司 パスというのは難しいですよ。例えば、Suicaみたいなものも、ディズニーランドの速く順番を変えられるファストパスかみたいなものもパスなのですが、地域連携パスは、情報提供用紙というシートだと思ってください。パスというのは、何かをスルーするパスという意味ではなくて、どちらかという、書き込む引継ぎ書みたいなものなのです。例えば、工程表みたいな、工場なんかでもよく使われるものなんかともとの語源なのですけれども、簡単に言うと、パスというのは紙のことだと思ってください。

○酒井 他にどうぞ。

○来場者 このパスは、斬新だというのはすごく伝わってくるのですけれども、パスの、例えばもう一枚追加として、公園に行けるようになったとか、タクシーに乗れるようになったとか、そういう社会で生活が送れるようになったということが項目として載ってはい

るのですけれども、もうちょっと患者さん本人に見えやすいようにしていただければなどというのを感じました。そこがなかなか見えにくい。普段の生活＝リハビリなのだよということがうまく伝わるような仕掛けづくりだとか、あとは、地域で生活するというこの地域がここの中にもうちょっと盛り込まれたりすると、楽に暮らせる。

○庄司 まさにおっしゃるとおりです。そこが例えば今回の「市民自治を考える」といったときに、市民から見えないのですね。それと同じように、医療機関側から生活が見えないので、2008年はここが限界だと思います。もしここにいる方々が、分科会のときに参画をしていただけていたら、もっともっと違う形や到達点になったかもしれないと思うのです。これから先に私たちがぜひ伝えたい、載せたいということを、医療者が理解して合意が得られるところまでというのが、同じように市民創造、それから、自治に対する参画のあり方だと思いますね。おっしゃるようにもっとこうしてもらいたい市民の気持ちというのを、徐々に温度が近づくところまで落とし込んでいくというそのプロセスについて今日お話をしたつもりなので、それが伝わったようでよかったです。

○酒井 他にいかがでしょうか。どうぞ。

○来場者 今日はパスの話をしていただいて、非常にいいお話をいただきました。医療の話というのは大体セーフティネットになる。セーフティネットにかかわるから、結局、お医者さんというのは、我々にとってみれば、時には高圧的な、権力的な存在なのですね。協働というのはそれを壊すというのが始まりなのだけれども。

ただ、僕は入院したことがあるのだけれども、そのときに、自分の症例をみんなに話したら、それが評判になってみんなが聞きに来るようになったのです。その部分で非常に気になったのは、我々は患者なのだということですね。女性の患者さんたちが医者に聞けない話をどこに聞けばいいのかということなのです。そのときに僕はどういうふうに答えればいいのかということで、いろいろ考えたのは、インフォームドコンセントというのがありますけれども、それをネタに、お医者さんと医療スタッフにはできない、患者としての体験から、できる限りわかりやすい話をしたのです。それが結局、言語の問題や協働につながるのですが、患者とカウンターパワーを作んなきゃいけないのです。カウンターパワーを作るということは、協働という話になるのですが、どういう形で力をつけていくか、その辺がとても大切。皆さん嫌がる方も多いけれども、僕はそういう感覚です。市民がわかりやすくするための道をどう考えていくか。

それから、医療機関とつき合っていくときには、なかなかそのあたりの情報というのは、あるいは言語というのはなかなか通じない。そのあたりはどういった形で考えればいいのか。患者は医療機関に頼らなければいけない。みんな命がかかっていますから必死です。今日はいいいヒントを随分お話しになったと思います。陽和会の理事長さんと話をしたときに話されていたのが非常に懐かしく思われます。

○庄司 ひとつには、診療報酬の誘導ですとか、世の中の動きからのきっかけというのは大いにあると思うのです。いつも話をするというわけではなく、例えば行政がものを提案するときだって、予算を決める前じゃないと、冬に騒いだってものは決まらないですね。それと同じように、今回、脳卒中という病気で転院する時にどうもお金がつくということがあり、それがきっかけで話し合いができたというのは、必然でした。私たちから、市民

側から見れば、「医療崩壊」というキーワードがあって、個人や市民の医療を守れないという現実をつきつけられた。だからこそ、医療機関と対話をする時にこういうタイミングを逃さないということは大事だと思います。…もしこの会場にいる皆さんとともに、今被災をしてしまったとしたら、「市民自治」よりも「災害」のことで紛糾するところなのですね。それと同じように、タイミングを図る、優先順位を図る、市民が今、皆さんが考えていらっしゃる課題の中でも、優先順位を考えるということも大事だと思います。

それと、この流れの中で一番大事だったのは、大きなミッションでした。正義であるミッションを掲げたときに、それに向き合ってくれる首長を説得することです。それで、その検討会をつくることを容認してもらって、皆さんが「話し合っ」「実行する」ということの土壌づくりというのは、実は行政でもできることだと思うのですね。

○来場者 要は、言語をどうやって共通化したかということと、市民の側からいろいろな話が出たときに、そのあたりをどういう言葉で伝えたのか。

○庄司 本当は、先ほどご発言いただいたように、市民の方にパスづくりに参加してもらいたかったのですけれども、当時は難しかったです。夜7時から9時とか、2週間に一回とか、皆さんにご負担をかけることばかりだと思います。私たち、行政の職員が分科会に参画した時には、市民の皆さんの今までのご苦勞や患者さんのお話を聞いた十何名の気持ちを代弁する形で、本当に大事に持っていったつもりですので、そこは、ここに入っていなかったというよりか、皆さんの気持ちはちゃんとつないでパスの形にしたと思っています。ですから、どこかでは代弁者、どこかでは当事者になり、というのが必要かなと思います。

○酒井 今後これができ上がった後は、市民で使った人もだし、これから使おうとする人ももっと意識をして、主体的にパスを考えていくということが必要だと思いますね。

○庄司 今日いらっしゃった皆さんがご理解をしていただけたとしたら、それがご家族にもつながって、ご友人につながって、地域にもつながってというふうになれば、今日、私はものすごくうれしいです。

○酒井 そちらのかたはいかがですか。最初に資料をお渡しせずにとということで、少し斬新な勉強の会ということだったのですが。

○来場者 実際に体験なさって、とてもいい話を伺ったと思うのです。医療と介護と市の行政と連携ができたというのは、とてもいいと思うのですけれども、私たち、普通、身近なお医者さんの場合、実際に何時になったらおしまい、木曜日は休診、夜は絶対にお電話しちゃいけない、受付などをしない、留守電は通じません。そういうまちのお医者さまもあるわけですね。そうすると、かかったときにちょうど水曜日の夜で木曜日が休みで、でも熱は高いまま。それで、じゃということで、総合病院に行く。まちのお医者さんが木曜日はお休みだから総合病院に行ったのだけれども、そのまちのお医者さまは、もうよその病院へ行ったから、自分のところは切れたというような話を聞くと、この連携も、連携をとってきたのはいいと思うのですけれども、心の問題だと思うのですね。人間の対話にしても。だから、それこそ学校教育から、ずっとみんなが意識しながら、家庭教育から、お互いに大事にするということにつながると思うのですね。みんな、地域でやさしく、地域で周りを見るということ、そういうふうにものを理解しながら、もっていかなければ

いけないのではないかなと思いました。

○庄司 ありがとうございます。

○酒井 どうぞ。

○来場者 客観的なテーマとしては、結構、脳卒中治療の進め方、医療関係者の連携をどう図ったのか、そのパス（連絡書）を受け取って、使ってやる所にもっていくことができたということだと思うのですが、チラシの「市民自治の未来を考える」というのは、なんかちょっと大げさに聞こえるような感じがする。医療を進めるための関係者の連携をどう図っていったらいいか。そういうことが、テーマにどうかかわるのか。

○庄司 私のお話は、医療、福祉の分野というのも生活の中の課題の中に入っていますね。それで、今までとても行政とお話がつながらなかったとっていらっしゃる方々のために、話しづらい人たちとやってきた経過をご説明することによって、もしかしたらそれも行政との話し合いの一つのお役に立てるんじゃないかなということで、事例というか、一例として、話しにくい人たちと話をきて、落ちるべきところに落ちてきたという話を、ご説明したのです。

○酒井 今、うまくまとめていただきました。その前の女性の方がおっしゃられたように、今回は脳卒中というか、一つの病気のための資料のように見えるのですが、これを使いこなす、また、これを今後どんどん進めていく、いわゆる市民の一人一人の思いがこういうものに積み重ねて、全員が使いやすいものに成果としておちていくということをお話いただきました。人の生活なんて、一筋縄ではいきません。あっちもこっちもいろいろなことがあってのことなので、それをどういうふうにトータルして、市民が意見をどんどん言い続けていく、それこそ強い意思を持って言い続けていく、主体的に言い続けていくことが重要なのかなと思います。

そういうわけで、今日は極力多くの方に声を出していただくということを目標にしたのですが、なかなか司会も不慣れで難しかったです。シンポジウムときはパネラーの方は堅苦しかったという皆さんのお声で、今日はこのような形でゲストに庄司さんをお迎えして、思いのたけをお話いただきました。

○庄司 「話を短く」とよく言われるのですが、長い間おつき合いしていただきましてありがとうございます。（拍手）

○酒井 今日はちょっと遅くなって申しわけございません。週末の夕方、御参加いただきまして、どうもありがとうございました。（拍手）

第1回連続講座

参加者アンケート集計結果

武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～
参加者アンケート

1 ご自身についてお教えてください。

① 武蔵野市との関係

1	市内在住	8	80.0%
2	市内在勤	1	10.0%
3	市内在学	0	0.0%
4	市内で市民活動をしている	0	0.0%
5	その他（狛江市）	1	10.0%
	合計	10	100.0%

② 性別

1	男性	8	80.0%
2	女性	2	20.0%
	合計	10	100.0%

③ 年代

1	10代	0	0.0%
2	20代	0	0.0%
3	30代	1	10.0%
4	40代	1	10.0%
5	50代	0	0.0%
6	60代	2	20.0%
7	70代	6	60.0%
8	80歳以上	0	0.0%
	合計	10	100.0%

2 講座に参加されたきっかけは何ですか。(複数回答可)

1	市報・ホームページ等を見たから	5	25.0%
2	コミュニティセンターに置いてあるチラシを見たから	1	5.0%
3	案内の手紙又はEメールが来たから	4	20.0%
4	武蔵野市政に興味があったから	4	20.0%
5	自治体運営に興味があったから	4	20.0%
6	友人・知人に誘われたから	0	0.0%
7	その他 ・(当日、別のイベントに参加した時に) ご案内いただいた ・都市マスの説明会の流れで	2	10.0%
	合計	20	100.0%

3 1月31日開催のシンポジウム「武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～」へは、参加されましたか。

1	はい	5	50.0%
2	いいえ	5	50.0%
	合計	10	100.0%

- ・あの時の庄司さんの高石さんへの対応に感心した。市職員にみならってほしい。

4 平成20年12月21日開催の「分権時代の自治体運営の基本ルールを考えるシンポジウム」へは、参加されましたか。

1	はい	4	40.0%
2	いいえ	5	50.0%
	その他(いろいろ出ていておぼえていない)	1	10.0%
	合計	10	100.0%

5 講座の内容についてお聞かせください。

① 講座の内容はわかりやすかったですか。

1	よく理解できた	6	60.0%
2	ある程度理解できた ・酒井講師の実状、現在に至った経過。お考えは。(1)	3	30.0%
3	あまりよくわからなかった	1	10.0%
4	よくわからなかった	0	0.0%
	合計	10	100.0%

② 講座を通じて、興味を持たれたことや印象に残ったことを自由に記入してください。

- ・ どなたかもおっしゃっていたが、一例として扱っていたテーマ自体がクローズアップされすぎていた。もう少し事例については簡易かつ内容を絞ってもよかったですのでは？
- ・ 「脳卒中医療をすすめるために医療従事者の連携をどうすすめるか」→ 具体的な内容をテーマで示した方が分かりよかった。
お医者をもとめたことは立派でした。
- ・ 専門分野での協働の大変さが良く分かった。一方素人集団が市と協働する事は別の意味で大変なのだと思う。自分の場合、日頃実感している。
医療・福祉が地域で見えにくい。家の中から外に出るような話の開放を期待する。当事者になったとき、納得できる説明があると良いなーと思いました。
- ・ 第一回講座を受けて、一 限られた時間なので、講師の方がお話を充分なさった上で、質問を投げ掛けて下さい。
- ・ 組織のバリアフリーの問題ですが、よく…（判読不能）いました。以前ヘルパーを2年半くらいして在宅介護を少なくした方が医師、看護師、ケアマネージャ、ヘルパーの話し合いがあり一体的…（判読不能）にしなければならないと講演でもおそわりました。病院は全くなく、またにがい思い出もあります。

6 武蔵野市の市民自治の未来をイメージすることができましたか。

1	できた。 ・介護、保険、医療に於て、ある程度（イメージすることが）できた。(1)	4	40.0%
2	できなかった。	3	30.0%
3	よくわからない。	3	30.0%
	合計	10	100.0%

7 市民自治を推進していくためには何が必要だと思いますか。（複数回答可）

1	市民、事業者の市民自治に関する当事者としての意識向上	5	27.9%
2	行政の市民自治に関する意識の向上	4	22.2%
3	市民、事業者、行政の連携や協働の推進	4	22.2%
4	市民、事業者、行政の役割や責任の明確化 （・明確化の努力は必要ですが、こだわらない方がよい）	1	5.5%
5	上記を実施してするための仕組み・ルールづくり	3	16.7%
6	その他 ・市民、地域上の人意識が上がること、また組織化されること。	1	5.5%
	合計	18	100.0%

8 7での回答を実現するためには、誰が何をしていくべきだと思いますか。

- 当事者に対しての入口やテーブル作り。当事者参画。
- フラットに異なる立場の人が話を出来る場。(unofficialな)
例えば、今回のように連携が必要とされる分野について、問題提起側のシンポのようなものをして、
その後の unofficial な場から、応々にして何か生まれる。
- 市民の全員（ムリか）参加が必要でしょう。コミセンとか、テンミリオンとかで話し合いをたびたび開催することが一つの方法でしょう。
- それぞれが強い意志を持つことかな～。
- 市民が市勢に関心を持ち、望ましい方向へ行動する。響き合うように。(各部門での協働)
- 相手が得心できる説明をして欲しい。
- ⑤の仕組み・ルールづくりをつくることを、全員が参加して進めてほしい。自治基本条例も必要となると思う。医療は医療だけでなく、いろんな状況、がんきょうから、病気が現実になるので、社会が…（判読不能）。

9 市では、来年度以降も継続して、市民自治のあり方に関する講座やシンポジウムなどを開催していきたいと考えていますが、参加したいと思いますか。

1	参加したい	9	90.0%
2	参加したいと思わない	0	0.0%
3	参加はできないが、報告書などは読んでみたい	0	0.0%
	未記入	1	10.0%
	合計	10	100.0%

10 その他、ご意見・ご感想などありましたら、自由に記入してください。

- 地域連携パスの中にもっとコミュニケーションやコミュニティを入れてほしい。患者はすべて受身ではなく、患者が主体であると理解出来るパスに更新して行ってほしい。
- いろいろお金が必要ですが、無限ではないので、ちょっと気になるところです。
- 今回の講座は市報に記されているように「さまざまな分野で、活発に活動している方を講師として」との事。そのお話を期待致して居ります。
- 社会全体がかわらないと、また変えて行かなければ、何に価値を置く（イギリス、オランダ…）か、国の主権も大切だが、国を離れることも重要となってくる。世界連邦。

第2回 連続講座

(2) ①第2回連続講座

ゲストスピーカー：下田 和弘（武蔵境活性化委員会委員）

会場：かたらいの道 市民スペース

○酒井 こんにちは。今日、司会をやらせていただきます武蔵野市の市民協働サロンのコーディネーターをしております酒井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。



今日お配りした資料に緑の袋があって、気になっている方もいらっしゃると思います。既に開けた方もいらっしゃると思いますが、これは後ほど下田さんの方に説明をしていただこうと思います。

連続講座第1回目は、武蔵野赤十字病院の在宅介護支援センターのセンター長の庄司さんにお越しいただいて、庄司さんがかかわられておつくりになられた地域リハビリテーションのシステムについて、つくるまでの過程について、医療従事者と福祉従事者、市民の声がどのように反映されていくのかというところの苦労を交えてお話をしていただきました。そのときにも、実際にそれを利用する市民が主体的にそのシステムを使いこなしていく、どうやって暮らしていくのか、主体的に考えていくことが重要になります。このシステムを活用して、十分使えるものにするのは、市民が自分の力で考えることがベースになりますということで、お話が一貫していたかと思います。

本日お越しいただいた下田さんは、商店街の活動をしていらっしゃるのですが、お店のある武蔵境で生まれて育っていらっしゃるんですね。

○下田 はい。

○酒井 です。武蔵野市の市民でもありながら、そこで実際にお店を営んでいらっしゃる方という2つの側面を持っていらっしゃるのです。ご自分が市民として活動していくことと、商店街の中での自分の生きていく糧を求めていく部分と、両方どうやってもうまくかみ合わせていらっしゃるのかというあたりを話をいただければなと思っています。

早速ですが、まず、気になる袋の中身をご覧ください。ここからどうぞ説明してください。よろしくお願いいたします。

○下田 皆さん、こんにちは。皆さんのお手元に緑色の袋がいていると思うんですけども、それが今、武蔵境で商店街を通してやっている町おこしの資料だったり、おせんべいが入っているんですけども、今、武蔵境、僕の肩書に書いてある武蔵境活性化委員会というのが、町おこしの一環で、辛いものを取り上げていろいろやっているんですね。その中の1つとして、中に辛いおせんべいが一枚入っています。本当に辛いので、食べるときはかなり注意して食べてください。本当に辛いです。インパクトのあるものとしてつくっていますので、よけい辛くしてあるんですけども、そういった活動をしています。

あと、地図が3種類入っていると思うんですけども、それも今回できた武蔵境の商店

街を案内する3種類の地図。用途に分けて3種類つくっておりますので、今日は三鷹でやっておりますけれども、終わりましたら、ぜひ地図を持ちながら武蔵境のまちを歩いていただければという思いも込めて持ってきています。

○酒井 あと、実際に今、「さかいHOTほっと」に参加しているお店というのが一枚入っていますよね。これは、今おっしゃった活性化に賛同していらっしゃるというお店ですか。

○下田 そうですね。商店街の中で活性化委員会に賛同して町おこしの一環で辛いものメニューをつくってくださったお店19店舗。うちも入っていますけれども、その中に、日本獣医生命科学大学さんが入っているのと、20店舗目として、亜細亜大学さんの学食がつい昨日参加を表明しましたので、大学の中に入れるそうですから、そこで食べていただければと思います。

○酒井 この活性化委員会は、商店街の方だけじゃなくて、どんな方が参加されているんですか。

○下田 活性化委員会は、2年ぐらい前に、最初は商店街の若手を中心に立ち上げたというか、集まったんですけれども、その後、一般の方たちと共存ということで、去年、武蔵境自動車教習所の今の会長の高橋さんを委員長として、日本獣医生命科学大学、亜細亜大学みたいな学校と、一般市民の方、もちろん学校がかかわっていますので、学生さんとか商店街だとか、いろいろな人たちを交えて、武蔵境のまちを少しPRしよう、もう少し町おこしをしたいと。その中の思いに、教習所の今の会長さんが、私も定年だから、最後のご奉公で武蔵境のまちづくりに一役買いたいということで手を挙げてくださって、今、いろいろな活動をしています。

今は辛いものを取り上げていますけれども、これがメインではありませんので、いろいろなことをやりながら、武蔵境の町おこしをしています。だから、皆さんから勘違いされて、境は辛いものだけをどんどんやっていくんでしょと言われるんですけれども、そんなことは決してないので、また違う方向から、皆さんと共通性のあるものも今後やる予定ですので、そのときはぜひご協力いただけるように、よろしく願いいたします。

○酒井 それで、これから市民も一緒にということやっていくということですね。

○下田 そうですね。

○酒井 そういうわけで、今日の資料とともに、お土産の話も少しして、本題にいよいよ入るのですが、今日、実は、既にお気づきかと思いますが、後ろの方で市の広報の方が写真を撮っていらっしゃいます。今回、カメラと、実はこれまでのこうやって報告書が出ておまして、毎回録音をしております。メインのゲストスピーカーさんのお話プラス、後半の意見を皆様からいただいた部分もすべて録音をさせていただいておりますので、ご了解いただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

この報告書は、受付にもございますが、今までのものは皆さん見ていただくことができますので、どうぞご覧になってください。

それでは、下田さんのお話を伺います。今日レジュメをつくっていただきまして、ご自分でどのくらいの話の長さになるのかわからないというふうにおっしゃっていましたが、途中で皆さんから質問があれば、それを伺いながらお話しいただけるといいますので、どうぞよろしく願いいたします。

○下田 簡単なレジユメをペラッと2枚だけつくってみたんですけれども、私は前回話をした武蔵野赤十字病院の庄司さんですとか、他の大学の先生たちと違いまして、ただのお茶屋のおやじですので、こういうのをつくるのが非常に苦手でありまして、とりあえず思いつくことを書いてみたので、ちょっとわかりにくいところもあると思いますけれども、何かありましたら、気兼ねなく質問していただいて、やりとりしながら進めたいと思いますので、よろしく願いいたします。

まず、今回のテーマである「武蔵境の市民自治の未来を考える」ということで、私みたいな商店主、市民でもあるんですけれども、商店街として今までどんなことをやってきたのかとか、商店街が今どのような状態になってきているのかというのを少しお話しさせていただこうと思うんですけれども、まず、レジユメに写真が載っています。車が写っているの昭和2年と、昭和28年の商店街風景というのがありますけれども、これはどちらも実はうちが写っているんです。それで参考に引っ張りだしてきたんですけれども、タクシーが写っていますが、うちはもともと、お茶屋をやる前はタクシー屋さんだったんですね。実は戦争で燃料がなくなったり、車を軍に供用したものですから、戦後、お茶屋になりまして、タクシーの車庫だったところが現在のお店になっています。白黒なのでわかりにくいんですけれども、あるお店が昭和28年当時のうちのお店の状態ということで、先ほども言いましたように、昔から武蔵境で生まれ育って、代々継いできたという経緯があるので、そんな流れからも少し、——境のことに関してだけになりますけれども、お話をさせていただければなと思っております。

まず、商店街なんですけれども、商店街がどんなことをやってきたのかということからお話をさせていただきます。まず、昔、一番多かったのが消防団。なぜかというと、僕ら、昼間は仕事でお店にいますし、夜は当然そこに住んでいますので、夜もそこにいる。そうすると、24時間ずっとそこにい続けられる。昼間に火災があっても、夜に火災があっても、まず出動ができるということで、消防団の候補として一番適しているというのがありますから、それで消防団になる商店主というのが非常に多かったんですね。

つい先ほど、吉祥寺で火災があったらしくて、僕の携帯に入りましたけれども、見たところには鎮火とすぐ入りましたから、大したことなかったと思うんですけれども、そういったような感じで、もともと地元で仕事もしているし、衣食住を全部しているの、そういった形のかかわりというのが多かったんです。

そのほかにも交通安全協会ですとか防犯協会ですとか、いろんな公共的な活動にも、商店主はそこに住んでいるということでかかわりが非常にありました。30年ぐらい前までは、商店街がほとんど住まいと店舗が一緒になっていましたので、そういう活動が非常にやりやすい部分と、できる人材が多かったというのがあるんですけれども、今、実際にどうなのか。

今日の資料で昭和50年の武蔵境駅北口の駅前の売り出しのときの参加店の一覧を載せたチラシを引っ張りだして数えてみたんですけれども、当時、東海道五十三次とはなっていますけれども、62店舗のお店が加盟していました。そのうち今残っているのが19店舗。43店舗はもうありません。なくなったお店の跡に何ができたかということ、ほとんどがチェーン店。そこには住んでいなくて、日中だけよその方が来て商売をしているというような

現状に変わってきています。

こんな現状から、今は、消防団にしましても、交通安全協会にしましても、商店街としてのなり手がいないような状態なんですね。ただ、まだ何とか消防団なんかも地元の方たちで数はそろってはいるんですけども、実際に僕も消防団に入って 22 年で、定年が 60 歳になったから、まだ十何年やらなければいけない。うちの父の時代ですと、なり手がいましたので、大体 15 年から 20 年消防団をやると、もう入れ替えでした。まだ現役でばかりやっているところに消防団活動ができるけれども、今はなり手がいないので、定年までやって当たり前というような。だから、見た目には消防団全員、——武蔵野市ですと、1 分団 25 名の 10 個分団、250 名、全員そろっていますけれども、中身としては、消防団員も高齢化が進んでいる現状があるわけなんですね。

そういったものを見てきても、これから先、未来自治を考えるとという場合に、私たち商店街とか市民として、今まで当たり前でできたことができなくなってくるよという危機感が非常に強い。それは、今回いい機会なので、皆さんと一緒に考えて、これからどうしたらいいのかなという提案をさせていただきたいなと思って今日も出てきたので、これをどういうふうにとらえていただくかというのも、また一つ今後の課題になるのかなと思っています。

どうでしょう。なかなかしゃべるのが下手なので済みません。

○酒井 今、消防団のお話をしてくださったんですけども、武蔵野市の長期計画の中にも——今は調整計画ですが、実は商店街に期待する市民の現状が書かれています。商店街は、例えば、ご高齢の方や子育て中の方がそこのお店に行けば、物を買うだけではなくて、例えば下田さんは、それこそ生まれ育っているから、おそらく下田さんが子どものときから知っているお客様もいらして、その方がどんどん高齢になられているとか、ご夫婦のどちらかが入院しているとか、そういう話もきっとわかっていたりして、心配しつつ、そういうお話もする、コミュニケーションもできるとか。あと、消防団もそうですが、交通安全とか、お祭りもされていたりということで、市民にとっては商店街のお店、それこそ、そこに住んでいるお店の方はとても重要な居場所というか、場所にはなっているんですね。なので、きっとその意味でも今されている活動というのはすごく重要なものかなと思っています。

○下田 最近、自分がやっていて特に思うんですけども、消防団でも春と秋に火災予防運動で、地区を決めて一軒一軒消防署の方と回るんですね。そのときに、僕ら商店街の人間はある程度地理も知っていますし、当然伺ったお宅が自分のお客さんだったりして、今日は格好が違うけれどもどうしたの、なんて、気軽な話から防災の説明をしても非常に受けてくれたりとかという、非常にいい面があったんです。ただ、最近、そうじゃない消防団員の方も増えていまして、そういう方たちと回ると、境何丁目という、どの辺？というのから始まってしまって、一般住民の方たちとしゃべるというのが苦手だから、回ってもただついてきてチラシを配るだけ。チラシを置いてきて、これが火災予防運動のチラシです。はい、どうぞ。はい、さようならというので終わっているんですね。ですから、見た目には事は終わっているんですけども、内容が全然違う結果に終わっていて、場合によっては、火災報知機をここへつけたいんだけど、見てくれない、上がってくれない

なんて言われちゃうぐらい、僕らだと言われるんですけれども、なかなかそういうのもできていない。だから、希薄になっているというのが非常にありますよね。

それと、ここにもちょっと書きましたけれども、商店街というのは、そういった日々の営業の中で、そのまちのことを非常によく知っているというのが当然ありました。酒屋さんとか米屋さんは、特に一軒一軒配達をしていましたので、どこのお宅にどんな方が住んでいて、何て言う名前で、下手すれば電話番号も知っていてというようなお店が非常に多かったのですが、例えば、何々さんのお宅にどうやって行くんですかと聞かれたときに、うちでわからなくても、三軒先の酒屋さんへ行って聞いてと言うと、そこでわかったりとか、そういうのが商店街で事細かにわかっている、極端な話、おまわりさんが聞きにくるといふことも結構あるんですよ。

○酒井 下田さんのところへおまわりさんが聞きにくるんですか。

○下田 そう。うちの商店街は特に昔からの店が減ってしまったので、境の北口でわからないことがあったらお茶屋さんへ行ってと、うちが道案内窓口みたいになっているところがあるんですけれども、本当に多くて、要は、おまわりさんは新任で、異動で来ますから、そのまちのことは知らないですよ。今の住宅地図を見ればある程度はわかるんでしょうけれども、例えば、30年ぶりに武蔵境へ来たら、駅も変わっちゃって、右も左もわからなくて、昔あの辺にこういうお店があって、こんな人がいて、こうなんだけどとおまわりさんに言ったって、おまわりさんはチンプンカンプンなわけですよ。そうすると、おまわりさんがそのお客さんを連れてきて、お茶屋さん、こういうふうに分かれたんだけど、こういう人ってどうした？ ああ、あの人はあそこに住んでいたけど、今、貸しちゃってあっちにいるよとか、商店と言うのはそういう話が結構できて、それが一つのまちのいろんな自治にもつながっているなと思います。そういうことによっておまわりさんとも顔見知りになるし、そういうのを聞きにくるといふところがあるので、困ったことがあったらといっても、あの交番に行くと、何ていうおまわりさんがいるから相談してみたら、というのもできたんですけれども、最近、それが極端に、ここ2～3年で薄れてきているという危機感が非常にあります。

それは全般的に言えて、特にうちはそういう窓口になるからよけいそう思うんでしょうけれども、子どもさんたちの通学途中の事件とか今いろんなことがあったりすると、すぐ皆さんで立って見てくださいます。だけど、前は、商店街というのはそんな必要はなかったわけですね。子どもたちが通っていれば、顔も知っていたし、全部わかっていたし、子どもたちも気軽に入ったけれども、今、それがまずない。だから、そういうのもどんどん変わってきて、商店街が補ってきた役割というの薄れているし、それができない現状だけど、これを今後、例えば他のものに頼むとなると、どんな形になるのかなというのを一番危惧するところなんですよ。多分見た目上はできると思うんです。いろんな形で。だけど、実際にその内容が伴うのかということ、いざというときに、表面上だけ取り繕ったって内容が伴っていなければ、防犯や防災にしても一歩遅れるとかということも出てくると思います。

○酒井 そうですね。確かに大型店でも、今、例えば、車いすや手話ができる店員さんがいたり、バリアフリーという環境も整っていますけれども、そこのお店は開いているとき

だけですし、あと、もう一つ、商店街に関しても、そこに住んでいらっしやらないお店だと、閉まってしまえば、その後は何も関係がなくなってしまうので、その意味では、昔からあるお店、昔からある商店街というのは、本当に目に見えない部分でもとても安心感を与えてくれるところなんですよね。

あと、もう一つ、すきっぷ通り商店街は武蔵境駅前のメインの商店街なんですけど、これは通称で平仮名で「すきっぷ」と書くんです。今の「すきっぷ通り」という名前がついた由来のその先には、あそこの道路というか、商店街の通りに工夫があるんですよね。

○下田 白黒の写真でわかりくいんですけれども、昭和50年のうちの商店街の売り出しのときなので、非常に人が多いときの写真になっていますけれども、実は道路がこの当時まだアスファルトで、電柱がニョキニョキして、電線が本当はいっぱい商店街の上にあります。排水口は各店舗の前に側溝というか、溝が切ってあって、そこを水が流れるというようなタイプの、一般的な商店街の道路状況だったんです。けれども、今、一番下にあるタイル張りの道路というのはセンター排水になっています。センター排水というのは、道路の真ん中に排水口があるんです。普通、道路というのはかまぼこ型で、両サイドに水が流れて、お店の前で排水をするというパターンだったんですけれども、うちの商店街は、当時、日本で最初だったんですけれども、真ん中がへこんでいまして、真ん中で排水をするという形の道路にしたんです。平成元年にでき上がったんですけれども、当時東京都のモデル商店街事業として行ったんですね。

ただ、問題が1つありまして、道路が真ん中に向かって斜めになっていますと、大型トラックがすれ違って通ると、下が10センチ離れていても上がぶつかるといような状況なので、すったもんだした後に、最終的に、半永久的に一方通行ということなら、モデル的に認めましょうということでセンター排水にすることができました。

ただ、センター排水の別のメリットがあるんですけれども、先ほど言われたバリアフリー。車いすの方なんかはうちのお店に入ってくるのに、段差がありません。道路から1センチも段差なく、要は、両サイドに水が流れて、お店の前で排水をすると、お店の前に側溝ができますので、どうしても段差ができるんですけれども、逆ですので、そのままの傾斜でうちも建物に入れますので、下手すると、どこからどこが下田さんの敷地で、どこが道路？ と言われるぐらい、境目がないような状態でできています。

ただ、それをやるには、多分皆さんご存じないでしょうけれども、今はきれいなまちにはなっていますけれども、あの道路の工事には商店街もお金を出したんです。実はうちでも100万ぐらい出したのかな。そして今も維持管理は商店街がやっていますので、壊れると商店街が、——多少補助はいただきますけれども、お金を出して補修をしているというような状態です。

○酒井 そうですね。そうやってそれぞれがお客様のため、ご自分たちのお客様に来てほしいという気持ちもあって、自主的に皆さんがお金を出して、商店街の環境を整えて、しかも維持もしていらっしやるということなんです。あわせてもう一つ、これはおまけ的なんですけど、「すきっぷ通り」という通称もこのときにいろいろ工夫されて公募されたというふうに聞きましたが。

○下田 うちの商店街、実は武蔵境駅前商店街協同組合という長ったらしい漢字が正式名

称なんですけれども、実は今のすきっぷ通りというのは、ちょうど平成元年にタイル張りの道路から何からが全部でき上がったときに、一般の市民の方から公募してつけた名前です。数ははっきり覚えていないんですが、賞金を出しましたので、2,000 通ぐらいの応募がありまして、僕も含めた商店街の2代目、3代目、——20年ちょっと前ですから、当時若手と言われたところに、10名ぐらいが集まって、まずそこから自分の好きなものを10個ずつ選んで、10個をせーのでポンと出して、そこでかぶった名前だけを残して行って、どんどん絞り込んで行って、最後の最後に3つだか4つだか残って、それはみんなで議論して、どれにしようかと検討しました。

そのときに、「すきっぷ通り」というのと「もえぎ通り」というのと、何かもう一つぐらいあって、最終的に「すきっぷ」になったんですけども、実は「すきっぷ通り」も平仮名と片仮名とあった。どうしよう。そうしたら、応募してくれた方の選んだ理由に、まず、スキップして買い物したいというのでスキップ通り。よくあるパターンなんです。そのほかに、商店街が好きというのと、あと駅前だから切符というのも含めて、しかも、この商店街には柔らかいイメージの平仮名がいいですというのが書いてあったので、それから平仮名で「すきっぷ」に決めたんです。パソコンで打つと赤線が出てきちゃうんですよね。平仮名のすきっぷはないので片仮名に変換されちゃうんですけども、僕らは選んだ一人ですから、それをいまだに非常にこだわって、「すきっぷ通り」というのに愛着を持ってやっています。

○酒井 それを聞いたときに、ああ、そうなんだと。「すきっぷ通り」と気軽に言っていたんですけども。

○下田 あくまでも通称です。

○酒井 商店街、武蔵野市は今、市内で56でしたっけ、商店街というのが、いわゆる商店会というのがあるんですよね。

○下田 そうですね。

○酒井 それぞれ個性が違って、下田さんのいらっしゃるところは武蔵境の駅前なので、おのずとお買い物の方もいらっしゃれば、お家に帰る途中に通る方、行き帰りで通る方もいらっしゃるし、仕事で通る方もいて、おそらく市内の中では吉祥寺の駅前と同じくらいとは言いませんがかなり人通りが多いんじゃないですか。

○下田 同じにはならないと思うんです。

○酒井 でも、かなりの人通りが。

○下田 吉祥寺は当然よそからの集客もあるので、かなりの手数になると思うんですけども、うちの武蔵境の駅前というのは、どちらかというとベッドタウン的な場所なので、通勤通学ですとか、そういう方の通行量がほとんどです。だから、買い物を別にうちの商店街でしないけれども、そこを通る方というのが非常に多い立地にある商店街ですね。

○酒井 ただし、一方でイトーヨーカドーがあったり、今、駅舎も高架になったりということで、結構武蔵境の駅前はかなり変化があるんですよね。それまで踏切で南北に分かれていたときと、イトーヨーカドーができますと言ったときと、おそらく危機を感じる時が何回かあったと思うんですが、それはどうやって皆さんで乗り越えていらっしゃったんですか。

○下田 乗り越えたというか、まず、踏切に関しては、中央線ができたときに一番最初にできた駅で、120年以上前ですから、線路で分断されているのは、120年前から始まっていますので、そんなに危機感はなかったんですけれども、イトーヨーカドーができるようになったときには、武蔵境に大型店というのはないときでしたから、あれをきっかけに、商業の実情が一気に変わったというのがありますよね。それまでは皆さん結構商売が成り立っていたんですけれども、大型店ができることによって、営業不振になったりとか、後継者難だったりとかして、今になると高齢化だから辞めちゃうという理由の一つには、当然大型店が出てきて、跡を継がせたくてもとても食べていけないから、貸しちゃった方がいいやという個人店を辞めてしまうという状況になった。その一因には確かにああいいうイトーヨーカドーですとか大型店もかかわってはいますけれども、それは時代の流れなので、しょうがないというふうに思っています。

ただ、そういうのも皆さんにわかってもらいたい。ただ単にお店が辞めちゃったというのではなくて、いろんな原因があって辞めざるを得なかったところもあるし、ただ、その一方で利便性は上がっていますから、当然僕なんかもイトーヨーカドーに買い物に行きますし、いろんな面で便利だからという。だから、便利な部分は非常によくなったんだけど、一方で、それによってだめになる部分が出てくる。それもきちんととらえて考えていけないといけないのかなとは思っていますよね。

○酒井 そうですね。

今、ずっと商店街の商店主としての下田さんのこれまでのいろんな活動を中心にお話をしていただいていたんですけれども、もう一つ、武蔵境は、桜堤の公団もリニューアルされましたし、その奥にマンションができたりということで、武蔵境を利用する市民の方の家族構成なり、もうちょっと言うと年齢層もおそらく変わってきていると思うんですね。子育てをする方が増えてきているんじゃないかな。あと、学生さんもたくさんいらっしゃるんで、これまでとまた違う客層というか、市民が商店街を利用することになってきていると思うんですが、そのあたりで、これまで何とか持ちこたえてというか、やってきたことと、今後、例えば市民と一緒に何かをやっていくとか、そういうことは、先ほども一番最初の活性化もありましたけれども、そのあたりはどういうふうに展開していこうと考えていらっしゃるんですか。

○下田 多分、武蔵境は、今言われたように、建物もどんどん増えてきて、公団ができたりとか、結構高級なマンションが幾つかできたりして、いろんな世代の方たちが増えていきますから、高齢者も増えていきますし、若い共働きの世代ですとか子育て世代という方も非常に増えていきます。ただ、逆を言うと、もともとそこに住んでいた方たちではなくて、よそから来た方たちなので、なかなか地域のことに参加するきっかけが少ないというのがありますし、気持的にもそういう部分は薄い。

○酒井 武蔵野市民というか、市を一緒に盛り立てていこうというのは。

○下田 というのはない方たちが非常に多いという状況なんです。昔は、地元の方が8割で、よそから来た方が2割で、何かをやるにしても、声をかけるとある程度伝わることも伝わりましたし。

○酒井 みんなでまちをつくっていこうというのができたんですね。

○下田 というのがあったんですけれども、今、境は特に入り乱れている状態なので、今やっている活性化なんかもそうなんですけれども、こういうことをやることによって、そういう方たちに少しでも参加をしたり、武蔵境というものとか武蔵野というものに興味を持ってもらうことから次のステップに進めるのかなと思ってやっています。確かに今回やっているのは辛いものですから、商売につながるようにとらえる方もいると思うんですけれども、実際、僕も逆に言うと、しょうがなく辛いせんべいをつくっちゃったりとか、役員ですから、何とかせにゃというのでやったんですけれども、実際、もうかる、もうからないというのはないですよ。これをつくったからすごくもうかって、だから活性化に一生懸命やっているというのは全然ないですよ。これは別に辛いものじゃなくてもいいんです。皆さんが何かやっていることに興味を持って、境って何かあるよって思ってもらえればいいんです。今度またトウガラシの苗を子供たちと植えるというのを6月6日にやるんですけれども、そういうのをお知らせするときでも、こういうのから入っていくと、子どものこともやっているんだねという興味を持ってもらうために力を入れてやっているだけで、たまたま僕ら商人が多かったり、インパクトをとるのにこういうものから始めた方がいいだろうということで始めています。当然商店街の活動ですから営利がゼロでやっているとは言いませんけれども、ですけれども、決して今回ののは、それだけを目的として僕らがやっているというのとは違う。

○酒井 さっきの消防団と同じように、自主活動とか、市内のボランティア活動の一環という部分も。

○下田 新しく来た人たちにも当然まちを知ってもらいたいし、これからはそういう人たちと一緒に何かをやっていかなければいけないというのと、その会話とかつながりになるツールを何かつくらないと、いきなりごめんくださいと言って、消防団に入りませんかと言っても、何それ？ と言われちゃうだけです。そうではなくて、僕らはこういうことをやっているんですけれども、こういうことなら参加できますか、ああいうことはどうですかというのを自分たちでもやっていかなければいけないのかなというのも含めて、境でこういうことをやっているんですけれどもね。

○酒井 実際にそういう活動をしていて、今までと違う、ほかの市区から入った方も参加されていらっしゃるんですか。

○下田 今日一人、うちの広報担当部長が後ろの方にいますけれども、あの方は仕事でこっちの方へ来ていて、実は住まいは武蔵境とは全然関係ないですよ。だけど、仕事でいろいろ境にかかわっていた都合で、引き込まれたというか。住んでいるのはよそなんですけれども、仕事に来ているから愛着を持ってくれて、いろんな活動をしてくれたりとかという方もいますし、そんな方がいるぐらいなんだから、住んでいる方なら少しは皆さんもうちょっとやっていることに興味を持ってくれる方もいるんじゃないかなと思っています。

今現在参加しているのも、学生の方も結構いるんですよ。日本獣医生命科学大学とか、亜細亜大学が一緒になっていますから。学生さんのおもしろいのは、4年間なり、日本獣医生命科学大学なんかだと6年間とか7年間とかという方もいますけれども、そういう学生時代を過ごしたときにやったことというのはずっと何十年も結構引っ張ります。

うちがやっぱりそうなんですけれども、30年ぶりに境に来ただけけれども、実は亜細亜大学に通っていたとかという方が非常に多いんですよ。それが今度仕事の都合でどここの課長としてここに来ましたとか、実は亜細亜大学に通っているときにお茶屋さんに行っているいろいろな学校の勉強の取材に行かせていただいて、そのとき、忙しいからと怒鳴られたことがあるんですよとか、そういうのもあって、学生さんはそのときじゃなくても、まためぐりめぐってとか、エネルギーに動いてくれますので。

○酒井 学生というと、何となくそのときだけというような感覚が市民の中にはあるんですが、今、下田さんがおっしゃったようなことで、また次に戻ってくるという可能性があるんですね。すごいですね。大事にしないといけないですね。

○下田 そうですね。うちみたいに長くやっていると、昔、おたくのおばあちゃんに怒られましてとか、あと、変な話、商店街のお祭りのときに、実はアルバイトで働かせていただいたんですけれどもと言って、今は本当にいいおじさんになって、係長だの、課長だのという人も来てくれたりとか、結構そういうつながりで、全部がむだになっていないなというのがよくわかるんですね。何となく目に見えないと、何で下田さんこんなことをやっているの？と言われることがあるんですけれども、そういう経験があるので、やっているうちに、何かそういう気持ちのある人に引っかかることによって、自分にもメリットになってる気がします。

○酒井 なるほどね。そのときには、何だかこれでいいのかなと思いつつも、後でそうやってまたつながっていくというのは、商店街ならではのですね。

○下田 すぐ結果が出る場合とそうじゃない場合とあって、それがすごくいい結果になるときもあります。だから、本当にまちづくりのことなんかでも、よその方とそういう交流を持っていると、よその情報も入ってきますし、そういうのも決してむだにならないなというのを今までいろいろやっていて感じます。

○酒井 そういうことなんですね。

今、少し今後の話も交えてお話ししていただいたんですが、そろそろ下田さんが3代目として、お店もですが、「すきっぷ通り」も支えていくようになっていくと思うんですが。

○下田 それがもうきちゃいました。お店はもちろん、うちは父も商店街のいろんな役員をずっとやっていましたし、いまだに多少かかわってやっています。だから、うちは代々なんですね。父は商店街活動ですとか地域の活動に非常に熱心だったので、ほとんどお店にいませんでした。ですから、僕が代を継ぐのは非常に楽でした。おやじさんはいませんから。ですから、もう20年ぐらい自分で切り盛りしてやっていますので、お店の方の代を継ぐのはもう終わっているんですけれども、商店街の方は、今言ったように、人材不足なんですよ。今、うちの商店街、82店舗加盟店があって、2階が事務所ですとか、そういうところもありますから、いろんな方たちがいますけれども、実際に上に住んでとか、そこに住んでやっているとところは10店舗ぐらいしかないんですよ。うちも1階がお店で、僕の住まいは同じ建物の7階にあるんですけれども、そういう人でさえももう10店舗ぐらいしかないんですよ。その中で50以下の跡継ぎがいるところは5店舗ぐらいしかありません。

○酒井 そんなに少ないんですか。

○下田 そうなんです。ですから、商店街活動、じゃ、おまえら50以下の若手でやれと言

われても、5人じゃ何もできないわけですね。ですから、そういうのもこれから商店街としてもやり方を変えなければいけないだろうとか、いろんなことを考えるんです。5人で今までと同じようなことをやるには、スタッフを雇わなければいけない。そのときだけ、例えばイベント会社さんに頼むとか、学生さんのアルバイトを頼むとか。

そういうふうに考えたときに、もしかしたら、市民自治も同じ？ ということをもとに思ったことがあるんですよ。何でかという、確かに税金を払ったりとか、いろんな費用負担をしていて、全部行政に丸投げをして、僕らは税金を払っていますから、これをやってください、あれをやってくださいと任せてもできるのかもしれない。でも、それはまずいんじゃないかな。だから、商店街活動もそうですけれども、たとえ5人になっても、できることは自分たちでやって何とかやっていくというふうにしていく。はなからチェーン店はだめとあきらめているところがあるんですよ。そうじゃなくて、チェーン店だってここで商売をやって、利益を上げて、働いている人たちが生活をしているんだから、それを今度考え方を変えて、その人たちを巻き込んでやるシステムを新しくつくったらどうだろう。そういうことをこういう市民自治でも考えていかなければいけないのかな。

だから、多分消防団にしても、ほかのことにしても、商店街の今までやっていた役割なんかできなくなってきたんだけど、それをただ単にお金を払ってだれかに頼むのではなくて、じゃ、だれができるの？ どういう形ならできるの？ というのをもう一回考えて、これからの市民自治を考えるということになるのかな。そんなことをお話しするために今日ここへ座ってるんですが、それは逆に僕が皆さんにお聞きしたいことでもあります。商店街では、もうこの辺、無理なんですよ。だけど、皆さん何かできます？と聞いて、それだったら、商店街もそのために少しは力になれるかもしれませんというのを考えて手を広げていかないと、自分の住んで生まれ育ったまちがすごく素っ気ないものになってしまうんじゃないかな。

言っていないんだか悪いんだわかりませんが、市の方では、今回、それを住民基本条例という形で大きな枠で考えるためにこういう講座をやっている。それはそれでいいと思うんです。非常に。ただ、それに頼りきってしまって、条例ができたから、こういう権利があってこうなんだから、行政に頼んで、あとはいいやというのは、それは違うだろうと。だから、そうじゃなくて、同じそういうのができるんであっても、武蔵野らしさとか、武蔵野は吉祥寺と三鷹と境とで全然環境が違うので、大きな枠をかぶせてもらわないで、緩くかぶせてもらって、自分たちが住んでいるまちは自分たちで考えていけるシステムにしてもらわないと、とかというのを真剣に考えていかないといけないのかなと思っているんです。

○酒井 そうですね。下田さんのところの商店街は、そういう個性があって、そういう状況がありますけれども、すべての商店街がそれぞれ個性が違っているので、画一的に考えることはできないので、例えば下田さんのやっていることをそのままほかの商店街へ持っていったら、それがその商店街をにぎやかにするのかという、それは違いますよね。その商店街の方が、自分たちの商店街はどうしたい、どういうふうになっていきたいかということをも自主的に考えていって、それに向かって何をすればいいのかということを考えていくということが必要になってくる。いわゆる他力本願ではなくて、自分のことは自

分で考えていくということが重要になってくる。

○下田 そうですね。あとは、商店街、商店街と言われていて、皆さん、よく見ていただくと思うんですけども、商店街と言える商店街が実際にいくつ頭に浮かぶかということだと思います。ほとんどシャッターが閉まっていたりとか、お店がなくて歯抜け状態でも、商店街という看板だけかかっている、何もしない。売り出しもしなければ地域活動も何もしなくちゃったけれども、商店街という名前だけ残っている商店街というのは結構あるんですよ。ですけれども、それはたまたまうちより早くそういうふうになっちゃっただけで、僕らもこのまま放っておいたらそういう状況になりかねない。シャッターじゃなくても、要はそこにだれも住んでいなくて、よその人たちがチェーンで来ているだけというのになってしまう。あれを見て、ただ単に商店街は今は売上が悪いからああなんだよねととらえるのではなくて、ああいう商店街がどんどん増えていって、まちで道を尋ねる場所もない、何もないというので、本当にいいのか、ただ買い物が便利だったらいいのかというのをちょっと考え直していただきたいなというふうには思いますね。

○酒井 そうですね。今まで前半でお話しされた商店街の持っている機能、ただ物を買うだけではない、すごくたくさんの利点なり効果があるということを踏まえると、これから商店街はどうしていきたいのかは、市民も一緒に考えていかなくてはいけない問題ですね。

○下田 そうですね。だから、そういうのがなくなったときに、市民として別の形で何ができるかということを考えるのか、それとも、変な話、商店街で少しでも買い物をして商店街を盛り上げて存続してもらおうと考えるのかは、それはその人の受けとめ方で、何も僕が商人だから、ここへ出てきて、買い物をどんどんして商店街を盛り上げて、商店街の売上を伸ばして存続させてくださいというのではなくて、そういうのがなくなったとき、どうしたらいいかというのを皆さんに考えていただきたいなというふうに思うんです。

○酒井 わかりました。ご意見賜りますか。

○下田 はい。

○来場者 消防団の入れ代わりのことについて、ちょっとおっしゃいましたけれども、下田さんのような方以外の方も入っているんですか？消防団にはどんな方がいるんですか？

○下田 消防団は、僕の父のときにはほとんどが商人だったんですよ。商人とか農家の方とか地元の方がほとんどだったんですが、今は本当に分団員になり手がなくて、人員が足りませんので、サラリーマンでも、例えば武蔵野市内に勤めている人は昼間はいるからとか、夜もそんなに離れたところに住んでいない、小金井に住所はあるけれども市内に勤めているとか、その逆の場合、勤めはそんなに遠くないところにいるんだけど、住まいが武蔵野市にあるから、消防団としてなっているという方がかなり増えていっていますよね。それから、僕もそうですけれども、商売をやっている人間も、お店に何人も人がいるとかという状態じゃないですから、例えばお店を一人で店番をしているときに火災があっても出られないんですね。ですから、昔のように半鐘がボンと鳴ったら、みんな商売をほっぽってワッと行くというような状況には、今はないというのが現状です。

○酒井 ほかに。どうぞ。

○来場者 一人の消費者としての拙い考えですけども、今お話を伺って、最後の方で下田さんがおっしゃった、店主であろうと、何だって、昭和 50 年じゃないんだから仕方ない

じゃないかと。そこで新しいシステムを考えざるを得ないかもとおっしゃって、全く同感なんです。ほかの、例えば緑町でもいろんなことをやっていますよ。さっき桜堤というお話をお出しになったんですけれども、緑町も建替えによって住んでいる人が大幅に入れ代わったんだそうです。中身である住んでいる人間が変わったんです。それによって大型スーパーマーケットをどう受けとめるかということの非常な危機感からああいうものが、建設的にまちづくりの考え方が生まれてきたということを外側から聞いていて、一人の消費者として、まちづくりというのは、そこに住んでいるからとか、さっき大学生のお話も、忘れたころに戻ってくるということが出ましたけれども、よく、邑上市長が言う、1万人大学生がいると。武蔵野市内に。これは大切な昼間市民なんだと。

○来場者 3万ぐらい。1万じゃない。

○下田 亜細亜大学だけで、年間通われる方が1万人近くいます。

○来場者 昼間市民ね。昼間だから、今、確かに通勤店主だけでなく、アルバイト店長、アルバイトが店長というのが普通であるようなチェーン店もありますから、そんなもの、夜いないし、だめだよと言っていたら、今のまちづくりはできないかと思うんです。

○下田 そうですね。だから、従来のものは従来のものでいいものもありますので、それは当然活かしていかなければいけないと思うんです。僕がちょっと極端なのかもしれませんが、下手すると5年後には商店街というものがなくなってるよ、と僕は思うんです。

○来場者 買い物パターンが変わっちゃったから。

○下田 例えば、すきっぷ通り商店街もお店は並んでいると思うんです。5年後も。

○来場者 週末しか買い物をしないという人だっている。

○下田 ですけども、活動母体としての商店街というのは、多分やり手がいなくなったりとか、今のままだったら、5年したら商店街はもうないよ、とよく言うんです。5年後に商店街がなくなって、何もそういう活動ができなくなっているのかどうかというのをもうちょっと危機感を持って考えてねと言っているんですよね。今、武蔵境は駅が高架になって南北が流通できるようになったので、このところで僕が今ちょっとやっているのが、イトーヨーカドーさんとどうやって連携を組めるのか、です。もとは地元商店街というのはヨーカドーさんを敵対視しているから、ヨーカドーさんからわざわざこっちへなんてなかったわけですよね。ですけども、今の時代は、まちに人が来なかったらヨーカドーさんでもつぶれちゃうような時代ですから、ヨーカドーさんも危機感を持っていて、今までみたいに物を売るだけじゃだめだという考えの方も何人かいらっしやるので、結構聞く耳を持っています。だから、僕は、ヨーカドーさんに、境のまちの南の核なんだから、と思ってやっていると、よその店主からは、何で大型店と一緒にやっているんだよみたいなことを結構言われるんですけども、そのくらい考えを変えて一緒にやらないと、これからいろんなことができないのかなと思っています。そういうふうに考えをどんどん切り換えていかないと、これからの、僕が思っている商店街としての自治活動というのはできなくなってくるのかなと思っています。ただ、何をやったらいいとかというのは、まだそこまではなかなか模索状態なのでお答えできないんですけども。

○酒井 でも、今、まちづくりという言葉が出たんですが、下田さんは実は最初の都市マ

スタープランのときにもかかわっていらっしゃって、単に商店というくくりではなくて、まちづくりという観点でもいろいろ考えていらっしゃるといふか、活動もされているので、その意味ではとても広い視野をお持ちで、ほかの方とは違うのかなと思っています。

○来場者 亜細亜大学の今の学長とか、今お話しされていた自動車学校の前の社長とかといふのは、スーパーマンですから。

○下田 僕から見るとすごい。

○来場者 パワーがありますよ。

○下田 僕も逆を言うと、何で教習所の社長さんがまちづくりにあんなに力を入れて熱を上げてやるのかな。あの方も当然武蔵境で生まれ育って、自分が子供のころから遊んだとかという記憶がいっぱいあるわけですね。おかげさんで自分はそれなりの成功をおさめてあれだけのものを地域の方たちにできた。退職も迫っているし、後継者もできたから、俺は今度はまちづくりに力を入れるんだ。おまえ、手伝えと言われて、今手伝っているような状態なんですけれども、そういう方が地元にいるというのをもっと掘り起こせば、もっといろんなことができるのかな。今まではどうしても商店街は商店街、教習所は教習所とか、ほかの団体はほかの団体みたいに壁があったりしたんですけれども、そんなことも言っていられないし、今言ったように、大型店だろうが商店街だろうが、みんな一緒になってやっついていかないと、これからは自分のまちはできないような気がする。

○酒井 そうですね。今おっしゃったように、生まれ育った人もだし、外から来ている人も働きに来ている人も一緒に、このまちを、自分たちのまちをつくっていくという意識が必要になってくるということですね。

○下田 そういう意識に変えないと、どこにでもあるまちになってしまいます。整然としたことは多分法律で決められてこうですから、こうなんですよみたいなまちはできると思うんですけれども、そうじゃない、ここに合ったまちづくりといふのは、自分たちがやっついていかないとできないのかなといふふうには思います。

○酒井 ほかにどなたか。どうぞ。

○来場者 今までのお話の中で、ファミリースタンプのことが出ていないですよ。住んでいらっしゃる方はご存じだと思いますけれども、武蔵境にはファミリースタンプという、買い物をするとシールみたいなのをくださって、それを台紙に貼っていくと 500 円でお店で使えるんですね。私なんかはしょっちゅう、この間も下田さんのお店で 500 円のお買い物に使わせていただきましたけれども、あれは地域通貨としてとても素晴らしいと思うんです。今、なくなっちゃいましたけれども、三菱東京UFJ銀行、そこへ持っていくと 500 円で預金もできた。

○下田 信用金庫はまだ大丈夫です。多摩信用金庫と西武信用金庫はまだ預金ができます。

○来場者 そういうことがあって、わりと早くたまるんですね。あのスタンプ。

○下田 そうですね。実はファミリースタンプも立ち上げのときは僕がトップになってやらせていただいたんですけれども、あれも町おこしの一環。平成 12 年の 4 月からスタートで、今年 10 年経って、今 11 年目に入りました。これは、さっき言ったのと違って大型店対策でやりました。ヨーカドーさんは、今、西館と東館とありますけれども、東館ができるよとなったときに、商店街がかなりの大打撃を受けるだろうから、商店街の活性化策と

して、当時、実はずちの商店街だけでそのポイントサービスをやろうと思ったんです。僕が2年間か3年間一生懸命資料集めだとか勉強していたもので、ヨーカドーがそういうふうになるなら、うちの商店街だけでもやろうと思っていたんです。そこへ当時の武蔵野商連の会長の三宅さんと武蔵境の商店街連合会の船木さんが、僕のところに見えまして、それはちょっと待ってくれと。境として全体でそういう大型店対策をやるのに、メインのすきっぷ通りだけが単独でやられては困るから、バックアップするからやってくれと言われて、当時、ボンと始めたんですけれども、あれもただのポイント、今のコジマ電気だ、どこだとかというポイントと一緒にじゃなくて、境らしさということを考えました。

実は1シート25枚のシールを貼るんですけれども、シールの顔が全部違うんです。普通、ポイントを貼るシール、それもカードじゃなくてわざわざ張るのにしたんですけれども、ああいう貼るシールというのは同じマークが全部たまるようになっていたんですけれども、うちのところは25種類全部顔が違う。何でかという、実はデザインも地元の方に頼もうということで、境南に新倉さんというデザイナーさんがいて、僕の中学の2つ先輩なので頼んで、そうしたら25個つくってくれたんですね。最初は、どれにする？という話だったんですけど、せっかくつくってくれたんだしたら、25個ばらばらじゃいけないという法律はどこにもないかと言いながら、いろんな楽しそうな買い物をしている顔を動物とかキャラクターに変えたので、そのままにしましょうというので、25種類の顔のあるスタンプになりました。だから、よそともちょっとパターンを変えて、境らしさを出すというのはそういうのも全部いろんなことも含めて、やっと今年丸10年たって、皆さんに多少評価されて、そうやって買物をする楽しさというのを表現しているんです。

今、三鷹地区は「むチュー」という地域通貨をやっています、あれは、例えばボランティアで掃除をしたらくれるよとか、いろんな使い方があるらしいんですけれども、ああいうふうに個性のあるものやっぺいこうと一生懸命やっぺいる商店の方は、三鷹は三鷹で、僕らと同じようにやっぺいて、一生懸命やっぺいる人がいるんです。そういう方たちがいるうちに、皆さんとろんなことをやっぺいかなければいけないのかなというのもあります。

○酒井 なるほどね。デザインも市民にということであがりもあつて、思わぬ効用、効果が出たというか、いいですね。顔が違ふのか、いいな。いいですね。

○下田 お客さんの中にマニアがいて、同じシートには同じ顔しか張らない。25冊たまるのはいつ？ というのはあるんですけれども、おかげさまで、2倍出したり3倍出したりする日もあるので、結構早くたまるし、普通のポイントは、1ポイント1円というのがよくあるんですけれども、うちのポイントは、100円で1枚で、350枚張ると500円。つまり1.4円ぐらいになるんですよね。だから、多少のお買得感があるのと、あとは、ろんなイベント、ただ買物だけじゃなくて、抽選会があつたりとか、深大寺温泉の入湯券と換えたりとかということもやっぺいます。

○酒井 ありがとうございます。

○来場者 すみません、もう一つあるんですけれども、今、昭和50年のお店の名前を見ていて、私なんか、ああ、この店もなくなつたんだなと思うのが、生鮮食品のお店なんですよ。後藤肉店さんとか、八百屋さん、宮城屋さんとか、北海屋さんとか、みんなな

くなくなってしまいましたけれども、お魚なんかも、昔はおつかいに行くというと、私は境南に住んでいるんですけれども、境の北口におつかいに行ったんですね。でも、今は生鮮品がないから、なかなかあっちの方へ足が向かない。時々しか下田さんの方は行かないので申し訳ないんですけれども、御用聞きというのが昔ありましたね。あれはすごい商店街効果を高めていたと思うんですよ。うちなんかはいつも亀屋さんとか、御用聞きに来てもらって、子どもが小さいときなんかは、お願いすると運んできてくれた。私は今、生協の宅配になっちゃっているんです。というのは、重たいものを買え物がないということがすごくあるんですね。先ほど、イトーヨーカドーの話が出ましたが、確かにイトーヨーカドーさんもすごい危機感を持っていて、この前、都市マスタープランの地域の話合いのときにもヨーカドーさんが出ていらしたんです。

○下田 出てきますよね。

○来場者 それで、ものすごくびっくりしたんですけれども、それだけ危機感を持っていらっしゃるって、そのときにおっしゃった担当の方の言葉が今でも記憶に残っているんですけれども、地域全体がよくないと大型店もポシャっていくとおっしゃっているんです。だから、地域の商店街がしっかり繁栄していないと、大型店にもよくないし、私たち消費者にも、いいお店があるということはすごくいいことなんですね。そこに住んでいる人間にとっても。だから、そういう意味では、住民とお店がもっともっといろいろ話し合えるチャンスがあるといいなど。なかなか住民の意見をお店に言うというのは難しいですよ。

○下田 できれば直接いろいろ言っていただくとありがたいんですけれども。

○来場者 そういうチャンネルがあると、私、とてもいいんじゃないかというふうに思うんです。

○下田 そうですね。今言われたように、ヨーカドーさんは、お声をかけると僕らの商店街の会議にも出てきてくれるんです。昔と違って、結構仲良くさせていただいているんですけれども、昔は、聞いているだけだったんですね。要は、要望があるなら聞きましょうという態度だったんですけれども、最近は逆に、下田さん、何かない？ 何かやらない？ みたいな。今は大型店だとかというよりも、地域、地域で頑張らないと、その地域がだめになって、その地域が取り残されていくというパターンが全国的にも多いので、——そういうのを察知する能力はああいうところの方が大きいですから、向こうも情報が欲しいし、まちとしてとらえる考え方が変わってきているんです。そういう時代なので、逆に今チャンスなんですよ。そういうところと一緒にまちづくりをやっていったりとか、いろんなことを提案したりとかというチャンスでもあるんですね。本来、僕、こういうところに座るのは非常に嫌だったんですけれども、皆さんと一緒に話をして、逆に市民の方たちがどうやって思っているのかが聞けたし、今日これだけ来ていただいているということは関心のある方は多いんだというのがよくわかりました。ですから、これからもそういうのを発信しながら、広げていけるのかなという感じは、逆に、僕、今日皆さんからいただくことができました。

○酒井 よかったですね。あと、こちらの方。

○来場者 僕は、若いころから、水俣病問題に興味がありまして、そこからドキュメンタリーで取り上げられているみたいな社会福祉ということに興味を持ちまして、また、ずっ

と母子家庭とか、父子家庭、団塊の世代になって、今は世の中自体が生きづらいかなと思っています。商店街としてどういうふうにかえるかという、生きやすい世の中にしなくてはいけない。そのときに商店街というのがあると思うんですよ。僕らが社会福祉、ずっと40年間勉強していて、ほかの方面で、今、社会福祉を勉強すると、生きづらい世の中になってきちゃっている。

それから、もう一つ、商店のことで言うと、商品知識が余りになさすぎる。僕はヨドバシカメラなんかをよく利用するんですが、行くと商品知識がすごく豊富。それから、吉祥寺にありますJ A吉祥寺というお店、僕もよく利用します。それは、例えばトマト、桃、野菜類とかお米類、どうしてこの時期がいいとか、そういうのを的確に説明してくれる。だから、知的好奇心がある商店街になってほしい。それから、コミュニケーションを勉強していく場。クリーニング屋さんでも、どうして糸はだめなの、これはこうなんだと、なるべく汚染を出さないようにしようとか、そういうことをやることによって、社会福祉、生きやすい社会になっていくための一つの手段としての商店街とかそういうもの。商店街に行くと、お茶屋さんだったら、お茶のよさはこういうことでいい、のどにいいとか、肥満にいいとか、消毒にいいとか、そういうことを常にお客さんに説明して、そこで売れなくても、そういうコミュニケーションをとってほしい。商品を通してのコミュニケーションをとってほしいな。僕はヨドバシカメラとJ A吉祥寺の野菜関係など、商品知識の多い人がしっかり説明するから、変なものを買わない、納得して買う。だから、まず最初に納得して買ってもらうように、どうしたらいいか。売れる、売れないじゃなくて、納得してお客さんに買っていただく、それが大事じゃないかなと思っているんです。

○下田 そうですね。言われるとおりの。確かに今、商店街、専門店と言われても、なかなか知識のないという方が多いというか、チェーン店の方は特にそうですね。アルバイト店員だったりとか、そういう物の知識がない方がいたり。

あと、もう一つ、お店側から言わせていただくと、今、情報がいろいろあり過ぎというものもあるんですよ。お客さんの方の情報とお店の方、現場との差が出てきてしまっているんです。昨日もたまたまテレビで、夜8時ぐらいだったかな、お茶のことをやっています、僕も当然興味がありますから見たんですけども、堺正章さんが司会の番組でお茶の専門家が出てきて、ダイエットにいいだとか、赤ちゃんのお尻に塗るといいだとかというのをいろいろやっていたんですけども、短い時間でやるというのといろいろありまして、僕らから言わせると半分以上が間違っていました。

まず、緑茶がいいですよ。緑茶というのはこういうものですよというのが出たときに、緑茶は一番茶、二番茶、三番茶とあって、二番茶は大体1,000円ぐらいで、三番茶は800円から500円ぐらいですよと価格が出たんですけども、申しわけないですけども、二番茶、三番茶というのは下級品なので、500円以上のものなんて流通していません。そんな値段をつけるんだったら、ぼったくって売るぐらいの話なんです。

カフェインが一番少ないお茶は何ですか。お抹茶だとか玉露だとか煎茶だとかほうじ茶だとか番茶と5種類ぐらい出ているのかな。番組内ではお番茶ですということだったんですけども、違うんです。ほうじ茶なんです。お番茶は緑茶の中では一番カフェインは少ないんですけども、ほうじ茶はそれを煎ってカフェインを飛ばしますので、ほうじ茶が

一番少ない。

僕も資格を持ってまして、当然資格を持って毎日仕事でやっていますので、現実問題をわかっている。だけど、テレビの報道の中とか、インターネットだとかというのが中途半端な情報を非常に多く流してくれるんだけど、多分昨日のテレビを見た方が今日うちへ来て、昨日テレビでこうやっていたんだ。いや、違いますよと言うと、いや、テレビでやっていたんだからという話になっちゃうんですよ。だから、今の僕らがお店をやっている非常に困るところは、確かにそれをはねのけるだけの知識がないとダメなんです。本来は専門店なんですから、やっているべきじゃないと言うと変ですけども。そのぐらいの知識を持って堂々と商売をやっているお店が増えれば、当然お客さんもそれを信じて、興味がある方は特に来ていただけたと思います。

○来場者　そこで、売る方とまちの方と商店の人がコミュニケーションできればいいんですよ。

○下田　うちのお客さんは年配の方が多くですよ。そうすると、僕は早く跡を継いだので、幾ら勉強して知識があっても、よその年配のお茶屋さんへ行ったらこう言われた、それが間違いだ。テレビと一緒にですよ。あんたみたいな若造じゃない、あの30年も40年もやっているお茶屋さんが言ったのがうそで、僕が言ったのが本当だと絶対信じてくれないんですよ。今はそういうのがお茶屋さんの業界では困るということで、もう10年ぐらいたつのかな、インストラクターの制度というのができて、全国统一でお茶の試験があって、知識、資格審査がある制度をつくって、それを取った人間はきちんと指導ができるというふうになっているんですが、僕も一応何とか取らせていただいています。

○酒井　プロフィールに書いてある、日本茶インストラクター。以前伺ったら結構難しいんですよ。

○来場者　今のと関連するんですけども、それから、先ほど、御用聞きの制度とか、昔あったような、それとちょっと関連するんですけども、例えば、お茶屋さんをやったり、洋品屋さんをやったり、お肉屋さんをやっているれば、それなりの商品知識は相当あると思うんですよ。単にテレビで言ったぐらいの知識はあると思います。ただ、そういう知識を伝達する場がない。まさか店頭でそういう話をやるという時代でもありませんから、そういう場がないんじゃないかと思うんですね。ですから、例えば1つの例として、コミセンとか、いろいろ市の施設があるわけですよ。そういったところで話をするとか、そういうところに来ている人というのは、それなりの要求を持っていると思うんですよ。

○下田　そうですね。最近、僕は協会に入っているんで、協会としてあちこちの会社ですとか、公共で結構やっています。

○来場者　横のつながりといいますか、コミセンとか、あるいはテンミリオンハウスとか、そういうところに市民が行っているわけですので、そういったところとつながりを持って、例えば、困っていることはないかというような御用聞き、例えば野菜だったら、私のところでこうやってお届けしますよとか、そういう話が具体的に持てるようになっていくんじゃないかと思います。

○下田　今そういうのも商店街でも模索中なんですけれども、よその地域でもやっているんですけども、高齢者施設に出張販売。今日は車いすの方もいらっしゃいますし、要は

商店街といっても狭い通路のお店だったりとか、なかなか自由に買い物ができないというので、そういうところへ商品を持ってきてくれるならいいという話があります。ただ、先ほど言われたように、商店街は業種が少ないものですから、要望に応えられる業種をそろえるのに四苦八苦をしまして、業者があっても、そのお店は一人で店番をしているから出られないとか、いろんな条件があるんですけども、これからは待っているのではなくて、こちらから出向いてやっていく時代にはなるのかなと思っています。

○来場者 それから、チェーン店なんかにも協力してもらってもいいと思うんですよ。

○下田 当然先ほど言ったように、僕らが補えないところをチェーン店に補ってもらおう。

○来場者 昔からの商店だけで自分でやるというのではなくて、どんどんそういう商店が入ってくると思いますから、そういう人たちとも一緒になってそういうことをやっていくとかね。

○下田 だと思います。当然、お客様のニーズは、チェーン店の品物が欲しかったりするニーズはあるわけですから、それに答えて出ていくというのはやっていかなければいけないなと思っています。

○酒井 新たな視点が出ましたね。待っているのではなく、御用聞きから絡んで実際にほしい物を出す。もう一つ、おっしゃった知的好奇心というか、お持ちになっている専門的な知識を外に持って行って、その話が逆にまた商店街にみんなが足を運びきっかけになるというまた一つ新しいものが出ました。

○下田 少しずつやっているのは、学校の食育の一環としてお茶の教室があります。昨年大野田小学校でやりましたし、何か所かそういうことをやって、小さい方とか、小学生の方に興味を持ってもらえると嬉しいですね。ただ、昨日もテレビでやった、効能とか、お茶はかなりインフルエンザにいいとか、いろんな面があるので、そういうのをきちっと理解してもらうような活動も少しずつはやっているんですけども、なかなかまだ広まっていなくて。

○酒井 ほかにいかがでしょうか。

○来場者 私、リタイアして10年ぐらいたつんですけども、やっとなら武蔵境のよさというのかしら、自然豊かで住みよいまち。データで見ると、住みよいまちの日本一が三鷹から武蔵野に移っているというふうになっていますけれども、それとは別に、地産地消という言葉がありますね。ボランティア団体なんかで話をしていると、そうなんだよな、地産地消できれば、商店街も蘇るんじゃないかとか、それをエネルギーにして広がっていけば、またいいんじゃないかとかという話になっているんですよ。地産地消をそういうふうを持っていく方法を何か別な角度から考えて、何かいい方法があるんじゃないかということと、それと、今、境で地域課というのをつくっているのがあるんですよ。それは、亜細亜大学とか自動車教習所。

○下田 地域交流課ですね。

○来場者 そうすると、地域課というのをつくっているところは、何を目的にして地域課というのをつくったか。そういうところから何かヒントを得られるんじゃないかろうか。そういうようなことを今ちょっと思い出したんですけども、そういうことでご存じかどうか。亜細亜大の栗田先生がいるから聞いていただければ一番いいんでしょうけれども、そ

んなようなことです。

○酒井 なるほどね。ずっと今までは仕事でそこは本当に戻ってきて寝るだけだったのが、ようやく10年間でここが自分のまちと思えてきた。そうやって商店街を利用してくださる方もいるということですね。

○下田 何かあったら手伝えるんだけどと言ってくくださるリタイアした方ですとか、そういう方が結構いらっしゃいますね。あと、僕がいろんなところに顔を突っ込んでいっているせいもあるんですけども、いろんな方がいらっしゃってくださって、こういうところでこういうことをやっているんだけど、だれのところへ行ったらいい？ とかという窓口みたいなこともやらせてもらっていますので、これからはそういう連携もそうですし、今言った地産地消というのも大事になってくると思うんです。ただ、地産地消の一番難しいのは、野菜なんかですと、例えばワンシーズンで1回しかとれないと、その時期だけになってしまって365日できない。ただ、お客さんのニーズは、今の時代は、例えばキュウリを365日欲しいとか、トマトは冬でも欲しいというのがニーズなので、それとのマッチングをうまくやって、これから地産地消も進めていくというのも考えなければいけないのかな。

ただ、その辺の一環も含めて、トウガラシなんかは、植えることになっているんです。あれは収穫をすれば、あと、乾燥させて日持ちするので、地産地消の一步じゃないですけども、辛いものを進めるのでも、トウガラシを使ったメニューをつくるのでも、できるだけ武蔵野のトウガラシを使って、それがうまくいったら、今度は違うものというふうにも考えているんです。

○酒井 地域課というのは、これはどのようなものでしょう。

○下田 亜細亜大学には地域交流課という課があります。亜細亜大学はいろんなサークルがあって、ボランティア用のサークルだとかいろんなのがありますが、そういうのの窓口になってくれて、例えば、こういうイベントをやったりとか、こういう活動をするんだけど、大学として学生さん、手伝ってくれませんかと言うと、こういう学生のグループがありますよ、と紹介してくれます。それから、商店街で大学の中の活動を披露して、それによって、大学はどのような活動があるのかを知ってもらったり、商店街も集客ができますというようなこともやっています。うちの商店街でも、イベントの一環でガムランという民族音楽をやってもらいました。そういう窓口が、今、各大学にありますので、そういうところと連携をとったりはしています。

○酒井 わかりました。また新たな提案がありました。

あと、先ほどお手が挙がっていた方、どうぞ。

○来場者 商店街の貴重なお話、本当にありがとうございました。僕ら車いす利用者は、スーパーよりも商店街の方が正直買い物しやすいわけです。スーパーだと、商品が遠くにあったり、高くなっていたり、奥が深くなっていたりするので、生鮮品も含めて商品が見れないんです。そうすると、商店の方から一品ずつ見せてもらって、そして、車いすの後ろの買い物袋に入れてもらうとか、そういうことでは商店街が僕らの生活にとって、なくてはならないものなんです。それで、1つ提案したいんですけども、酒井さん、ホワイトボードに車いすマークを描いてもらっていいですか。

○酒井 車いすマーク、急に言われても描けない。

○来場者 車いすマークに「気軽に声をかけてください」というふうな言葉をつけて、ベビーカーの絵もつけてください。そういうようなステッカーをお店の前に貼ってほしいというのを提案したいと思います。

○下田 やっぱりそう思われるんですね。

○来場者 はい。お店の中に直接僕らは見に行くことができなくて、「声をかけてくださいステッカー」で店員さんに声をかけることが僕らができれば、商品を持ってきてもらうことができるじゃないですか。

○下田 基本的に入りづらいお店には特にということですよ。

○来場者 いや、商店街全部にそういうステッカーを増やしたいんです。

○下田 うち、今、お店を狭くしちゃったんですけども、先ほど言ったように、商店街の道路からも段差をなくして、自動ドアもちょっと広めにして、車いすが十分入れる幅にしたというのと、あと、お店も今は本当に狭いのであれなんですけれども、一応通路もそこからストレートでレジまで来て、レジ前を広くあけているのは、最低限車いすが回れるようになるんですよ。方向転換ができる。それで帰っていただける。通れない通路もあるんですけども、それでもそれは、入ってきていただければ、当然僕らが対応します。中にはお店の外から「おーい」と呼ぶ方もいますけれども。

ただ、僕らの方からすると、逆に、そんなに気をつかわないで入ってきてよみたいな気持ちがあるんですね。ですから、うちなんかも「どうぞ」というシールを張ろうかというのが一時あったんです。だけど、よくよく考えたら、そんなんじゃないくて、入ってきて当たり前でしょう。わざわざシールなんか張らなくていいんじゃない、というのでやめちゃったことがあるんです。こちら側としてね。だって、そのために「すきっぷ」なんかは平らにしたんだし、入れるんだったら別に入ってきていただいて、ほかのお客さんがいたって、そんなにその人たちを邪魔にするかといったら、そんなことはないわけだし、その辺は向こうの方たちだって、ほかのお客さんに気を使っているんだから、何も一々、ぜひどうぞ、みたいにしないでいいんじゃないというので、やめちゃった経緯があるんです。けれども、入る方としてはそういうのがあれば気軽というのであれば、また今後考えて、皆さんに相談してみたいと思います。

○酒井 おそらくご本人たちもだけれども、ほかに、例えば私の母も外だと車いすを使うのですが、あそこのお店だとそういうステッカーがある。じゃ、あそこのお店は使えるなと思うこともあるので、もしかしたら、いろいろな方にとっていいのかもしれないですね。

○下田 普通、地べたからすぐ棚があったりするんですが、——酒井さんはうちのお店に入ってきて知っていると思いますけど、うちはないんですね。うちはちょうど60cmくらいの高さから棚なんですけれども、あれも実は身障者の方がたまたまそのお店をやるときに来て、実は下田さん、下のものは取れないんだよ。見れないんだよ。座っているからこうやってのぞけない。だから、できたらここから上にしてくれる、と言われて作ったんです。どうせストックを入れる場所が必要なので、下はストックを入れる場所にしちゃったんですけれども。で、余り奥深くなく作ってあるんですけども、自分のところはやってあるから、ついつい、いいやみたいになっちゃうところがあるんですが、聞いてみると、そういうのがあるんです。

○酒井 ぜひまた検討していただければ。

○下田 早急に。

○来場者 こういう達者な人間はいいんですけれども、そうじゃない人間の方が大半なので。

○下田 うち結構介護の方たちも平気で入ってきてますが、そこで商品を見て買いたいという気持ちが非常にわかります。うちはお茶だけじゃなくて、懐かしいお菓子が置いてあったりするので、年配の方は、車いすでもお茶屋さんだけは寄ってくれと言ってくれるというので、今、そういう店づくりをしているんですけれども、それをもう少し商店街としてできるだけ取り上げていきたいですね。

○来場者 あと、もう一つの効果が、これをやることで一番伝えたいのは、人にやさしい商店街なんだよということなんですね。これは、たまたま一つのツールであって、もっともっと人と人のコミュニケーションがしやすくなるよという一つの目印になるんです。

○酒井 また新たな改善がでて、よかったですね。

○下田 もう一度違う視点から。

○酒井 ほかにどうぞ。

○来場者 商店街が行ってきた自治活動が低下してきているとか、あるいは役割が果たせなくなったという話がございますけれども、——これは、程度というんでしょうか、自治活動が、例えば消防団ですとか交通安全協会のパトロールなんか支障を来すほど低下してきているということなのか、逆に言うと、先ほども少し説明がありましたが、地元に住んでおられるサラリーマンとか、別の方がそれを補完することによって、活動自体には支障がないということなのか、どういう感じなのでしょう。というのは、商店街が担うというのはこれまでのやり方なんですけど、実はこういう活動自体は、サラリーマンも含めて担い手を拡大することの方が私は個人的には望ましいと思っています。ですから、活動に支障が出ているというのであれば、それはまた別な対応を、——これは武蔵野市かどこかわかりませんが、そういったことを真剣に考えなくてはいけないですよ。担い手の変化ということであれば、それはそれで環境の変化を反映したものではないかと思うんです。

○下田 要は、商店街の中で、今まではそういう活動がある程度重点的に担ってきたところがあるんですけれども、メンバーが少なくなったのでそれが難しくなってきた。商店街が担ってきたメリットというのは、先ほども言ったように、場所もわかっているし、人もわかっているし、何かにつけてすぐ動けるといってはあったんですね。だけど、これからはそういう方たちが減ってきているので、ほかの方たちに分担をしていただくことなるんです。ただ、そのときには、やり方を変えていかないと、今までみたいに、何丁目何番地と言われても、パッと頭に浮かぶような人ばかりじゃないので、システムを変えていく必要があるんじゃないかなとは思っています。

○酒井 実際に火事は待たがきかないですが、今、大丈夫なんですか。

○来場者 人数が不足しているとか、そういうことはないんでしょう。

○下田 人数も一応表面上は頭数はそろっています。当然、今僕も含めてかかわっている人たちはそれなりに気持ちを持ってやっていますから、今日の明日でどうにかなるという

話ではないです。ただ、僕の父がやっていたころから比べると、当然お店の内情も違ったりとか、いろんな環境が違いますので、出火報が入ったから、じゃ、25人の分団員全員がパッと行けるかという、父の時代は消防車に乗れないぐらいの人数がワッと集まってぶら下がっていくというぐらいでしたけれども、今は逆に、お店に一人しかいないから行けないとか、いろんな条件が重なって、パッと集まっても10名だったりとかというふうになってきてますし、今やっている人間も高齢化してきてどンドンいなくなってきましたから、そういうのもこれから考えていかなければならない話です。

○来場者 火災の件数が武蔵野市でどンドン減っていてどうなのかとか、全体で評価して、この自治活動自体で果たしてきた役割がそういうことで変わってきているというのはよくわかりました。

○酒井 あとは、今は大丈夫ということだけでも、先を見据えてどうしていくかということ自主的に考えていच्छるといことですよ。

○下田 そうですね。今まではそういう方たちがいて、OBの方たちも結構いますから、パッと分団員が動かなくても初期活動はOBの方がやってくれたりとかというのがあるんです。ただ、今は、先ほど言われたように火災はすごく減っているんですよ。こういう耐火の建物が非常に増えて、器具もよくなっていますから、そういうのはいいんですけども、これからは震災とかそういうのが起きたときに、いろいろ困るとい。そのときに、そういういろんな情報が伝わらなかつたりしたときに、地元の方たちがかかわっていないと、実際にそういう動きがとりにくくなるから、そういうものをもう少し皆さんに意識を持っていただいて、日ごろからそういう方たちと連携をとるとか、ただ住んでいるんじゃないで、いろんな意識を持っていただくように、変化を与えないといけないのかなという気持ちです。

○酒井 なるほどね。今は人がいないんだからできないんだよと言って投げてしまうのではなくて、自分たちでどうしていけばいいのかというふうに、先に考えているということですね。

○下田 深刻に考えないと、やり手の方もかなりきつくなってきているので、皆さんがもっともって意識を高めて、防災意識とかを持っていないと、いざというときに困るようになってからでは遅いんです。ですから、そういう提案みたいなものです。

○酒井 わかりました。

もう予定の時間が実は過ぎています。ご質問、ご意見ある方はお二方でよろしいでしょうか。

では、今、お手が上がったお二方ということでおしまいさせていただきます。先にお手を挙げた方からお願いします。

○来場者 幾つかお聞きしたいんですけども、残念ながら、私は辛口で言わせていただくと、下田さんがかかわっている活性化委員会というのは何なんだろうというのはなかなか伝わってこなかったんですよ。商店街をどうしようという話に見えるんですけども、今回の市民自治を活性化というものからいったときに、要は、武蔵境を元気にしよう、そのために商店街がどういうふうにかかわっていったらいいのかという部分でもないのかな。要するに、語ればそうなのかなという気もする反面、その辺が、そのためにこれこれ

いろんなことを考えているんだけど、要は商店街を活性化するのか、あるいは武蔵境を特別な、武蔵野市の中で、吉祥寺でもない、三鷹でもない、武蔵境という、いわば吉里吉里人みたいな、吉里吉里村みたいな形の武蔵境村みたいな形で一つの特色を出していこうよ、そのために何か皆さん意見ありませんかという部分で言っているのか、その辺が非常に変わりにくかったんですけれども。

○下田 多分そうだと思います。やっている方としても、どうしたらいいのか、活性化ってどうやったらいいのかなというのがあるんですよ。方向性としては、武蔵境というものをきちんと取り上げてもらえるようなまちにしたいってことです。今まではどっちかという武蔵野市の一部みたいなところも多かったですし、じゃあ武蔵境というところはどいうところなのかという問題と、最終的には武蔵境というのはこんなまちだよと言える特色をきちんとPRしていこうという目標もあります。ただ、やっている方もまだ模索しているような状態で、なぜ、今、辛いのをやっているの？という、これはPR用のツールみたいなところがあって、こういうことをやることによって、まず注目を浴びたいので、とりあえず辛いから始めたというのがあります。今後持っていくのには、武蔵野の中で境というのは、周りにいろいろ大学があったりですか、農地がまだ残っていたりとか、いろんなPRポイントもあるので、それをうまく活用して、どうやっていこうか考えています。

活性化のホームページを見ていただくとわかるんですけれども、今出ているのが桜街道世界一プロジェクトとか、地粉うどん復活プロジェクトとかとあるんですけれども、あれも載ってはいるんですけれども、自分たちでもどこまでいけるのかというのが半分わからない状態ではあります。

それと、活性化の最終目的地点がまだ見えていないところもあるので、アプローチの方法というのはいっぱいあると思うんですよ。ですから、どこからアプローチして、どういう目的にするかというのは、まだ全員が100%認識してないというのも確かにありますので、かかわっている人間がそうですから、皆さんは、境の活性化って何？というふうに非常に疑問を持っている方も多いと思います。

ただ、どちらかという、最初の激辛というのはインパクトを与えるためにやっているんですけれども、一応最終的にはスロータウンというのを考えています。武蔵境自身は、そんなに派手なのが似合うようなまちじゃないので、どちらかという落ちついた雰囲気のスロータウンというのを目指して、一応いろんなプロジェクトを進めていこうというふうには目標を持っているんですけれども、まだかたまっていないところもあります。

○酒井 わかります。吉祥寺は吉祥寺ですよ。三鷹はちょっと置いておいて、武蔵境は、下りるととてもほっとするんですね。亜細亜大学もあって、学生のまちのような雰囲気もあるし、まだちょっと田舎の部分も残って、取り残されていたような部分があって、それがエアポケットみたいにあるので、おそらくほっとするようなユニークさを感じられるんですね。で、それを前面に出していきたいが、その前にまずは武蔵境に注目してもらいたいという、そのスタート地点を今模索しているというような感じですね。

○下田 そうです。それで辛いものを取り上げてるんですね。ただ、武蔵境というのは、結構飲食店がありまして、もともと辛いものとか、いいお店というのが結構あったんです

ね。僕ら地元の人間もまだそれを全部把握していなかったのもあったので、今回こういうことをやることによって、武蔵境のいいお店を発掘するというのも目的の一つにはあったんですけども、ただ、じゃあ吉祥寺みたいにあれだけお店が増えて人が増えたのが活性化なのかというと、そういうところは別に目指しているわけじゃないんですよ、僕らは。僕らは、生まれ育ったまちが、境ってどんなまち？ と聞かれたときに答えられない人が非常に多いので、それをきちんと掘り下げて、境とはこんなまちって言えるようになって、皆さんに武蔵境というのを認知してもらおう。自分の住んでいるまちは、よそへ行ってもきちんと自慢できるまちにしていきたいというのが漠然とあるんですが、ただ、その方法というのが、これをやればそうなるよというのがまだ模索状態なので、一つずつやっていくというような状態だと僕は思っています。ただ、委員長の方がどう思っているかわからないですけども。

○来場者 当たっているかどうかかわからないですけども、例えば今出ました吉祥寺というのは、にぎやかなとか、若者という印象が強いじゃないですか。三鷹というのは、三鷹市と背中合わせになっているしという部分で、ちょっと微妙な部分。境というのは、今、司会者の方もおっしゃったように、ほっとできるという部分があると同時に、いろんな資料から見ると、高齢者が多いし、そのわりにはその施設が少ないという部分、また、駅前からすぐに集合住宅がたくさんある。畑も農地もあるという部分でいったら、要は、武蔵境＝ほっとできる、高齢者、あるいは福祉に強いまちなんだよみたいなものを前面に出すという部分のところで、ほっとできる。今おっしゃったように、要は最終点を何にしようかみたいなもので、活性化というよりも、武蔵野市の特色じゃない境の特色、それが今回の市民自治みたいな形でできるんじゃないのかなという気がするんですね。

○下田 そうですね。僕らもそういう気持ちはあるんですけども、ただ、なかなかどれに落ちつくかというのがわからないので、まだ本当にみんな模索しながらも進んでいます。ただ、今の激辛のプロジェクトも、実は「HOTほっと」プロジェクトとなっているんですけども、そのホットというのは、熱いという意味と、当然ほっとしたというのを引っかけているんです。これから武蔵境のまちというのは当然高齢者ですとか子育てとか、畑もあるので地産地消ですか、いろんな形で落ちつけるまち、スロータウンのまちづくり、ほっとするまちづくりというコンセプトは持っているんですけども、ただ、それがどういう手法で、どういうところで落ちつくのかというのは、まだ僕らも手探り状態なので、これからいろいろやっていきたいなとは思っています。

○酒井 鋭い質問が出てよかったですね。

○下田 やっている方も説明が難しいんですけども。

○酒井 ありがとうございます。

では、最後よろしくお願いします。

○来場者 どうでもいい三鷹から……。

○酒井 私も使っています。

○下田 三鷹は官庁街ですからね。

○来場者 何もないんですよ。三鷹駅北口はね。実は何もないです。さっき商店街なくなるよと言っても、現実には八丁商和会は、コンビニエンスストア商店街になりまして、う

ちのファミリーマートとセブンイレブンといったばし商店のコミュニティストアと、あと、そこにローソンが2軒あって、中町新道にはもう一個あります。コンビニエンスストアしかないわけなんですけれども、そういった商店街が東八丁があって、八丁商和会があって、三鷹駅北口があるんですけれども、一緒に3つでやろうという話も漏れ伝えは聞いているんですけれども、私の立場から言うと、そんなに話をもちかけられないし、例えば「むチュー」の話にしても、後で、ああ、そういうことだったんですかと知る感じなんです。例えば、境の方ではどのように声かけをまとめていったのかなという経緯を知りたいですね。

○下田 何の声かけですか。

○来場者 どのようにまとめたか。要するに共通の話題をどのような場で話し合っていたのかなというのを知りたいですね。言ってみれば、私なんかはPTAをやったり青少協なんかをやりましたけれども、じゃ、具体的に商店街は商店街のことでしょうという人が多いですよ。はっきり言って、じゃ、そういう人たちはどのように巻き込もうとしているのか、それをもうちょっとお聞きしたいなど。要するに、例えばコミュニティ協議会もそうですよね。それぞれ、言ってみれば役所の縦割りの中で別々にてんでんばらばらにやっていて、じゃ、地域社協へ行ってもコミセンへ行っても同じ人が、またこんにちは、みたいにやっていて、一体何なんだろうというふうに思うわけですよ。

例えば、名古屋の地域委員ですか、ああいうふうにまとまって一つの事の中で、そのことを個別具体的な実行委員会か何かわかりませんが、そういう道筋を考えていらっしゃるのか。地域自治というものが役所の縦割りの中で行われるんじゃないくて、住んでいる我々は一人なわけですよ。それに対応してたくさんの方が選べるはずなんですけれども、役所側から言わせると、地域自治はコミセン担当の地域コミュニティ文化だったり、青少協は児童青少年課だったりというような話なので、その辺との兼ね合いをどのようにお考えですか。

○下田 先ほどちょっとお話ししたファミリースタンプですけれども、たまたま武蔵境地区は1つの商店街ではなくて、境の駅を挟んだ南北の11の商店街が集まっている境商連という商連でやり始めた事業なんです。それがちょうど10年目を迎えるところだったので、各商店街に今まで10年間一緒にいろんな活動をしてきた僕らの仲間が要所要所に何人かいたんです。先ほど言われたように、地域のことはコミセンですとかPTAですとか、大体同じ人がやっていて同じ顔ぶれというのがあるんですけれども、商店街の役員もそういう部分があって、商店街の役員の中ではコミセンの役員をやっている方もいたりとか、PTAの役員をやっているとかというのがいますので、まずは商店街の若手というかスタンプの委員を、——もともと立地の違う商店街同士が集まってスタンプ活動をやっていたので、そういった普段の活動のもとがありましたから、今回、活性化をやるのでも、まず商店街が集まったんです。

それから、いろいろ話した結果、商店街だけでやってもだめだ、地域の方たちを入れるにはどうしたらいいだろう。当然、教習所の社長がもともと商店街と全然関係なかったですから、大学も呼んで、いろんなところに声をかけてと聞いたときに、さっき言ったようにメンバーは一緒ですから、こいつはコミセンにもかかわっているよ、じゃ、コミセ

ンに声をかけてきて。こいつは交通安全協会にかかわっているからそこで声をかけてきてとかというので、いろんな団体にお声がけをして、集まりました。そういった今までの元となる多少のネットワークがありましたので、それをうまく使いながらやっていくという形をとるようになっていきます。ですから、一応元はありましたので、活性化に関してはそんなにその辺は苦勞しなかったですね。中には、はなから、もうこれ以上こういう団体は要らないから俺は出ないよと言って抜けた方もいますけれども、今になって、少し活動が見えてくるようになってきたらまた参加表明をされる方も出てきました。

○来場者 でも、活性化協議会が地域づくりを中心としてやっていくんだよという意識は。○下田 意識があります。ですから、縦割り行政じゃないけど、今まで弊害があったんですね。活性化委員会も実は一番最初の話は商工会議所なんです。ですから、商業の中心でやってくれという話。それを一番最初に境商連、武蔵境商店街連合会に持ってこられたんですけれども、僕らはお断りしたんです。これ以上同じようなメンバーで冠だけ変えてやったって何もならないよと言ったら、今回は商業の発展だけじゃなくて、境全体、これから駅もあれするし、会議所としても境全体の活性化を考えて、行政もバックアップすると言っているから、何とかならないかと言ったけれども、いや、もう勘弁してと言っていたら、武蔵野商工会議所の稲垣会頭が武蔵境自動車教習所の高橋社長に談判に行って、武蔵境をなんとかかせにゃいから、全然関係ない商店街と関係ないあんたが長になれば、みんなが集まってくるからどうだいと言ったら、教習所の高橋社長が快く受けて、商店街とは別組織でつくることになりました。商店街の中の連合会につくった方が楽なんですよ。予算も持っていますし、人員もいますし。だけど、今回は絡みがないように、メンバーはかぶっていますけれども組織としては別につくって、それでも、商店街メンバーは僕が窓口で、別で動いてもらうことの方が多いです。それでやっていかないと、ほかの方が入りづらいので、これからはできるだけ、いろんな団体があって、勝手にやっているところもいますけれども、できるだけそういうところと分け隔てなく一緒にやっていくという組織づくりはしていかなきゃというつもりではあります。どこまでできるかわからないですけれども。

○酒井 単に商店街というくくりではなくて、先ほど言ったように、自分たちが住んでいるまちをみんなで考えていくという。

○下田 商店街とくくっちゃうと、すごく小さいものになってしまうし、どうしても商店街というと必ず営利がついてきますので、自分たちの売上につながらないことはやりたくないという方もいますので、それは取っ払いました。

○酒井 なるほど。そういう意味で新しいシステムをつくって始めている委員会ということなんですね。

○下田 だから、活性化委員会は会議所からの助成も受けていたりもするんですけれども、実際に動いているのは、皆さんかなり自腹です。やる気のある人たちはみんな自腹で動いて、辛いものの試食なんかも、無理してお昼わざわざ食べに歩いて、全部それは自腹でやっていたりとか、学生にごちそうしていて大赤字をしている人もいます。

○酒井 なるほど。そういうことだそうですね。

最後でかなり核心に触れるような質問が幾つか出て、ご提案もたくさんいただきました。

時間がかかり過ぎてしまいましたが、今日は商店街という一つのくくりではなくて、まちづくりという、実はすごく市民にとってとても重要な場所の話をしていただきました。本当はもっと環境のこととかもお話ししていただこうと考えていたんですが、時間が来てしまいました。またこういう機会が持てればいいなと思いますが、今日はここまでしたいと思います。雨が降ってお足元の悪い中、多くの方にお運びいただきまして、本当にありがとうございました。拙い司会で少し時間を過ぎてしまいましたが、かなり多くの提案もいただき、中身の濃いものになったのではないかと考えております。

次回は3回目ということで、7月になりますが、1月に出たパネリストの方、それこそまちづくりに一生懸命、都市マスタープランでかかわっていらっしゃる森さんをゲストスピーカーにお迎えして3回目を行うことになっておりますので、ぜひまた皆さんお越しいただければと思います。

○司会 今ご案内がありました7月の回は、16日の金曜日、夜、吉祥寺の会議室で行う予定です。

○酒井 7月16日、今度は吉祥寺で開催ということで、どうぞ手帳の方に記していただければと思います。

それでは、時間をかなり超過して大変申し訳ありませんでしたが、これで、本日、下田さんのお話を終了させていただきます。どうも長時間ありがとうございました。(拍手)

第2回連続講座

参加者アンケート集計結果

**武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～
参加者アンケート**

アンケート総回収数：19件

1 ご自身について回答をお願いします。

① 武蔵野市との関係

項目	回答数	比率(%)
1. 市内在住	15	79%
2. 市内在住ではないが市内在勤	2	11%
3. 市内在住ではないが市内在学	0	0%
4. 1～3には該当しないが市内で活動	1	5%
5. その他	1	5%
合計	19	100%

② 性別

項目	回答数	比率(%)
1. 男性	16	84%
2. 女性	3	16%
合計	19	100%

③ 年齢

項目	回答数	比率(%)
1. 10代	0	0%
2. 20代	1	5%
3. 30代	0	0%
4. 40代	2	11%
5. 50代	2	11%
6. 60代	5	26%
7. 70代	9	47%
8. 80歳以上	0	0%
合計	19	100%

2 講座に参加されたきっかけは何ですか。(複数回答可)

項目	回答数	比率(%)
1. 市報	4	21%
2. ホームページ	1	5%
3. 案内の手紙	2	11%
4. 案内のE-mail	2	11%
5. コミセンに置いてあるチラシ	1	5%
6. 市民自治・自治体運営に興味があった	6	32%
7. 武蔵野市政に興味があった	5	26%
8. 友人・知人に誘われた	4	21%
9. その他 <ul style="list-style-type: none"> ・境活性化をどのように考えていらっしゃるのか、委員の話をもっとうかがいたかった。その上でディスカッションを ・どちらかという主催者側です ・むさしのFM ・シンポジウムに出席した ・ネットワーク ・前回のシンポジウムに参加した まちづくりについて興味があるので ・現在の行政運営に多くの疑問点があるから ・他の会でパンフをいただいたから 	8	42%

3 これまでに以下の事業に参加されたことがありますか。(複数回答可)

項目	回答数	比率(%)
1. 3月13日開催の連続講座(第1回)	8	42%
2. 1月31日開催のシンポジウム	6	32%
3. 平成20年12月21日開催のシンポジウム	3	16%
4. 今回が初めて	7	37%

4 講座の内容についてお聞かせください。

① 講座の内容はわかりやすかったですか。

項目	回答数	比率(%)
1. よく理解できた	7	37%
2. ある程度理解できた	8	42%
3. あまりよくわからなかった	1	5%
4. よくわからなかった	0	0%
無回答	3	16%
合計	19	100%

② 講座を通じて、興味を持たれたことや印象に残ったことを自由に記入してください。

- ・ 関心をお互いもちながら、親しみのある町に。お茶の話は、楽しく勉強になりました。お店を通しては日本文化のレベルアップを
- ・ 「まちづくり」「商店街」「地域コミュニティ」人の活性化の必要性がキーになると思います。
- ・ 市民自治というより商店街活性化がメインテーマのように思われ、本題とは違うとの印象を受けた。逆に言うと商店街活性化は別テーマでやったほうがよい。
- ・ まちづくりについて商店街の大切さを思います。住宅と商店街の意見交換の場がぜひほしいと思います。
- ・ 課題と話題の内容が違っており、目的が何なのか疑問を感じた。
- ・ 一人一人の立場からの発言が交錯する場になったこと。現状分析と街づくり Vision に、コンセンサスに至る道は遠い。しかしこれが Democracy だと（専制独裁の対極）
- ・ 質問・提案が 11 件出てよかった
- ・ 焦点がわかりにくかった
- ・ 市民自治あるいは商店の活性化について真剣に考えている人達が多数おられることに感心した。
- ・ それぞれの垣根を取り払って、みんなで一緒に町づくりをしないといけないという危機意識が出ていないことを知ったのは大きな意義があったように思う
- ・ 亜細亜大学の学生がアルバイトで商店街で働いていたり、商店街のイベントに参加したりした。それが何年かしてサラリーマンになってもどってきたりと、会社が武蔵野市にあったりしたりしてもどってくるという話は興味深い。大型店も商店街も一緒に町作りに。人に優しい商店街（車椅子のマーク）や（乳母車のマーク）をという提案は良かった。
- ・ 地域の共通認識を作る話し合いの場、組織作りが必要だと思う。既存組織にとられない新しいテーブルを
- ・ 大型店も地域が盛えないとだめになると聞いたので

5 武蔵野市の市民自治の未来をイメージすることができましたか。

項目	回答数	比率(%)
1. できた	4	21%
2. できなかった	3	16%
3. よくわからない	4	21%
無回答	8	42%
合計	19	100%

6 市民自治を推進していくためには何が必要だと思いますか。(複数回答可)

項目	回答数	比率(%)
1. 市民、事業者の市民自治に関する当事者としての意識向上	9	47%
2. 行政の市民自治に関する意識の向上	7	37%
3. 市民、事業者、行政の連携や協働の推進	11	58%
4. 市民、事業者、行政の役割や責任の明確化	3	16%
5. 上記を実施していくための仕組み・ルールづくり	6	32%
6. その他 ・やる気をおたがいに育てること、前向きに	1	5%

7 今後も市民自治のあり方に関する講座やシンポジウムなどを開催していきたいと考えていますが、どのような事業に参加したいと思いますか。(※)

項目	回答数	比率(%)
1. シンポジウム	4	21%
2. 講座・勉強会	7	37%
3. 座談会	1	5%
4. その他 ・ワークショップ ・講師と聴講者が同じ視線・目線での会 ・なんでも出ます。出しゃばりかと思いますが	3	16%

※ 本来複数回答可ではありませんでしたが、複数回答がみられたので合計値はありません。

8 その他、ご意見・ご感想などありましたら、自由に記入してください。

- ・ 境らしさを各店舗に、住民とのかかわりを活かすよう。
- ・ 講師の話と「市民自治」との関連が見つげにくかった。
- ・ 下田さん、酒井さん、お疲れさまでした。楽しかったです。
- ・ 「巻き込む」をキーワードにいろいろな企画、講座を出来ないだろうか？
- ・ シンポジウムよりも、身近な地元の人たちの話を聞くチャンス度々設けてほしいと思います。
- ・ 当市の宝と思われる「コミュニティ協議会」を活性化させ、市民自治を推進する中心役割を担ってもらい、商店会等、ほかの団体と協働推進するよう基本姿勢をもつべきと考える。
- ・ 下田和弘さんは、「今、模索している段階です」とおっしゃった。かつてすきっぷ通りで「へそ踊り」を試みて、一年でやめた。輸入品ではだめだと言って。試行錯誤 try and error の途上に私たちはいるのでしょうか。
- ・ 具体的な市民自治の施策がイメージできなかった。商店の現状と問題が理解できた。「市民」という枠組みをつくることで、より参加しにくい環境になりえる可能性があると思った。
- ・ 市民自治を考えるなら、参加者が主体的に参加できる形式を工夫したい。(アンケート設問についての意見・問6などの) 表現がむずかしい。
- ・ 漠然として、消化不良の感がありました。
- ・ 市は市民自治や福祉に関する事業を数多く行っているが、それらの横のつながりがなく、バラバラなので、その効果が十分に発揮されていないように思う。
- ・ 今まとまらないのでごめんなさい。下田さんのお人柄にも感動しました。ありがとうございました。
- ・ 三鷹駅前南北の総合開発について 市行政側も市民自治、商店街も一緒になって、楽しい町づくり、行って買い物したい、くつろげる、一生ここで楽しんで暮らしたい、落ち着いた魅力的な町にしたい。
- ・ 市民13万人の中でこのような“もよおし”に積極的に参加している人は少ないようです。もっと広い範囲の方々に参加してもらうようにする広報活動が必要と考えます。

第3回 連続講座

(3) ①第3回連続講座

ゲストスピーカー：森 浩（NPO 法人 市民まちづくり会議・むさしの理事）

会場：武蔵野商工会館 第1・第2会議室

○酒井 今年の1月末にスイングビルで桐蔭横浜大学の田村先生のお話を基調講演としたシンポジウムがありまして、今日のゲストスピーカーである森さんと第1回、第2回の連続講座でお話いただいた武蔵野赤十字病院の庄司さん、武蔵境のすきっぷ通り商店街の下田さんがパネリストとして出演されました。これまでの連続講座では、シンポジウムのパネリストにゲストで来て



ていただいて、実際にまちの中でどういう活動を市民がしているのかということと、市民にとって自治はどういう意味があるのかというお話をさせていただいてたんですね。

いよいよ今回は、最後、とりです。ご存じのとおり、今、武蔵野市では都市マスタープランの改定をしています。策定から10年がたって、武蔵野市のまちづくりについて考え直して、どういう方向でいくのかという話し合いが始まっているところで、森さんはまさにそこにかかわっていらっしゃるということですよ。ですので、まずそのあたりを絡めた話を最初の1時間弱で森さんにさせていただいて、その後に会場の方とのやりとりをさせていただくというタイムスケジュールでやらせていただきます。

余談なんですけれども、今日は武蔵野の水を森さんと私は飲ませていただきます。あと、これは現在はないレアものなんですけれども、「吉祥寺」と書かれた、以前、吉祥寺のまちでつくったバッグがあったので持ってきてみました。出しておきます。

では、そういう形で始めたいと思います。

今日、実は参加希望の方が30名でしたね。おそらく今回が一番多い。私ども、市民協働サロンのほうでも、皆様にチラシをお配りしたり、私が個々にお問い合わせしたりしましたが、今日は一番多い30名の方に申し込みいただきまして、ありがとうございました。

また後からいらっしゃる方がいると思いますけれども、森さん、よろしく願いいたします。

○森 皆さん、こんばんは。「市民まちづくり会議・むさしの」の森です。

今日は、我々の市民まちづくり会議の活動をご紹介します。

この講座のタイトルは「市民自治」となっていますが、当会は別に市民自治というものを目指しているというわけではなくて、実際、私ども、武蔵野市における市民自治というのはどういうものかよくわかりませんので、そういうことにこだわらずに、私どもの活動についてお話しさせていただきたいと思っています。その中で市民自治につながるところ

もあるのではないかと思っています。

今回はこの連続講座の第3回目ですが、1回目は庄司さんが福祉分野について、特に福祉分野は言葉が特殊だったりするので、市民や行政が同じテーブルで話すことの大切さ、そういうことをお話しされたというふうに伺っています。

2回目は、武蔵境の商店街の下田さんが、行政と市民を巻き込みながら地域振興を図っていくといったことをお話しされたというふうに伺っています。

こういった同じテーブルで話すとか、あるいは市と市民をどうやって巻き込むかというのが、まちづくりにとって非常に重要なことで、私もそういったお話をさせていただきたいと思っています。

まちづくりについてちょっとかたい話になりますが、まちというのは、地方自治の執行機関である市役所が責任と権限を持ってつくるというのが基本です。ただ、そのときに、市役所が勝手につくるというものではなくて、まちで活動している市民とか、あるいは場合によっては企業とか、いろんな主体が協力し合ってつくっていくべきものであると考えています。私たちの活動というのは、そのうちの市民として、そのまちづくりにかかわっていこうというものです。

今回、市民自治の未来ということで話をしてほしいということですが、私は別に地方自治の専門家でもありませんし、市内ではいろんな活動をされている方がいらっしゃるのですが、我々の活動でいいからということでしたので、お話しさせていただきます。

私どもの活動と、現在行われている都市マスタープランの改定に向けて、先ごろ、2月、3月、4月と意見交換会を開催させていただきましたので、その活動と、今後のまちづくりについてお話をしたいと思っています。

私どもの市民まちづくり会議・むさしのですが、会の目的と活動内容を、本日のレジュメに書かせていただいています。

会の目的は、広く市民を対象として、私たち市民が主体的にまちづくりに参加するということを目指しています。その背景も含めて記述したのが、レジュメに書いてあります設立趣旨です。この会は任意団体として2年間活動いたしまして、その後2年経ってNPOにしたときに、設立趣旨という形で取りまとめたものです。

まちづくりに参加することは、市民の責任と義務であるという意識のもとに我々は活動し、会を運営しています。

会のメンバーは毎年変化していますが、現在は30名弱で、中心的に活動しているのはその半分ぐらいです。当初は50名ぐらいいたのですが、いろんなことで人数が減ってきたというところはあります。だれでも参加できますし、会員でなければ活動できないということもありませんので、会員でなくても、どんどん皆さん参加していただいています。会に賛同していただく方は、会費2000円で会員になるというのが私どもの会の運営です。

この会は、完全なボランティア組織で、金銭的な対価が目的ではありません。この講座の1回目の武蔵野赤十字病院の庄司さんとか、2回目の商店街の下田さんは、活動すると、

何か自分の仕事になるかもしれませんが、私どものメンバーは、活動したからといってだれ一人得することはなくて、完全なボランティア活動で行ってます。

メンバーは、私も含めて、民間の研究機関で都市計画とか交通計画をやっている人間や、設計事務所をされている方とか、大学の教官の方だとか、あるいは、様々な市民活動をしてきた方とか、退職して自分たちが何か役に立ちたいと思われている方などです。共通点は、とにかく自分たちのこのまちをよくしたいというその思いだけで活動しているということですね。

私自身のことを言いますと、交通と都市計画が専門分野で、それなりの知見がありますので、そういった知見とか経験をこのまちに活かしたいと思っています。

私は、今、吉祥寺東町に住んでいますが、そこは私の祖父が関東大震災の後に住んで以来です。私はずっとそこに住んでおりまして、武蔵野生まれ、武蔵野育ちですけども、実際のところ、武蔵野のことをあまり知らなかったのです。学校も、小学校、中学校を含めて、全部市外でしたし、勤務先も都心ですので、基本的にこの会に参加するまで、武蔵野のことはほとんど知らなかったのですが、それでも、会に参加してみると、やはり何とかしたいな、このまちをどうにかしたいなという思いが強くなります。

もともと、この会は、都市マスタープランの策定が原点です。ややかたくなりますけれども、都市マスタープランというのは、都市計画法という法律の中で定められていまして、市町村が都市計画の基本的な方針を定めることができますというルールがあって、その方針を一般に、都市マスタープランと呼んでいます。公園とか道路とか、個々の都市施設の計画であるとか、あるいは用途地域とか、そういったものを考える際の基本的な考え方を定めるもので、これをつくる際には、市民の意見を聞きなさいということが定められています。

そういった経緯があるので、武蔵野市の都市マスタープランは、2000年にできていますが、実際につくり始めたのは、その約2年前です。その都市マスタープランをつくるに当たって、市民委員を公募してつくったわけですね。それに参加した人が中心となって、我々の会ができています。

武蔵野市の都市マスタープランは、単に都市計画の基本方針を書いているだけではなくて、市民が今後、このまちでどういうふうな暮らし方をしたいとか、どうやって働いていきたいとか、そういった考え方に基づいてこれから20年間のまちの姿を示して、それに基づいて基本方針をつくっていますので、市民の意見は重要な役割をもっています。

この計画が検討され始めたのは1998年ですけども、今では当たり前のような市民参加のワークショップというのがその当時はほとんどなくて、武蔵野市の都市マスタープランというのは、全国で非常に先進的なワークショップで、その後の各地の都市マスタープランのモデルとなったものです。そこでいろんな関係者がわいわいやりながらつくっていったというマスタープランです。

そこに参加した人がこの会をつくっているのですが、それは市民がやればすぐできたかということ、そんなことはなくて、この会ができるきっかけというのは、やはり行政にあり

ます。2000年に都市マスタープランができましたが、その市民の集まりはその段階で終了しました。その後、当時の都市計画課が私どもをフォローしてくれました。せっかく市民が集まったのだから、もう少し市民で何かやったらいかがですかというお声がけをしていただきましたし、ほかの都市の見学などにも連れてもらったりして、かなりフォローしていただきました。市民が集まるに当たって、関心のありそうな人に呼びかけて、会場もセッティングしてくれて、そういった雰囲気をつくってくれました。

ただし、市がお膳立てをして、我々みたいな何も知らない市民を集めてくれてもそれだけではだめで、会をつくりたいという強い意思を持った人のリーダーシップがあったことが重要であり、参加した人がそういうことなら何となく会をつくりましょうかという話が出てきました。こういった流れで会ができました。

2001年の4月に、まちづくり会議の設立準備会というのを立ち上げました。どういう会にするかということとはあまり明確ではなかったのですが、とにかく会をつくるということだけ決めたんです。

正式な会は、約半年後の2001年10月に、市民まちづくり会議というのを開催しました。その市民まちづくり会議の中で、会の規約であるとか、今後、どういった活動をしていけばいいのかということを検討したのですが、これがなかなかまとまらない。市民がまちづくりについて考えるにしても、いろんな立場の人がいて、いろんな意見があって、とにかくまとまらない。行政との関係についてもいろんな意見がありました。そのとき覚えているのは、私は、市民まちづくり会議は市と協働すべきなので、市長を名誉会長にして運営すべきだと主張しました。そうしたら、市長を名誉会長にすると行政の下請けとして何でもする会みたいだと関係者から猛反発をくらいまして、それは取り下げられました。

あるいは逆に、極端な方は、市民の会の役割というのは、行政が行うまちづくりをチェックするのが役割だというふうに思われている方もいました——私はそれには賛同していないのですが、とにかくそういういろんな意見が飛び交いまして、まちづくりをしたいという目標はあるのですが、そういった中で、明確な目標という形のないまま考えをまとめるというのは、非常に難しいなというのは実感しました。

とはいつつ、とにかく会を立ち上げたので、会は走りましょうということで、正式な形としては、2002年の4月に「市民まちづくり会議・むさしの」が設立されました。この会が正式に設立された段階で、行政の支援は終了しました。あとは自由にやってくださいということですね。結果的にこれが我々の活動にとって重要なことで、行政に完全に見放されたので、我々自身でどうにかしなければいかんということで、会がまじめに動き出しました。

ただ、会が動き出すにしても、やっぱり何をしようかというのは、相当、初期の段階はもめていました。まちづくりの範囲というのは非常に広いですよね。環境の問題もあれば、緑の話もあるし、子育てというのも当然まちづくりに関係してくる。そんなふういろんなテーマがあって、そういったものを追っかけるべきだというご意見もありましたし、あるいは、いろんな市民活動を取りまとめるのが市民まちづくり会議じゃないか、今は「市

民活動ネットワーク」がありますが、そういった役割を担うべきだというようなことも随分話されました。結局、いろんなことを言う人はいたのですが、あるべき論がいろいろ示されるだけで、やる人がいなかったのも、最終的には都市マスタープランからスタートしたということで、都市計画分野の活動に落ちついたというのが現状かなと思っています。

そういうことで、会を始めたのですけれども、実際、我々、特に私はなのですが、市内の状況——市内でどんなまちづくりが行われているかということを知らないんですよ。それなので、とりあえず市内の活動をしている人に話を聞きましょうとか、場合によっては連携しましょうということで始めました。市内でそういうことを見だすと、さまざまな問題があります。マンションができて周りともめているとか、道路が引かれて問題であるとか、当時は図書館の問題もありましたけれども、いろんな問題がやたらにあって、ちょっとこれは困ったなというのが私の感想です。

そういった会の人と話した中で、じゃ、どうやればあなたの問題は解決すると思いますかと聞いたときに、市長が変わればいいんだという答えがきて、これはまずいなとか、私自身、面倒なことに足を踏み入れたなと思って、どうしようかなと思いました。まちづくりというのは、政治の争いの場みたいなのところがあって、そのときは、会の中でもちょっともめた雰囲気があったかと思っています。

結局、1年目は積極的に活動しないでとにかく勉強しましょうということで、あまり動きませんでした。

最初の主立った活動は、第1回目のシンポジウムです。会ができて1年後の3月です。緑町のまちづくりについて勉強しましょうというシンポジウムを開きました。ちょうどそのときは市長選挙の年だったかと思っています。そのときに、誰を呼ぼうかということになったのですが、私はわりと強く主張して、あえて市長に来てもらいました。それは、市長というのはまちづくりの責任者で経験者なので話を聞きましょう、政治家としての市長とは切り離すべきだ、と主張して、——当時、土屋市長ですけれども、シンポジウムに来ていただいて話をさせていただきました。

それに対して、反対する人もいたことはいたのですが、逆に、我々の会が政治的に中立的な会だということを理解していただいて、——これは私の思いなので、本当のところはちょっとわかりませんが——このときから我々の会を政治的に利用しようという人は、だんだん離れていったのではないかなと思っています。

その後、イースト吉祥寺というところに注目して検討を始めました。これは、行政の施策としても吉祥寺をどうにかしなければいけない、特にイースト吉祥寺というのは、発展がなかなか進まないということで、行政側も苦労しているエリアでした。

まちづくりという観点で言うと、環境浄化運動が長い歴史を持っていて、市と市民が協力して、反社会勢力とか、あるいは風俗店を排除していったという歴史があるということで、まちづくりを考える上でちょうどいいんじゃないかと思って、我々はそこについて考えていきたいと思いますということになったわけです。

また、このイースト吉祥寺というのは、まちが発展しないというのが大きな問題ですが、

その当時、取り立てて大きな個別問題がなかったんですね。マンション問題だとか、そういった問題がなく、非常にやりやすいところだったというのがあります。

このエリアの地主さんにも我々のプロジェクトに協力していただきまして、何回もワークショップを開いて、この地区の将来のあり方、目指す方向というものについてみんなで検討して、取りまとめました。そこには、行政の力は一切借りずに、市民の力だけでそういったプロジェクトをつくり上げて提案していったということで、会の進む方向がそこで一つ見えてきたのではないかなと思っています。

2004年度は、その提案の公表とともに、協働のまちづくりということを勉強しました。さらに、我々の活動をもっと強化すべきだということで、NPO化をしたのですが、これもさまざまな意見がありました。NPO化みたいにしてきっちりした組織にするよりも、もっと緩やかな、みんなが集まって意見を言える場にしたいほうがいいんじゃないか、そういうこと言うとNPOにするのは望ましくないんじゃないかという意見もありました。しかし、やっぱり何か活動するに当たって、ちゃんとした組織にしないと活動できないのではないかと、ということでNPOという形を選択して、現在に至っています。

2005年は、まちづくりシンポジウムを3回開催しました。これは、NPOになって、より多くの市民を巻き込む必要があるのではないかとということで、とにかくシンポジウムをやって、皆さんを集めましょうという趣旨です。このシンポジウムは、亜細亜大学や藤村女子高等学校の施設を使わせてもらったのですが、地域の大学や高校なども連携をとる必要があるのではないかとということで、あえてそういった場所で開きました。

そういった活動をしていったのですが、あまり市民には広まらなかったかなというのが実感です。その翌年の2006年には、武蔵野市でまちづくり条例をつくろうという動きがあり、それを先取りするということで、先進地域を訪問して、先進地域で活動している市民団体と意見交換などを行っています。練馬、狛江、調布ですね。調布のまちづくり市民組織、我々と同じように都市マスタープランに参加した人を中心としてできた組織です。時期もちょうど似たような時期ですけれども、そういった方たちと意見交換をしています。

先進的な事例について、我々としても知見を積んで物を言えるようにしようということでやったわけですが、その結果、我々の組織が勉強している組織であるということ市役所に認めてもらえたという成果があったと思っています。

まちづくり条例の策定は2006年から2007年にかけてでしたか、これは実際には武蔵野市が行っているわけですけれども、私どもが条例について知見があるということで、まちづくり条例の意見交換の市民ミーティング、それを市が我々と一緒にやりましょうということになりました。

市のまちづくり条例検討委員会は、条例のあり方とか条例に入れるべき項目を検討して市に答申する会ですが、そこが中間報告を出して、パブリックコメントを求めました。そのときにあわせて、我々が市の協力のもと、意見交換会を開催して、市民に集まっていただいて、パブリックコメントに出すための意見交換会をしましょうという呼びかけをしました。これは中央と境と吉祥寺の3カ所で1回ずつ開催しています。

この意見交換会でさまざまな意見が出て、それはそれでまちづくり条例の検討会に報告しているんですが、我々の会としてよかったのは、我々の力を示すことができたということです。我々がまちづくりに関心のある市民を集めることができ、集まった市民の方の意見を集約して、これを市に伝えることができる、こういったことを示したということ、これがその後の活動の大きな役に立っていると思っています。

2008年は、さまざまなウォッチングをしました。まちづくり条例ができたので、市民が提案して、自分たちのまちのルールをつくることができることになりました。それをやるために、自分たちの考えるまちにどういう課題があるのか、あるいはどういうルールをつくればいいのかといったことを検討しましょうということで、ウォッチングをしています。これは皆さんに働きかけてやりました。

そのほか、2008年はいろんな活動をしていて、配付したレジュメには書いていないのですが、条例の勉強会とか、出前講座、あるいは、ちょうど外環道路のP I（「Public(パブリック=市民) Involvement(インボルブメント=巻き込む)」の略で「住民参画」「市民参加」の意）で国が主催する外環道路の意見交換会があったのですが、そこに我々のメンバーを——私もその一人なんですけれども、——ファシリテーターとして派遣して、意見交換会のファシリテーションを行いました。

外環は、長い歴史があって、国がほとんど一方的に決めた計画であり、その後、さまざまな意見交換会とかシンポジウムが行われています。このときも国主導の意見交換会が行われることになりました。そのため、ファシリテーターがいたとしても、とても住民の方はそのファシリテーターを信用できない。ファシリテーションというのは非常に重要で、中立的な立場で皆さんの意見を吸い上げなければいけないのですが、国が雇ったファシリテーターは、自分の意見を聞かないんじゃないかという思いがあったのではないかと思います。それで我々が呼ばれたんじゃないかなと思います。

結果としては、見方によりますけれども、いろんな意見が意見交換会に出たと思います。やや勝手な思いですけれども、我々が参加したからそういった意見を言うことができたのではないかと思います。国のほうに伝わったかどうかわかりませんが。

そういった活動を2008年までしています。

2009年、昨年度は、初めに言いました市の都市マスタープランの意見交換会、これは今年度の4月までやっていましたが、そこに協力をしています。

都市マスタープラン改定のための意見交換会ですが、今回の改定というのは非常に大きな意味を持っています。あまり皆さんご存じないかもしれませんが、かつて、都市計画という分野は、基本的に行政が計画をつくるということで、市民の絡む余地はなかったんです。ただ、ほかの分野に比べれば、比較的早い時期—早いといっても平成になる頃ですが—市民の意見を取り入れるということが制度化されました。それまでは、まちの計画というのは役所がつくるんだ、市民が立ち入る必要はない、あるいは、もともと都市計画というのは都道府県の計画なので、市役所もなかなか立ち入れないという状況だったわけです。それが平成になる頃の話ですが都市計画法の大改正があって、市町村の力が強

くなくなったんですね。そのときには地方分権の世の中でしたので、市町村が、先ほど言いました、まちづくりの都市計画の基本方針を定めることができるというふうに決まったわけです。地域のことは地域でということになったわけです。さらに、先ほど申しましたように、市民の意見も反映しなさいという形になったわけですね。

これが先ほど述べています都市マスタープランで、武蔵野市では市民参加でどういうまちにしたいかということをお話したのですが、実際、その後の計画の運用はどうだったかという、——これはまた、市役所の方は別の意見を言うかもしれませんが、あまり省みられていないなというのが今までの私の感想です。

というのは、確かに都市マスタープランは市町村がつくる都市計画の基本方針ですが、極端な言い方ですが、その基本方針を守りなさいということはどこにも書いていないんです。法律的に都市マスタープランの位置付けがわりと中途半端なんですね。「市役所がつくることができます。以上、終わり。」なんです。それなので、つくったということは画期的だったのですが、その後の都市計画にどう活かされているのかがよくわからないところがあったんです。

そういった中でまちづくり条例が改正されて、現在、施行されていますが、まちづくり条例で都市マスタープランを市のまちづくりのルールにしたんです。市が行うさまざまな都市計画、開発事業者が行う都市開発——これはマンション開発なんかを含みます、あるいは、住民が行う都市開発——例えば家を建てる、駐車場をつくる、などいろんなことがあります、それは基本的に都市マスタープランに従いなさいということになりました。まちづくり条例の中でそう定められたんです。ということは、都市マスタープランは強制力を有する計画になりました。

したがって、今回の都市マスタープランの改定は大きな意味を持っていて、うまくすると強制力を持たせられるし、事業者や市民が、もちろん市は当たり前ですけども、市全体として、あるいは地域が守るべきルールをつくることができるようになったんです。

したがって、都市マスタープランの改定、10年ぶりの改定ですが、より多くの市民の方が参加して、そしてそれを共有するということが非常に重要になりました。そういうこともあったので、市役所のほうは、なるべく多くの市民の意見を聞きたいというふうに思っていて、我々としても、もともと都市マスタープランをもとにつくられた会ですので、改定に当たって積極的に参加すべきだという両者の思いがうまく合って、意見交換会を開催しています。主催は市役所ですが、実際の運営は、私ども市民まちづくり会議がしています。

その運営に当たって、私どもでは、市内16のコミュニティ協議会や町内会、あるいは場所によってはなかなか会としては難しいという場合には有志の方のご賛同を得て、地元の方と一緒に我々とタウンウォッチングをして、まちの課題などを発掘して行って、その結果を取りまとめて意見交換会に提出しています。

意見交換会は、今年は2月、3月、4月にそれぞれ1回ずつ、吉祥寺と中央と境の3地域で延べ9回と、その準備会を開催しています。

その成果につきましては、一応既に取りまとめが終わっておりまして、改定委員会に報告されています。改定委員会はまだ実施中ですので、その中でいろいろ検討されているというのが現在の段階です。

市民には、いろんなまちの課題とか思いがありますが、それを話す機会がなかなかありません。また、行政に伝えるということもできないわけです。もちろん、市長とのタウンミーティングなどで個別の話は言えるかもしれませんが、ざっくばらんに意見交換をするという雰囲気ではないので、そういった場をつくるということは非常に重要なことで、私の聞いている範囲では、参加した市民の方も非常に満足されています。

それから、市民同士で話し合うことによって、自分たちで何かしよう、自分たちで何か解決できるのではないかとというようなことを考える、そういったきっかけの場となったと考えています。また、行政にとってみれば、市民が思っているいろんなことを知ることができる。個別にいろいろ言う人はいて、基本的に声の大きい意見というのはわりと通りやすいのですが、意見交換会は、いろんな市民が集まった中での話ですから、いろいろな考え方が市に伝わっています。

我々の会の目的である市民主体のまちづくりに向けて大きく前進したのではないかと思いますし、我々にとっては、我々の活動が行政と市民の両方から信頼を得られたのではないかと思います。

こういった意見交換会、やり方はいろいろあって、市の人が意見交換を直接やるというパターンもあるかと思いますが、おそらくそれをやると、陳情会になるんですね。市民と行政が円卓に座っているながら、反対側のテーブルに座っているのと同じになってしまって、市の人に対して要望するとか、あるいは、質疑応答になってしまう。でも、我々のようなNPOが司会をやることによって、質疑応答ではなくて、みんなで考える場が提供できたのではないかと、そういうふうに思っています。

こういったことによって、行政のレベルも——と言うと失礼ですけども、——上がったと思いますし、これもまた失礼な言い方ですけども、市民のまちづくりのレベルも上がったのではないかな、もちろん我々のレベルも上がったのではないかなと思っています。

まちづくりを、今後どうやっていけばいいのかという話ですが、こういった会を通じて、関係者の信頼関係の構築というのはとても基本的なことです。意識改革であるとか、相手の尊重であるとか、情報の共有です。これはどこでも言われていることですが、市民同士でもそうですし、あるいは、市民と行政が話しても同じです。何か問題があると、すぐけんか腰になりますが、基本的にはけんか腰になってはいけない。とにかく相手の立場をよく考えるということですね。これは非常に重要なことだと思いますね。

特に、行政と市民ということで考えると、相手が行政職員の場合には、行政職員の個人の意識によるところが大きいので、面倒になれば、やめると言って終わっちゃうんですね。これは私に関係ないことと一言言ってしまえば、それで終わってしまうような形です。そういったことでけんか腰になってしまうんですけども、相手の考えというのを、あるいは相手の立場というものをよく考えて話し合うということが重要じゃないかなと思

います。

行政の方というのは、法律にしてしまうと従わなければいけないのですが、法律に書いていないことは個人の裁量なので、市民とどうつき合うかというのは個人的なことなんです。

私はまちづくり条例の検討委員会に参加していたんですが、行政が市民の意見を聞く機会を設けることについてもっと積極的に条例に書くべきだということを主張して、委員会提言にも入れてもらいました。これを入れておけば、行政の職員が、自分がやりたいか、やりたくないかに関係なく、市民とつき合わなければいけないことになるわけですね。そういった仕組みを入れておいたのですけれども、実は条例になったときに見事に削除されていて、今は影も形もありません。そうはいつても、今後、市の職員も、我々とどんどん話していかないと、実際のことは進まないの、どんどん我々の方にいろんなことを投げかけてくると思いますし、我々もそれに協力できることは協力していく必要があると思っています。我々というのは市民ですね。市民にいろんなことを投げかけて受けとめをし、市民としても対応していく必要があるんじゃないかと思っています。

それと、いろいろ長々話しましたがけれども、やっぱり時間がかかるということですね。我々も現在に至るまで10年弱ですが、そういった活動を通じて、ある程度の信頼を得るといった段階にきたと思います。ただ単にその10年ボーッとしていたわけではなくて、いろんな実践活動をしてきて、その活動を外に見せてきたといったことが重要ではないかと思っています。

もちろん我々の活動にも課題がたくさんありまして、1つには、どこのNPOも同じだと思うんですが、人的とか時間的な限界があります。まちづくりという非常に広い範囲の中で、実際に私たちができる分野というのはそんなに広くないので、どうしても分野的にも狭くなってしまいますし、あるいは、地域的にも狭くならざるを得ない。これは仕方ないことかなと思います。何でもかんでも手を出すというのは難しいので、できることをやるということです。そうしないと、ボランティア組織なのでとても続きません。

それと、我々は、NPOとして市と市民の中間的な組織ということで活動しているのですが、今後どうしていけばいいのかというのは、実はまだ私個人は悩んでいます。中間組織として当事者にならない、ということを私は今までずっと意識してやってきました。ある意味、常に第三者なんです。住民の方々はいろんな問題を抱えていて、会としてこれに賛同してくれといった声は随分挙がってきているんですね。我々は、解決方法というのはこういうのがありますよというお話しはしますけれども、積極的な賛同はしていません。今まで個別のプロジェクトに対して、会として何らかの意見を言ったことというのは一回もないんですね。外環であるとか、パチンコの問題であるとか、あるいは図書館の問題だとか、いろんな問題が市内にあるのは知っているのですけれども、会としてこれがいいとか悪いとか言ったことは一回もなく、今まで常に第三者でいるんです。どこまでこういうことをしてられるか。第三者というのは、客観的ではあるのですが、悪い言い方をすると無責任ですからね。今後我々はこういった立場でいけばいいのかというのは、

まだまだ模索状態ですね。この辺は、検討していかなければいけないと思うのですが、なかなかそんな余裕もなくて、いろんなところいろんなお話をしに行っているというのが現状です。

今年はどうしようかということもいろいろ検討しています。我々はかつて、イースト吉祥寺エリアの研究をしてきました。最近、イースト吉祥寺エリアでさまざまな動きがあるので、そこについて少し、また何か活動してみようかと、今のところ考えています。まだはっきりしないところですが。

ということで、いろいろ我々の会の成り立ちから、今抱える悩みまでお話しいたしました。必ずしもまだ住民自治というところにつながるかどうかというのは私はわかりませんが、こういった活動をして市民主体のまちづくりというものが進めばいいのではないかと考えています。

以上です。(拍手)

○酒井 ありがとうございます。

皆さんとの意見交換の時間を十分とりたいので1時間以内でおさめてくださいという冒頭でのお願いに答えていただいて、どうもありがとうございました。

それでは、早速始めたいと思います。今、ご自身の活動が、果たしてこれが「武蔵野市の市民自治を考える」につながるのかわからないというふうにおっしゃられたんですけども、会の設立趣旨の最初に「まちづくりは、行政、市民、企業、学校など、「まち」に関わるすべての者が主体的に参加する必要がある。私たちや私たちの子孫が、快適に住み、遊び学び、そして働くことができるように「まちづくり」に参加することは、私たち市民の責務である。」ということが書いてあって、私はもしかしたらその言葉に集約されるのかなと思いました。

また話の中で、私たちが自分たちで活動していく、自分たちのまちを自分たちでつくっていくときに必要なことが幾つか出ていました。特に、行政と関わる以前に、自分たちの活動はどういうことをしていくべきか、自分たちがきちっと話し合いをしていく。森さんの会のまちづくりは非常に多面的で、先ほどおっしゃられたように、環境、緑、福祉、子育てなど、どこに焦点化してまちづくりを考えていこうかということを中心に皆さんで話し合いをされた結果として、自分たちの会はここに焦点化して活動していこうというふうにされたことに、私はとても感銘を受けました。

では、私がしゃべっていても仕方がないので、早速ですが、できる限り今日いらした多くの方のお声、ご意見をお聞かせ願えればというふうに思っておりますので、手短かに、簡潔にご意見を出していただくよう、ご協力をよろしくお願いします。

では、早速どうぞ。勝手ですが、こちらで指しますので、手を挙げてください。いかがでしょうか。では、どうぞ。

○来場者 この10年、まちづくり会議・むさしのでの活動や、その前の策定委員、外環のファシリテーターのメンバーになったこと、そういうものを全体にならして自己評価された場合に、及第点が70点としたら、ご自身で何点ぐらいをつけられますか。

○森 これは難しいんですけども、私自身が武蔵野市のことをよく知らない中で、個人的に言えば、90点ぐらいいっているんじゃないかと思います。また、ご存じかと思うんですけども、当初いろんな意見があって会がまとまらなかったときがありまして、それがよくこれだけまとまってきたなということで、そういう面に関しては100点近いんじゃないかなと思っています。

○来場者 ああ、そうですか。

○森 まだいろいろご不満もあるかもしれませんが。

○来場者 僕の率直な感想を申し上げますと、結果論として、市との関係が非常にいいという面では非常に評価されると思うんですね。僕も当初から入っておりましたけれども、途中で抜けたのは、市に対していい関係ができていると同時に、あまり強いことは言えていないんじゃないか、はっきりしたことは言えていないんじゃないか。妥協している部分が多いんじゃないかというのがありました。

それから、例えば、外環のファシリテーションの場合でも、結果論として、市民の要求したことが5%も要求されていませんね。

○森 国に対してですね。

○来場者 国に対して。市民の要望した意見に対してのフィードバックがありませんね。それは、ファシリテーターの方は十分承知であった。僕はたまたまメンバーにも入っていましたから、私の拙い経験の中から、これは最低限やるべきだと思われるものを私のグループの中にいた2人のファシリテーターにはいろいろ申し上げたんだけど、結果としてはほとんど反映されていなかったということがあります。そういう意味ではちょっと残念だったかなと思う。

皆さんがボランティアでいろいろ活動されているということについては、感謝もしているし、非常にいい機能を担ってくれていると思っています。ただ、例えば隣の杉並区の区民、あるいは区民と行政の動き方なんかと比べると、まだまだ弱いというか、対応ができていない部分があると思うんですね。例えば、武蔵野市に後援、サポートの依頼を頼むと、後援はするけれども、お金は出さない、口は出す、おまけに報告はうるさく言う、それから、市報なんかには載せてくれない。杉並区なんかは、後援を行えば、ちゃんと区報に載せてくれる。それから、会場はただで貸してくれる。区外の人でも全然文句を言わないで貸してくれる。結果としてどうなるかというと、例えば、100人ぐらい集まる場合、大阪だとか福岡だとか仙台だとか、遠くから来ますね。そういう人は、2日間ぐらいのコースだと、そこに来ている食事をしたり、懇親会でお金を落としたりという経済効果が結構あるんですね。武蔵野市はそういうことは全くしませんね。

そういうところをもうちょっと、つまり、まちづくり全体として考えれば、どういう構造がいいのか、あるいはどういう体制がいいのかということです。形式的に市外の人が半分以上いる会合はだめよとか、そういう割り切り方が結構多いんですけども、もっとまちづくりというのはダイナミズムがあるんだから、そういうようなところからも、ぜひ柔軟に動かしてもらいたいなというのがあるんですけども。

○森 そうですね。そういうふうに進めばいいなと私も思いますけれども、ただ、これは市に対して意見要望が弱いと言われるかもしれませんが、それは市が決めることであって我々がどうこうする話ではないので、行政の方でそういうふうにしていただければいいと思います。

○来場者 1つだけ申し上げると、例えば、僕は川の問題なんかをよくやっています。そうすると、例えば、テラスを散策したいから明かりをつけてくれと言うと、行政は、川は、治水が第一だから、障害物になるようなものの電灯だとか明かりだとか、そういうものは一切つけられませんということをしるんです。だけど、実際はどうかと言えば、いろんな方法で明かりをつけることは可能なんです。あまり知らない人は、法律はそうになっているからダメなんですと言われた時点で、ああ、そういうものかと思っちゃったけど、もう一步突っ込んで考えると、そうでもない。やっぱりまち全体、市の行政全体、あるいは市民の生活の向上というようなことを考えれば、方法はあるんです。法律の解釈というものを少し柔軟に考えてやれば、いろんな方法はあるんだけど、そういうことができない。武蔵野市はわりあいそういうところが多いと思うんだけどね。

○酒井 わかりました。いろいろご存じの方のご意見だったので、参加された方ではちょっとわからない方も中にはいらっしゃる気もします。レジュメに書かれているように、会が中立的な第三者的な立場を貫いているというところで、今のようなご意見も出てくるのかなと思います。会の方も個人では、それぞれ希望なり要望なりはお持ちだと思うんですけども、それを会の中では、どうやって普遍化するとか、会のものとしていくのでしょうか。その過程はどういう形でキープされているんですか。

○森 個人でいろんなことをされるのは別に全然否定するものでもないし、それはむしろやっていただければいいんじゃないかなと思います。ただ、会として何か発表するとか、会として意見を言うということに対しては控えているということですね。

○酒井 でも、根底にはそれぞれの意見が、その会の活動には当然反映されているということですね。

○森 もちろんそうです。

○酒井 では、ほかにどうぞ。

○来場者 初めて参加したもので、よくわからないんですけども、私、いつも考えているんですが、病気を抱えた患者である家族を含めて生活してきたんですけども、だんだん武蔵野市はよくなってきているんですね。例えば、保健所がなくなりましたが、そういうことを含めてです。それで、三鷹の方たちは、難病患者を抱えた役員の方が策定委員の中に入っているとか、狛江市なんかでもいろいろ話していますけれども、患者家族が何か運営しようとするときに、武蔵野よりいい形でできているというところを話し合いの中で交換するんですね。私どもの患者というのは、体幹機能をやられるものですから、一人でまちに出ることができないんです。家族がついていかなくちゃいけない。家族がいないと出られない。市民というのは、患者であっても市民なわけですね。その辺のところは救われていないといつも感じるんです、そこだけちょっと申し上げたいと思います。

策定委員の中には、こういう底辺にいる者の意見も入れていっていただきたいなと思って、ちょっと発言させていただきました。

○酒井 ありがとうございます。初めていらしていただきながら、ご意見を出していただいてありがとうございます。

○来場者 いいえ。策定委員会ができたのは大分前だったと思うんですよね。東京で策定委員に選ばれたのは、豊島が初めてだった。最近では三鷹で策定委員の人が加わっているということを聞いたわけです。

○酒井 私が勉強不足で申し訳ないんですけども、その策定委員というのは、何の委員会ですか。

○来場者 策定委員というのは、障害者が当たり前生きていけるような策定委員会があるということを聞いたんです。

○酒井 障害者の方たちのということですね。ありがとうございます。

今、まさにおっしゃったように、市民と言ってくっちゃうと見えなくなってしまうんですけども、市民というのは、本当にいろいろな方がいらっしゃるということを、いま一度、きちんと私たちは確認しなくちゃいけないなという、とても貴重なご意見でした。ありがとうございます。

森さんの活動されている市民まちづくり会議の中でも、森さんは仕事をバリバリされていらっしゃるんですけども、リタイアされた方もいらっしゃるれば、仕事を持たない方もいらっしゃるかと、当然団体にはいろいろな市民がいらっしゃるんですよね。

○森 そうですね。いろんな方もいますし、会に直接参加されなくても意見交換会などでは、なるべく多くの方に参加していただいて、いろんな意見をすい上げていきたいと考えています。

○酒井 ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。どうぞ。

○来場者 どうも今日はありがとうございました。

今日のレジュメにあります都市マスタープラン改定の市民検討意見交換会に私も出させていただいて、森さんの団体は、非常にうまく市民の意見を集約して、改定委員会に出していくというプロセスをととても上手にやっていただいて感謝しています。ありがとうございました。

今日のお話の中で2つ質問があるんですけども、1つは、最後のほうで言われた、会として意見を言ったことはないということです。その点に関係していることなんですけれども、この活動のプロセスを見ていると、やはりお話の中にあつたように、何か特定の見解を述べるというよりは、コーディネーターというかファシリテーターというか、意見を取りまとめ行政と市民をつないでいく役割に徹していらっしゃるように思うんですけども、メンバーの方々は、それぞれまちづくりの専門家でいらっしゃるの、そういう知恵を集約させて、何か特定の提案活動というようなことをやっていける可能性というのはこれからののかどうか。それが1つです。

もう一つは、今、確かに大事なものは、市民自治、そして、まちづくりだと思うんですけど

れども、武蔵野市ぐらいの都市になりますと、武蔵野市民にとってのまちだけではなくて、その外の人にとっての武蔵野市といいますか、多摩地域だとか、23区とか、さらには日本、場合によっては世界に向けての武蔵野市の役割というのがあると思うんですね。そういうことを考えますと、市民だけが集まって意見交換をしながら、自分たちの考え方を出していくのをコーディネートしていくということだけではなくて、現状の市民の考え方にはやはり限界がそれぞれあると思いますし、外に向けての武蔵野市の役割ということを見ると、我々市民自身がいろんなことを学びながら、外の知恵を入れながら、意見交換していかなければいけないと思うんですね。

ですから、それを考えると、この間、都市マスタープランでおやりになったような市民意見交換会のようなものをこれからもやっていかれる場合に、その地域住民だけが集まって意見交換するのではなくて、まちづくりに関する最新の情報について、講師の方を呼ぶのかどうかわかりませんが、そういう情報を集まった市民の方が吸収しながら、学習しながら、何かグローバルな視野でまちづくりを考えていく。そういう仕掛けをもっともっとやっていく必要があるんじゃないかと思うんですが、その辺についてはいかがでしょうか。

○森 どうもありがとうございます。

まず、第1点目の、会として発信したことはないということなんですけれども、これは特定の紛争テーマについて発信したことはないということです。例えば、どこかのマンションができて、周りの住民の人が非常にもめている場合がありますね。そういったときには意見を言ったことはないです。あるいは、先ほど外環の話もありました。外環でいろいろもめていますけれども、それに対してもあまり意見を言っていない。

ただ、先ほどお話ししましたイースト吉祥寺につきましてはこういったまちづくりをすべきだと提案をしています。これは個別の紛争ではなくて、地域のまちづくりについての提案なので、これは積極的にやるべきだと考えてやっています。

それから、外の知恵とかを入れるべきだという話ですけれども、これは、我々、時間と人的な限界もあって、なかなか難しいんですね。

ただ、特にまちに関しては、隣接市との関係の重要性というのは我々も認識しております。その地域の方との意見交換であるとか、タウンウォッチングをしながら意見交換をしたり、あるいは、そこに見に行ったり、来てもらう場合もあるんですけれども、そういったことで意見交換を会としてはしています。

それと、いろんな外の知恵を入れるべきだということで、実はシンポジウムとかをやっているんです。宣伝がうまくなくて、なかなか市民の方に来ていただけないことも多いんですが、条例とか都市マスタープランについても、学者の方とかを呼んでシンポジウムをやっているんですね。ぜひそういうことにも参加していただきたいなと思っています。

○来場者 ありがとうございます。

シンポジウムをやられているのは、この資料でもわかるんですけれども、この間やられたみたいな意見交換会をやるにあたって、ただ初めから意見を言うだけではなくて、何か

基本的なことを学習しながら意見を言っていくということも大事ななと思ひまして。

○森 わかりました。お金の問題も若干絡むので、なかなか難しいところもあるんですけども、次回チャンスがあれば考えたいと思ひます。

○来場者 わかりました。ありがとうございます。

○酒井 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○来場者 武蔵野市にはかなり外国人の方が住んでますよね。特に学生さんとか。各大学に相当の留学生がいる。その方たちと市民とがもう少し交流して、お互いに知り合つて、情報を発信し合い、吸収し合つたらどうでしょうか。スイングビルに国際交流協会がありますよね。そこの方も、そういうことをしたいということをおかれていましたけれども、要するに、そういうことで活性化するんじゃないでしょうか。

私は、今回初めての参加で、先生がやっていたらしゃるようなこともよく知らなかったんですけども、私も外国人の友達が何人かいるんですよ。特にネパール人の友達は、我々と発想が違ふんですね。非常に刺激を受けるわけです。我々が考えつかないような発想をして、なるほどと思うようなこともありますので、そういう方たちを仲間に入れてみたらいいんじゃないかと思ひます。向こうも日本の人たちと知り合いになりたい、いろんなことを発信したいけれども、そういうところがないだろうかというような話を聞きましたので、そういうことをされていったらいいんじゃないかと思ひます。

これから国際都市というふうにだんだんなつてくると思ひますね。東京自体もそうです。日本人はグローバル化でそういうところに巻き込まれています。武蔵野市も特にそういう知的な人たちがたくさんいるので、そういう人たちのお知恵も借りるということはいかがでしょうか。

○森 非常に重要なことだと思ひます。やればやりたいと思ひますけれども、先ほど申しましたけれども、やっぱり我々、本当にボランティアでやっつていて、やれる活動範囲というのがものすごく狭いので、その中で、あまり広げると活動できなくなるんじゃないかという懸念があります。

○来場者 ちなみに、団体に外国人の方はいらっしやいますか。

○森 いないんです。いませんし、そもそも若い人がいないです。

○来場者 拒否されているわけではない。

○森 もちろん拒否はしていません。今、一番若いのは34～35でしたっけ。40かな？ 実は我々の会というのは学生がいないんですよ。本当は来てほしいんですよ。全然拒否していないんですけども。

○来場者 こういうものがあるというのをみなさん知らないんじゃないですかね。

○森 知らないのか、ちょっと年代格差ができてしまうのか。年寄りが多くて。我々もぜひいろんな人に参加してほしいと思ひます。

○来場者 いろいろな国籍の方もいたら非常いい方向に行くんじゃないかという感じがするんです。

○酒井 それは、先ほどの市民といえどもいろんな方がいらっしやるというご意見と同じ

ように、外国人登録されている外国の方もかなりの数いらっしゃいますし、当然、学生さんも、仕事でいらっしゃる方も多いので、そういう意味では、どこは意見を聞いていく機会が何かあればいいですね。

○森 そうですね。

○酒井 ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○来場者 私、以前に森さんのNPOから何か機関紙に書いてくれということを言われました。70年前に第一小学校で郷土という授業があったので、その郷土で教わったことをちょっと書いたんです。5年生か6年生の頃、その当時は公園通りにいろんな商店があったから、その商店を回って、佃煮屋ではどんなことをしているのか、靴屋さんはどうやって商売しているのか、そんなことを調べました。それから、吉祥寺というのは、昔、駒込吉祥寺というところで火事があって、焼け出された人が当時のお役人に連れてこられた。五日市通りから間縄で区切って、それで畑を分けた。だから、今、吉祥寺は道路がちゃんと碁盤目のようになっているんだよとか、そういう授業があったんですよ。

ただ、そのときに、いくらなんでも、70年前に聞いたことはもうあやふやだし、そこにいろんなよけいなこと——八百屋お七の話とかがあったので、ちょっと待てと思って、教えてくださった先生が90歳で生きていたから、先生、あのとき教えてくれたのは、どうやって調べてくれたんですかと聞いたんですよ。そうしたら、当時のことだから、資料なんかほとんどなくて、職員室で、6年生の先生が3人か4人いたから、それで聞き語りで君たちに教えたんだよということでした。

もちろん、当時と学校の内容も先生の忙しさも全然変わっているとは思いますが、市民会議に出ても、例えば小学校、中学校の先生の顔というのはほとんど見ないわけです。当時に比べれば、忙しさもあるし、転勤が多いとかあるんでしょうけれども、先生は子どもたちにいつも接しているし、PTAのお母さん方とのいろんなやりとりもあるし、今の時代、いろんな問題も抱えているはずだから、僕は先生にでもちょっと声をかけて、参加していただくようなことがあってもいいんじゃないかなと、そう考えています。

○酒井 そうですね。その貴重なお話をぜひまとめてください。森さんいかがですか。

○森 おっしゃるとおりだと思います。まちづくりというのは、子どものうちから遊びながらでもちゃんと、勉強していくことが非常に重要なことだと思いますし、授業の中にそういったものを取り入れていただくとか、先生に関心を持っていただくというのは非常に重要だと思います。

ただ、先生に声をかけるのは、途中で教育委員会を通さなければいけないんじゃないかとか、いろんなことを考えると、非常にハードルが高いので、むしろ、お知り合いの先生がいらっしゃったら、ぜひ紹介していただきたいと思います。そういう方に人づてでも参加していただきたいなと思っています。

○酒井 そうですね。そういう形で、今おっしゃったように、教育委員会なり、行政を通すより、まず、市民同士でそういう情報交換をして、ここの先生だったらいけるよとかというのがあれば、ぜひ一度そういうのもチャレンジしていただけるといいのかなと思います。

す。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○来場者 今までこんなことをされているといういろんなお話がありました。私も吉祥寺に長く住んでいるんですけども、市報で出たのかもしれませんが、イースト吉祥寺プロジェクトというのがちょっとわからなかった。

あと、これは直接関係ないのかもしれないですが、レジメに、感性工学によるものづくりというのがありますが、よくわからないので教えてください。

それから、学校で小学校3年生が、私たちのまちというのをやっています。学校によって多少違うと思いますけれども、それぞれ近所を歩いたりしています。

○酒井 ありがとうございます。

○森 まず、イースト吉祥寺というのは、先ほどちょっと申しましたけれども、イースト吉祥寺エリアというのがあるんですね。そこは非常に開発が滞っていて、ちょっと環境の悪いエリアなものですから、どうにかしなければいけないというのが市にとって大きな問題だと認識をして、この地域はこうすべきだということを私どもで自主的に提案したというのがイースト吉祥寺プロジェクトです。これは、行政の方はかかわらずに、私どもと地元の方で協働しながら研究をしていったというものです。

○来場者 吉祥寺のイースト、東側ですか。

○森 イースト吉祥寺というのは、基本的に吉祥寺大通りより東側ですね。その一画です。

○来場者 地域を指すんですね。

○森 そうです。旧近鉄裏の一画ですね。あと、本町コミセンの辺り。その辺についての提案をしたというものです。

感性工学ですけども、これは広島国際大学の方がまちづくりに感性工学という手法を用いて、人の感性というものはかってまちづくりをやっていこうという研究をされていたので、その方をお呼びして講演をさせていただいたということです。

○来場者 そういう分野ということですね。

○森 そういう分野があるということです。私も詳しくは説明できないんですけども。

○来場者 ありがとうございます。

○酒井 ありがとうございます。どうぞ。

○来場者 武蔵境の公園の中は暗くてしょうがない。あそこは何とかしなきゃだめだ。公園の中のトイレが少ないから、ちゃんとする。そうじゃないとだめだ。

それから、バスの問題。ノンステップではなく、階段があることが問題である。ノンステップのバスはまだ少ない。そういう問題について運動を起こしている人がいる。バスの問題は大きな問題だ。だから、そういう運動を起こさなきゃだめだ。これからどんどんそういう運動を起こす。そうでなきゃだめだ。何とかして、大きな問題。

○酒井 ありがとうございます。

今、2つ意見を出していただいて、武蔵境の公園については、おそらく森さんのほうで少しご意見いただけたと思います。バスの問題については、例えば、今、ご発言いただい

た方のように、車いすを利用され、バスを日々の足として使う方が多い自治体があります。そういうところで営業しているバス会社では、ノンステップは当然のことながら、バスの構造自体も違っていたり、運転者さんが車いすの方への対応をきちんと訓練されているというところもあつたりするんですね。なので、そういう希望や、暮らしていくために必要なことがあれば、当然それは私たち住んでいるまちの問題として、みんなで共有していく必要があるかなと思います。

公園については、森さんのほうで、こういうふうになればもっとうまく環境を整備できるだろうということも含めて、何かご意見いただけますでしょうか。

○森 公園というのは、特に地域の方がよく使う施設です。基本的に市の考え方は、地域のことは基本的に地域で解決とされていて、もちろん行政が動くのは当たり前ですけども、それだけでできないところは、地域の住民がやっていかなきゃいけないんじゃないかと考えています。場所によっては、公園の管理を住民とかNPOでやっているところもありますし、そういう動きにいくのではないかなと思っています。

私どもの会としては、なかなかそういった個別のことまで立ち入れませんが、どういうことをすれば解決できるかというヒントを皆さんとお話しすることはできると考えています。

○酒井 ありがとうございます。

ほかにご意見がありますか。時間は結構余裕かなと思っていたんですけども、どんどんなくなってますね。ご意見ほかにありますか。

○来場者 3つほど印象に残ったんですけども、先ほどから話になっていますファシリテーターとしての立場ですか。市民まちづくり会議・むさしのは、専門家集団的な性格なので、ある程度そういうふうな役割をやっておられるというところもあると思うんですが、先ほどおっしゃったように、対行政と市民だと、陳情だとか、質疑応答みたいになっちゃうけれども、むしろそこに市民の民間の組織が介在することで、今回の意見交換ができる。そういう実績もおありになるし、そういうことというのは、今後、市民自治を考えるときの一つのポイントになるんじゃないかなという印象がありました。

それから、例えば市民活動というのは、我々がやりたいことをやっていくというのはもちろん前提なんですけれども、必ずしも市民を代表しているわけじゃないわけですよね。代表はあくまで市長であり、議員です。ただ、自分のかかわっている課題なり問題なりをボランティアに取り組んでいるということなので、そういう点の特殊性というのはあるんですけども、そのところで、森さんとしては、まちづくりに関連して、議会とのかかわりというのをどういうふうにお考えになっているのかというのがちょっと聞きたいところなんです。

もう一つは、先ほど亜細亜大学とか藤村学園のことをお話になったし、学校の先生とかのお話も出てきたんですけども、私も亜細亜大学の学生さんなんかと話をしていると、学生諸君は自分のことを市民だと思っていないんですね。市民なので投票権もあるんですけども、本来の市民だとは思っていない。だから、通学しているあなたたちも武蔵野市

の市民だということを言うと、えっ？ という感じで不思議がると思いますか。そういう、彼らはまちづくりの一つの要素で、若者というか、そういう異質な文化を持った方を誘い込むというのは大事なポイントだと思います。会場に亜細亜大学とか藤村学園を使われたというところで考えていらっしゃるの、若い世代をどういうふうにもちづくりに引っ張ってこようとされているのか、時間も押しているという話ですけれども、そのあたりの可能性みたいなことを教えていただきたいと思います。

○森 まず、議会の関係なんですけれども、私どもの会に議員さんで参加されている方はいらっしゃるんですけれども、私ども、その人を議員さんだからということの特に意識したことはなくて、市民の一員として参加していただいていると考えています。むしろ、我々は専門的な知見がありますので、議員の方に必要であればレクチャーをするという形での活動になるかと思います。こう言うのは失礼ですけれども、あまり議員のことを意識したことがないので申しわけないです。

○来場者 多分、今、お聞きになったのは、メンバーとしての議員さんではなくて、NPOと議会との関係といたしましょうか。例えば、どういうのがありますかね。議会というのは、市民の代表としての正式な決定権を持っているじゃないですか。そういう議会というものと、NPO、何て言ったらいいんでしょうか。多分そのことをお聞きになっているんじゃないかと思いますけれども。

○森 我々NPOは、そもそも市民の代表でもないですし、何も決定するわけでもない。行政と市民の間をつなぐ役割というのが今の我々の立場なので、それで、市民の意識が上がってきて、いいまちになれば、それが行政に反映されて、それがまた議会に決定していただけるんじゃないかなと思います。

○酒井 若者というか、異世代、次世代についてはどういうふうにお考えでしょうか。

○森 先ほどの亜細亜大学とか藤村学園の場所をお借りしたというのは、まさに大学の先生とか、あるいは事務局の方と仲よくなろうという意図はあったんですけれども、残念ながらそういうことはならなくて、単に場所を貸しましたでおしまいでした。なかなか若い人が関心を持ってくれないんですね。でも、時々、我々の分野に都市計画とか建築をやっている学生は来てくれるんですよ。ただ、市内にはあまりいません。

○来場者 そういう学生さんもいますよね。

○森 そうですね。市内の学生じゃなくて、我々のメンバーの人づてで来てくれるんですが、若い人は関心がないというわけじゃないですね、分野によっては。ですから、むしろいろんなところに宣伝していただいて、来ていただけるようになればいいんじゃないかな、幅が広がるんじゃないかなと思います。

○酒井 そうですね。最初の設立趣旨にまた戻りますけれども、自分たちが暮らす、学んでいるまちづくりにかかわるといのは、市民として当然というところから、少し何か広がりが出てくるといいのかなと思うので、専門的な分野の学生でなくても、ぜひ今度呼んでいただけるようなイベントをやってみたらいかがでしょうか。

そうしましたら、今、お手を挙げていらしたお四方でおしまいにしましょう。もうそろ

そろ過ぎていきますので手短にお願いできますか。

○来場者 さっき、向こうの方がおっしゃったように、今、いろんなことをやっていらっしゃるんですけども、武蔵野市では、今度武蔵境の南口に武蔵野プレイスというのができますね。隣の公園に今パネルが出ていまして、武蔵境近辺の徳川時代から移住してどうのこうのと、なかなか興味深いのが出ています。ああいうことを市民の人たちは知らないもので、ああいうものがあるというのは非常にいいことだと思います。

それから、私は、三鷹駅の北口にパチンコ屋ができるというので後から反対運動に参加したんです。熱心にやったんですけども、その決起大会か何かに、非常にあの辺に愛着を持っていらっしゃる当事者の一人の方が——あそこで生まれ育った方でしょう、三鷹駅の北口には平和祈念像があるが、その裏にバス会社のコーンだとか廃材だとか土のうだとか積んであるし、草ぼうぼうである。また、交番の隣に国木田独歩の碑がある公園があるけど、そこも草ぼうぼうでごみ置き場みたいになって、説明する部分もないと言っていた。平和祈念像には、こんなちっちゃい案内板があるんですけども、横の大きな看板に隠れちゃってよくわからないんです。交番横のほうは全くない。ないから、私は生涯学習スポーツ課に建てるように言ったんですけども、あれは文化財じゃないから建てることは絶対にできないと言われました。そういうことはもう少し柔軟に考えていいと思うんです。というのは、国木田独歩の碑というのは、もう一つ玉川上水のところにあるんですけども、そこには案内板があるんです。何であるんだといたら、あれは個人が建てたんだからあるんだそうです。これは市長にも言ったんですけども、市長は、今度、武蔵野市で財団をつくったので、その中で考えていきたいという話をされていました。

私が言いたいのは、先達が爆撃で二十何名死んで、それをしのび平和を祈念するために、当時の議員さん全員一致で大先生につくっていただいた。そういうことはあまり知れ渡っていないので、もう少しきちんと説明したほうがいい。

それと、さっきもこちらの方がおっしゃったように、武蔵野市のことを考えるんだったら、武蔵野市の歴史、爆撃とかいろんなことで被害に遭った方がいて亡くなったりしたということをもっと少し学校でも知らしめるとか、あるいはそういうシンポジウムが必要じゃないかなと思います。

私は、祈念像の後ろの土のうから何から全部取り払って、関東バスに片付けさせて、草は緑地課か何かに知らせるとか、国木田独歩のところは言ったんですけども、一向にやらないんですよね。やらないから、30分ぐらい早く起きて少しずつ掃除していて、市の窓口に行ったら、この間見にいったけれども、少しきれいになっていたじゃないかと言われたけれども、それは私がやったからで、あの連中は何もやらないですよ。

○酒井 ごめんなさい。時間のほうが少なくなってきました。

○来場者 そういうことで、先人が残したものをもっと大事にしていきたいということです。

○酒井 ありがとうございます。そうですね。先ほどからそのご意見はたくさん出ていまして、歴史をきちんとみんなで確認するということが出ていたので、いま一度そういうの

も少しまた考えていただきたいなということで、よろしいでしょうか。

○来場者 はい。

○酒井 それでは次の方。

○来場者 よくよく考えたら、私、平成 20 年のシンポジウム(「分権時代の自治体運営の基本ルールを考える」)にコメンテーターで出ていたんですけども、久しぶりにここへ顔を出させていただきました。

そのときにちょっとお話をしたようなことなんですけれども、今、皆さんの話を聞いていて、市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップというので、多分ここにいらっしゃる皆さんは、いわゆる市民自治だったり、行政だったり、いろんなところに関心をお持ちの方だと思うんです。さっきも、今ここにいる人たちが市民の代表のすべてではないですよというお話が出ていたんですけども、要は、無関心になっている人たちをどうやって掘り起こすかという問題があります。今お話があったので、あえて手を挙げさせていただきましたが、無作為抽出による市民討議会みたいなのをやってみたらいかがかなと思います。それは、年齢はそれこそ若い人たちがいいよということであれば、二十歳ぐらいからとか、意識としてあるのであれば 15 歳ぐらいからとかという形で、できるだけ若年層の人を入れながら話をしてみる。それはその人たちが関心のあることをテーマにするから来てねというやり方をすれば、多少は話にきてくれる人たちです。通常ときには、僕には関係ないからとか、言ったって変わらないからと思っている人たちも、そうやって選ばれていますよという表現をかけることによって、多少の関心を持って出てきてくれるんじゃないかなというのは、すごく感じていて、そういう方法も考えてみられたらいかがかな。そのときには、市の協力を絶対的に得ないといけないけれども、その辺はうまくできるんじゃないかなと思うんです。

○酒井 ご提案型の意見ありがとうございます。今回、第五期基本構想・長期計画のほうはそういう形で少し市民が入っていくという方法がとられるようですね。

そうしましたら、お待たせしました。

○来場者 感想みたいなものですが、私は吉祥寺が大好きなんですけれども、つくられたまちという感じがする。今日はみんなでまちをつくっていくんだという話ですが、これも大分僕も勉強したつもりなんですけれども、特に駅前の商業地区なんかは、地元の人と話し合いながら、イーストをどうしていこうとかという話は今日理解できたんですけども、やっぱりつくられたまちという印象があるんですね。大資本の影響といいますかね。

例えば、駅前に銀行が 11 あるんですけども、私は銀行はそんなに必要ないと思うんですね。銀行の支店長と話しましたら、本社の命令でここには支店を出すという話を聞いて、やっぱり吉祥寺というのはだれかがつくっているのかなと、そんな感じを持つんですよ。

昔、三越がありましたが、撤退した後そこにはどこが来るのかなというのは、やっぱり僕たちにわからなかったですね。現実、今度、伊勢丹の跡がどうなるかというのも、やっぱりだれかがつくるんだろうなと思います。私は、吉祥寺は大好きなだけけれども、その限界といいますか、NPO 活動、行政の限界といいますかね。見えざる手で駅前に銀行が 1

1も12もできちゃうなど。伊勢丹の跡は、私たちは何かできてほしいなと思っても、やっぱりどこかから出てくるなど。やっぱり与えられたまちなのかなど。ちょっとそういう感想を持つんです。だれか、いい答えありますか。

○酒井 ありがとうございます。

○森 確かに今の仕組みでは、作りたい人が作ってしまうのですが、例えば、建物の高さをそろえようとか、あるいは道路に面した壁面を後退しようとか、あるいはマンションでも1階、2階は商店にしようとか、そういうことは都市計画の手法でできるんです。規制も誘導もできるので、そういったことを提案できないかということのをいろいろ検討しています。もちろん伊勢丹が入るか、三越が入るかなんていうことは、とても我々にできない話なんですけれども、少なくとも都市計画手法の中でできることはやっていこうじゃないかという考えです。

○酒井 ありがとうございます。では。

○来場者 2点ばかりお伺いしたいんですが、1点目は、行政とのつき合い方の秘訣。要は、市民団体は、とかく行政に要求するだけの団体になってしまったり、逆に、行政の下請け団体となっちゃうケースがあるんですけれども、程よい関係をつくり上げていく秘訣はどこにあるかということが1点目。

もう一つは、自治を担うのは市民だということに市民に気づいてもらわなくちゃいけないと思うんですが、それはどのようにしたら気づいてもらえるか。その秘訣があれば伺いたいと思います。

○森 まず、1点目ですけれども、我々は、言いたいことは言いますが、けんかすることはありません。要するに、さっきも言いましたけれども、けんかすると、相手の人格を否定するようなけんかになってしまうので、それは絶対あり得ない話で、当然行政の方も仕事でしているので、仕事で言えないことは言えないし、やるべきことはちゃんとやられている。そういう中で我々がそういったことを尊重しながら、話というか、お願いも含めてしていくということは非常に重要なことで、それは結局人とのつき合い方の問題じゃないかなと思います。

ただ、市民が怒るのは、市民が行政に信頼されていないというふうに思われるからですね。なぜ信頼されていないと思うかということ、行政というのは大体、情報を出してこないんです。出してもいいような情報でも、これは個人情報ですから一言言うと、そこで出さない理由ができるので、そういった言い方で出してこないんです。その辺、市の方もやむを得ないところはあるのですが、そういったことを理解しながら話していくということしかないのかなと私は思っています。

それから、自治を担っているのが市民だという話ですけれども、それはそうなんですけれども、市民自治というのがどういうものか、私自身も理解していません。何でもかんでも市民が決めればいいというものじゃないと私は思っています。当然、議会なり、あるいは市長なり、ちゃんとやらなければいけないことはあるので、議会と別に市民委員会が機能して何かやるとか、行政の執行委員会の代わりに市民委員会が全部やるというのは、必

ずしも私は望ましくないやり方だと思っていて、こういった研究会などでいろんな議論をしていくべきものだと思っています。

○酒井 そんな形で。

あと、それでは大変申しわけないんですが、一人一人のご意見をということで、今の四人の方でおしまいにしたいと思います。最後ぐらい時間どおりに終わろうと思ったんですが、やはり過ぎてしまいまして、司会の不手際で大変申し訳ありませんでした。

今日いただいた中で印象的だったのが、レジュメの最後のところにある限界ということ、森さんが、仕事をしながら、自分の生活をしながら活動していくことの大変さを何度も言葉でもおっしゃられていました。やはり自分たちが住んでいるまちのことを今以上に快適にしたいという、その気持ちは皆さん同じだと思いますので、それぞれ生きていく忙しさの中でも知恵を出しながら、たまたまNPO法人の皆さん——専門家集団というおっしゃり方をしましたが、ほかの活動をされている方も、それぞれ皆さん特技があったり、貴重な体験をされていたりすると思います。市民の皆さんそれぞれが専門的な知識や経験を持ち、積んでいらっしゃるのですから、ぜひ市民の皆さんのそういうお知恵なり情報を集約して、いろいろな世代を取り込んで、今後ともどうぞ活躍の場をどんどん広げていって、市民活動の一步先を行く活動団体として、ますますの発展をしていただければと思います。

何か最後に今日のシンポジウムを通じてありますか。

○森 いろいろなお話を私のほうにいただきまして、いろいろ参考にさせていただきたいと思います。

私ども、何回も言いますけれども、我々だけだと限界があるので、ぜひとも皆さんに参加していただいて発展させていければいいなと思っています。私ども、皆さんが参加されることを全然拒んでいませんので、どんどん積極的なご意見なり、活動をしていただきたいなと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

○来場者 行政の人間が一人二人いるから言うんだけど、ほかの地域はよくやっているなと思う。例えば柳川の掘割を復活させたのは市の職員ですよ。北九州の紫川を昭和55年、真黄色な水をハゼが釣れるきれいな川にしたのも市の職員が積極的にやった。墨田区の雨水をやっているのは市の職員です。ということを見ると、市の職員は、市の職員だから、まちづくりの具体的なことまでできないとか、遠慮するとかという必要性はなくて、情報も持っているんだから、もっともっと積極的に出てきてもいいと思うんだね。同時に、情報のアクセスをもっとしっかり出さないと、市民自治は遠のいていくばかりだから、それをぜひお願いしたい。

○酒井 ありがとうございました。

ご意見はいろいろほかにもあると思います。また、今の発言で思った方もいらっしゃると思います。どうぞアンケート用紙のほうにそれをお書きいただいて、冒頭に言いましたように、今日のことは記録として残りますので、ぜひそれも皆さん、どうぞ参考にしてく

ださい。

では、いま一度、ここで一回切らせていただいたほうがよろしいですね。

○森 そうですね。ちょっと今のご意見に参考ということで。今回まちづくり条例ができたんですね。これがよかったのは、市民がまちづくりに参加できるという仕組みができたんです。ただし、これ自体はいいと思っていますが、若干最近危惧しているところは、行政側が、まちづくり条例ができたんだから、まちの姿は市民が提案してくださいというようになりました。若干市民任せになっているところが感じられて、これはちょっとまずいんじゃないかと個人的には思っています。私個人としては、市の職員がやるべきことをちゃんとやった上で、市民と連携してほしいという思いがあります。

○酒井 お互いにやるべきことをそれぞれの立場でやっていこうという形でまとめさせていただきます。

どうも長時間になって申しわけありませんでした。これで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

第3回連続講座

参加者アンケート集計結果

武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～
参加者アンケート

アンケート総回収数：22件

1 ご自身について回答をお願いします。

① 武蔵野市との関係

項目	回答数	比率 (%)
1. 市内に在住している	19	86%
2. 市内在住ではないが市内に在勤している	1	5%
3. 市内在住ではないが市内に在学している	0	0%
4. 1～3には該当しないが市内で活動をしている	0	0%
5. その他 ・ 狛江市 ・ 市民自治に興味があり、参加させていただきました。	2	9%
合計	22	100%

② 性別

項目	回答数	比率 (%)
1. 男性	16	73%
2. 女性	6	27%
合計	22	100%

③ 年齢

項目	回答数	比率 (%)
1. 10代	0	0%
2. 20代	1	5%
3. 30代	0	0%
4. 40代	2	9%
5. 50代	3	14%
6. 60代	6	27%
7. 70代	10	45%
8. 80歳以上	0	0%
合計	22	100%

2 今回の講座を何でお知りになりましたか。(複数回答あり)

項目	回答数	比率 (%)
1. 市報	5	23%
2. ホームページ	2	9%
3. 案内の手紙	8	36%
4. 案内のE-mail	1	5%
5. コミュニティセンターに置いてあるチラシ	1	5%
6. 友人・知人の紹介	2	9%
7. その他 ・武蔵野市 NPO・市民活動ネットワークからの情報 ・協働サロンにて ・市民協働サロンにおいてあるチラシ	5	23%

3 講座に参加されたきっかけは何ですか。(複数回答あり)

項目	回答数	比率 (%)
1. 市民自治に興味があったから	19	86%
2. 武蔵野市政に興味があったから	5	23%
3. 自己啓発のため	2	9%
4. 友人・知人に誘われたから	2	9%
5. その他 ・パートナーシップに興味があったから ・まちづくりに興味があるため	2	9%

4 これまでに開催されたシンポジウムや連続講座に参加されたことがありますか。

項目	回答数	比率 (%)
1. 今回が初めて	7	32%
2. 以前にも参加したことがある	13	59%
合計	20	91%

5 今日の講座から、市民自治をイメージすることができましたか。

項目	回答数	比率 (%)
1. できた	8	36%
2. できなかった	6	27%
3. よくわからない	7	32%
回答なし	1	5%
合計	22	100%

6 今日の話聞いて、今後お住まいの地域で何か具体的な行動をしてみようと思いませんか。

項目	回答数	比率 (%)
1. 思う	3	14%
2. 何かきっかけがあれば行動してみたいと思う	6	27%
3. すでに地域活動に携わっている	11	50%
4. 思わない	0	0%
回答なし	2	9%
合計	22	100%

7 今後も市民自治のあり方に関する講座やシンポジウムなどを開催していきたいと考えていますが、どのようなイベントに参加したいと思いませんか。(複数回答あり)

① どのような方の話に興味がありますか。

項目	回答数	比率 (%)
1. 活発に地域活動している方	13	59%
2. 社会貢献活動を積極的に行っている企業の方	8	36%
3. 大学教授等専門の方(学識者)	5	23%
4. その他 ・ そもそもの市民自治を知りたい ・ 市民と行政の協働のあり方 ・ 外国人の方	3	14%

② どのような形式のイベントに参加したいと思いますか。

項目	回答数	比率 (%)
1. シンポジウム	6	27%
2. 講座・勉強会	8	36%
3. 座談会	4	18%
4. ワークショップ	6	27%
5. その他 ・タスクフォースプロジェクト（市民参画型）	1	5%

8 その他、ご意見・ご感想などありましたら、自由に記入してください。

- ・協働ということについて、市民と行政と一緒に学ぶ場があるといい。現状では両者が別々のイメージを抱いていてミスマッチがあるように思う。
- ・参加者で市民自治について考え、話し合うワークショップが望ましい
- ・第三者という立場の難しさを感じ、もの足りなさも感じました。
- ・（1）狛江市での「まちづくり条例」はハードの面ばかりでソフトが生かされていないようである。概念が見えないように思う。“まちづくり”とは何か、概念をどうお考えですか。
（2）武蔵野市は若者のまち、また財政的に恵まれている、起因にはどんな背景があると思われますか。
- ・市民自治とは何かをもっと知りたかった。あまりにも育てていないと思うので。すでにいろいろとやりすぎている。どうして多くの市民が参加しないのか、何故かわからなくて今日参加した。このまちは1人の人がいくつもやっているが、それがよいのか考え中。
コミセンの役員の方たちにはお誘いの手紙が出ているのでしょうか。指定管理者制度になってから、楽しみのイベントばかりで、市民自治の話など出たことがありません。この町はボランティアを受ける人が少なく趣味の集まりばかりです。民生委員、保護司、日赤、防災推進員…1人の人が何役も受けています。これで市民自治といえるでしょうか。
- ・実際に、地域と結びついて活動されている方のお話を伺うことができ、色々と考えさせられました。新たなきっかけにしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・武蔵野市の市民参加のまちづくりは、近年後退していると思う。もっと市民の意見を積極的に聞き、反映させていく必要がある。市の職員も積極的に市民の中に入って行動する姿勢が欲しい。（他の市町村にはたくさんの事例がある）
- ・時間が許されれば参加したい
- ・まちづくりには、小さなお子さんを持つお母さん、お父さんから学生さん、勤め人、退職者など幅広い年代、職業の人が参加すべきなのだと思うのですが、現実はまだ

遠いものなのだろうと感じました。今回、自分が何ができるのかを考えるきっかけになればと考えて参加させていただいたのですが、何か参加するきっかけになるものをご紹介いただければと思います。

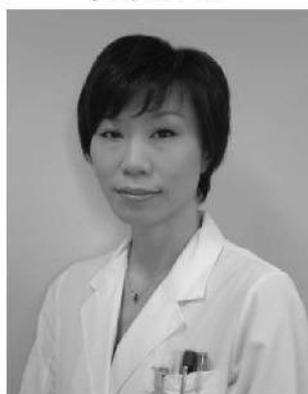
- ・「私は第三者であり、客観性があるんだ」という森さんの主張はどうだろう。マスタープランの仕事をするということの政治的な意味に無自覚なんじゃないの？少しすぎるかな。ボクもまちづくりの会員なんだケドネ。

資料

連続講座

武蔵野市の市民自治の未来を考える ～新しいパートナーシップのかたち～ (第1回)

ゲストスピーカー



庄司 幸江氏
(武蔵野赤十字在宅介護支援センター長)

コーディネーター



酒井 陽子氏
(武蔵野市市民協働サロンコーディネーター)

日時 **平成22年3月13日(土)** 午後4時～
午後5時30分
※市報でお知らせした時間が上記時間に変更になりました。

場所 **武蔵野市役所**
西棟8階 813会議室

定員 **25名**(申込順) 市内在住・在勤・在学の方
3月1日申し込み受付開始。託児をご希望の方は、3月8日(月)までに下記にお申込みください。

※参加費無料

申込み・問い合わせ **武蔵野市企画政策室企画調整課**
(裏面に申込用紙があります) TEL 0422-60-1801 FAX 0422-51-5638
E-mail sec-kikaku@city.musashino.lg.jp

(裏面)

平成22年1月31日に「武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～」と題したシンポジウムを開催しました。これは、分権時代の自治体運営をテーマにしたシンポジウムで、昨年度に続き2回目の開催でした。この中では、商業振興、まちづくり、健康・福祉など武蔵野市内でさまざまな分野において活発に活動している方々に、それぞれの活動や地域とのかかわり、そして課題などをお話いただきました。

このシンポジウムを受けて、今後、そのときにパネリストとしてご出演いただいた方々などをゲストスピーカーに招き、その専門分野から見える、市民、事業者、他の団体、行政等の新たなパートナーシップ、これからの武蔵野市らしい市民自治の可能性についてより深く考えていきたいと思っております。皆さんも、一緒に武蔵野市の未来を考えてみませんか？

第1回目のゲストスピーカーは、武蔵野赤十字在宅介護支援センター長の庄司幸江さんです。

ゲストスピーカー 庄司 幸江 (しょうじ さちえ)

【主な略歴】

平成6年3月 上智大学文学部社会福祉学科卒業
同年4月 武蔵野赤十字在宅介護支援センターに勤務
平成18年 東京大学医療政策人材養成講座2期生修了
平成20年3月 東京医科歯科大学院医歯学総合研究科修士課程医療政策管理学コース修了
平成21年4月 武蔵野赤十字在宅介護支援センター長に就任

社会福祉士、主任介護支援専門員、福祉住環境コーディネーター

コーディネーター 酒井 陽子 (さかい ようこ)

【主な略歴】

平成19年3月 日本社会事業大学大学院博士前期課程福祉経営計画研究科修了
5月 武蔵野市第四期長期計画調整計画策定委員会副委員長
平成21年4月 武蔵野市市民協働サロン コーディネーターとして勤務

東京都民生児童委員新任研修講師、三鷹武蔵野社会福祉士会会長、ボランティアセンター武蔵野運営委員、NPO法人武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク理事、社会福祉士、介護福祉士

FAX申込み用紙

(FAXでお申し込みになる際は、こちらの用紙をご利用ください。切り取り不要。)

フリガナ	
氏名	
住所	
電話番号	
E-mail	

② 第2回連続講座チラシ

(表面)

連続講座
武蔵野市の市民自治の未来を考える
～新しいパートナーシップのかたち～
第2回

平成22年5月23日(日)午後2時～午後3時30分

ゲストスピーカー: 下田 和弘氏(武蔵境活性化委員会委員)

武蔵野市では、平成20年度より分権時代の自治体運営をテーマにしたシンポジウムを開催し、平成22年1月31日には「武蔵野市の市民自治の未来を考える～新しいパートナーシップのかたち～」と題し2回目のシンポジウムを開催しました。このシンポジウムでは、市内において、商業振興、まちづくり、健康・福祉の分野で活動している方々に、活動内容や地域とのかかわり、課題などをお話いただきました。

このシンポジウムでの議論を深めていくために、シンポジウムに続いて3月より連続講座(全3回)を開催しています。シンポジウムのパネリストをゲストスピーカーに招き、その活動を通して見える現状や課題をご紹介いただき、これからの市民、事業者、他の団体、行政等のパートナーシップや、これからの武蔵野市の市民自治の可能性について、みなさんと一緒に考えていきたいと思いません。

第2回日は、武蔵境活性化委員会委員で、武蔵境で商業振興のために活発に活動していらっしゃる下田和弘さんをゲストスピーカーにお招きします。

場所：かたらいの道 市民スペース

武蔵野市中町1-11-16

武蔵野タワーズスカイクロスタワー1階

三鷹駅北口徒歩3分(電話:0422-50-0082)

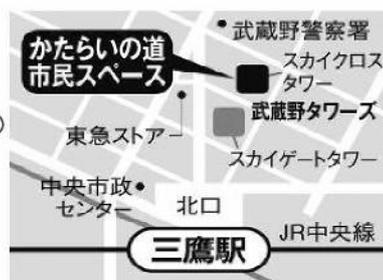
定員: 25名(申込順) 市内在住・在勤・在学の方

5月6日(木)より5月19日(水)まで

(託児をご希望の方は5月17日(月)まで)

下記申し込み先にご連絡ください。

参加費: 無料



申し込み・問い合わせ先：武蔵野市市民協働サロン

180-8777 武蔵野市緑町2-2-28 武蔵野市役所西棟7階

電話: 0422-60-1939 担当: 市民協働サロン コーディネーター酒井陽子

(裏面)

下田和弘氏プロフィール



昭和 59 年 3 月 拓殖大学経済学部経営学科卒

昭和 59 年 4 月 有限会社 下田園入社

平成 10 年 6 月 武蔵野市都市マスタープラン
策定委員

平成 12 年 6 月 武蔵野市路線商業活性化策定
委員会委員

平成 12 年 4 月 武蔵境商店会連合会ファミリ
スタンプ設立委員長

平成 16 年 3 月 武蔵野市中心市街地活性化
連絡会委員

平成 17 年 12 月 武蔵野市まちづくり活動推進
委員会委員

現在、武蔵境商店会連合会ファミリスタンプ事業
部事業部長、武蔵境駅前商店街協同組合理事、武蔵
境活性化委員会総務。

他に武蔵野市消防団第 8 分団団員、NPO 法人 日本
茶インストラクター協会会員、NPO 法人 バーブレスフック普及協会会員。

下田氏は、お茶屋の三代目として、生まれ育った武蔵境でお店を営みながら、地域の方々と常日頃から助け合い、交流することでさまざまなネットワークを広げ、地域の活性化や住民同士のつながりの発展に貢献しています。

コーディネーター 酒井 陽子 (さかい ようこ)

平成19年3月 日本社会事業大学大学院博士前期課程福祉経営計画研究科修了

5月 武蔵野市第四期長期計画調整計画策定委員会副委員長

平成21年4月 武蔵野市市民協働サロン コーディネーターとして勤務

東京都民生児童委員新任研修講師、三鷹武蔵野社会福祉士会会長、

VCM運営委員、NPO法人武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク理事、

社会福祉士、介護福祉士



この事業は武蔵野市と市民協働サロンの協働事業です。

③ 第3回連続講座チラシ

(表面)

連続講座

武蔵野市の市民自治の未来を考える

～新しいパートナーシップのかたち～

第3回

平成22年7月16日(金) 午後7時～午後8時30分

ゲストスピーカー：森 浩 氏

(NPO法人 市民まちづくり会議・むさしの理事)

この連続講座は、市民・事業者・行政・他の団体等、立場が異なる組織や個人が、どのように手をつなぎ、これからの武蔵野市を支えていくのか、ゲストスピーカーのお話をきっかけにみなさんと一緒に考える講座です。

第3回目となる今回は、「NPO市民まちづくり会議・むさしの」理事 森浩氏をお招きします。

森氏が所属する「NPO市民まちづくり会議・むさしの」は、都市マスタープラン策定に参加した市民が中心となって発足した市民団体で、平成17年にNPO法人となりました。武蔵野市を住みよいまちにするために、自らが活動することに加え、さらにもっと多くの方が積極的にまちづくりに参加できる環境をつくらうと日々活動しています。

今回の講座では、活動のやりがいや課題など日々感じていることをご紹介いただき、これからの市民自治の可能性について、みなさんと一緒に考えたいと思います。

※ 都市マスタープランとは、市町村の都市計画に関する基本的な方針のことで、武蔵野市のめざすまちの将来像を明確にするとともに、今後のまちづくりの方向性を示したものです。本市では、公募の市民委員とワークショップなどを行いながら平成12年に策定しました。

場所：武蔵野商工会館5階 第1・第2会議室

東京都武蔵野市吉祥寺本町1-10-7 吉祥寺駅北口徒歩5分

定員：25名(申込順) 市内在住・在勤・在学の方

7月1日(木)より申し込み受付開始

※託児をご希望の方は7月9日(金)までにお申し込みください。

参加費：無料

☆第1回、第2回に参加されていない方も是非ご参加ください。

申込み・問い合わせ先：武蔵野市市民協働サロン

180-8777 武蔵野市緑町2-2-28 武蔵野市役所西棟7階

TEL：0422-60-1939 担当：市民協働サロン コーディネーター酒井陽子

(裏面)

森 浩 氏プロフィール



昭和61年 東京大学大学院工学系研究科修了
工学博士

昭和61年 (株)三菱総合研究所入社
平成2年～4年 アジア工科大学院准教授

現在、三菱総合研究所主席研究員、中央大学
大学院公共政策研究科兼任講師で活躍する他、
武蔵野市都市マスタープラン策定委員会、まち
づくり条例検討委員会などに参加

コーディネーター 酒井 陽子 (さかい ようこ)

【主な略歴】

平成19年3月 日本社会事業大学大学院博士前期課程福祉経営計画研究科修了

5月 武蔵野市第四期長期計画調整計画策定委員会副委員長

平成21年4月 武蔵野市市民協働サロン コーディネーターとして勤務

ボランティアセンター武蔵野運営委員、NPO法人武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク理事、
社会福祉士、介護福祉士



この事業は武蔵野市企画政策室企画調整課と市民協働サロンの協働事業です。

連続講座

武蔵野市の市民自治の未来を考える
～新しいパートナーシップのかたち～
報告書

平成 22 年 12 月

発行 武蔵野市企画政策室企画調整課
〒180-8777 東京都武蔵野市緑町 2 丁目 2 番 28 号
電話 0422-60-1801